

2024 年度
調査報告書

東京 23 区内 A 小学校 共同研究
国際化が進む公立小学校における
子どもの運動・スポーツ実態調査

目次

調査概要	1
1. 分析上の「移民」の背景・定義	4
2. 児童票（2～6年生）	9
3. 保護者票（全学年）	31
4. 体力テスト（全学年）	44
5. 体力テストと質問紙調査の関連（2～6年生）	53
A 小学校の調査からみる日本の小学校の国際化に向けた課題	61
（東京大学大学院総合文化研究科 准教授 高橋史子氏 寄稿）	
まとめと考察	63

調査概要

本事業は東京 23 区内にある公立小学校(以下、A 小学校とする)との共同事業である。同校には外国籍の児童、外国で生まれ育った児童、保護者が外国出身の児童など、外国につながる(外国にルーツのある)子どもたちが多く在籍する。ルーツのある国・地域としては、中国やネパールをはじめとするアジアが多いものの、欧米の出身者も含まれ、日本で生まれ育った児童から来日して間もない児童までさまざまである。A 小学校ではこのような多様な背景を強みと捉え、異なる価値観を尊重し、国際的な視野をもって活躍できる児童の育成を目指している。同校には日本語学級が設置され、日本の生活習慣や学校生活に馴染みのない児童、日本語での会話や教科の学習が難しい児童に対して、個人やグループ単位での指導が行われている。ほかにも学力の定着を図る取り組みや、学校行事や地域の伝統を大切に活動も推進し、さらに体力向上につながる活動を検討するにあたり、当財団との共同研究を開始するに至った。

A 小学校ではエビデンスに基づく教育実践のニーズがあったものの、国際化が進んだ小学校における運動・スポーツの研究は非常に少なく、同校の現状も十分に明らかにされていなかった。外国につながる子どもたちは、日本で普段どのような運動・スポーツを経験しているのか。スポーツを通じた国際化、すなわち日本国内でスポーツを通じて国籍を超えた共生が実現されているのか。このような問いのもとに、全校児童および保護者を対象とした質問紙調査を実施し、まずは日常生活における具体的な経験の把握を試みた。

2024 年 3 月に公開した「速報版」では、保護者および 4～6 年生の児童の調査結果を中心に掲載したが、本報告書においては 2～3 年生の回答や体力テストの測定結果も加味した分析・考察を展開する。

1) 調査概要

I 質問紙調査

【調査方法】 学校通しによる自記式調査

【調査時期】 2023 年 10 月

【調査対象】 東京 23 区内にある公立小学校(A 小学校) 1～6 年生の児童および保護者

- ✓ 児童票は 1 年票、2～3 年票、4～6 年票にわけて内容や分量を調整した。
- ✓ 保護者票は全学年共通の内容とした。
- ✓ 各票、日本語版・英語版・中国語版・ネパール語版を作成し、回答しやすい版を選択してもらった。
- ✓ 日本語指導が必要な児童の中には、日本語教室の教員による補助を受けて回答した者もいる。保護者については調査担当者が質問文の意味を説明しながら回答してもらったケースがある。

【主な調査項目(児童)】

全学年共通の項目： 運動・スポーツが好きか/習いごと/生活習慣/遊ぶ場所

2 年生以上に共通の項目： 授業以外で行ったスポーツや運動遊び/運動有能感/好きなスポーツ/学校の授業/体育の単元/生活時間/体験・経験

4 年生以上に共通の項目： スポーツの価値/学校生活/誰かと過ごす時間/得意なこと/保護者との会話/希望進学段階/将来展望/言語アイデンティティ

【主な調査項目(保護者)】

子どもとのスポーツ・運動遊び/子どもの運動能力の認知/子どものスポーツへの期待/子どものスポーツに関する悩み/家庭にあるスポーツ用品/保護者のスポーツ実施頻度/保護者が子どもの頃の運動・スポーツ/保護者の好きなスポーツ/学校選択理由/学校満足度/学校からの連絡/育児や教育の相談先/教育戦略/希望進学段階/家庭の背景(子どもの出生国・日本在住歴、子どもが家庭で話す言語、保護者の第一言語・日本在住歴)

【回収状況】

児童票 :228名(回収率99.1%)うち中国語回答12名、英語回答3名、ネパール語回答3名
保護者票 :222名(回収率96.5%)うち中国語回答31名、英語回答3名、ネパール語回答4名

II 体力テスト

【測定方法】

文部科学省の新体力テストに準拠して、①握力 ②立ち幅跳び ③長座体前屈 ④反復横跳び ⑤上体起こし ⑥50m走 ⑦ソフトボール投げ ⑧20mシャトルランの8項目の測定が実施された。

【測定時期】

2023年6月

【サンプル数】

8項目すべての測定を実施した児童:216名

2) 体制

本研究は以下の体制で実施した。なお、調査および測定は2023年度内に行われており、以下の体制や所属・肩書はすべて2024年3月時点のものである。

A小学校	校長、副校長、主幹教諭、体育主任
公益財団法人 笹川スポーツ財団	政策ディレクター 宮本 幸子 シニア政策オフィサー 松下 由季

各家庭に対してはA小学校より保護者会や書面で説明した上で同意を得ている。また、質問紙の作成や分析結果の解釈にあたっては、移民や外国籍児童・生徒の教育からみるナショナリズム・エスニシティ研究を専門とする高橋史子氏(東京大学大学院総合文化研究科准教授)から助言をいただいた。高橋氏および同研究科の複数の研究者は、これまでA小学校における研修等にも携わっていたため、学校や対象者の同意のもと共同研究として二次分析を実施している。

高橋氏には、運動・スポーツにとどまらない日本の小学校の課題を考察し、本報告書に寄稿いただいた(p.61)。その他の原稿は、笹川スポーツ財団がすべての執筆を担当した。

3) 調査結果を読む上での注意点

本報告書では、外国につながる(外国にルーツのある)家庭の児童・保護者の調査結果を「移民」、「移民」に該当しない家庭の児童・保護者の調査結果を「日本人」として区分している(具体的な定義は1章5節を参照)。「移民」は国連の定義によると「通常居住しているのとは異なる国に1年以上居住している人」であるが、本報告では日本での居住期間が1年未満の児童・保護者も含まれており、あくまで分析上の暫定的な定義として用いている。学術論文等においても、「移民」の定義は居住国をもとに考える場合、国籍をもとに考える場合など、状況に応じてさまざまである。

また、本調査は一地点・一校での事例研究であり、「移民」と「日本人」の結果の違いや解釈をほかのケースにそのまま適用できるものではない点に注意が必要である。

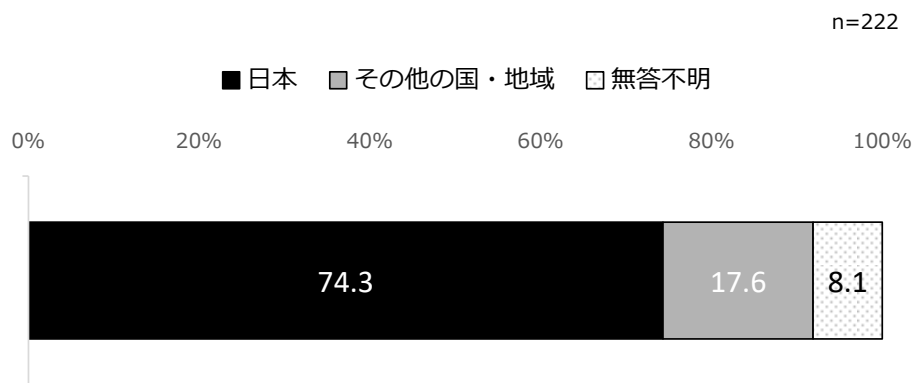
1. 分析上の「移民」の背景・定義

本章では外国につながる(外国にルーツのある)家庭について、調査結果から背景を確認し、2～5章の分析における「移民」の定義を行う。なお、これらの項目は回答者への配慮から「差し支えなければお答えください」と依頼しており、無回答率が高い点には留意が必要である。

1.1 子どもの出生国・日本在住歴

子どもの出生国についてたずねたところ、「日本」が7割強、「その他の国・地域」が2割弱となった(図表 1-1)。「その他の国・地域」を選んだ人に具体的な国名・地域名を記入してもらったところ、最多は「中国」で、「ネパール」「フィリピン」などが続いた。さらに子どもの日本在住歴も記入してもらったところ、1年(1年未満も含む)～12年に分布し、平均値は4.5年、最多は「1年(未満も含む)」であった。

図表 1-1 子どもの出生国・日本在住歴

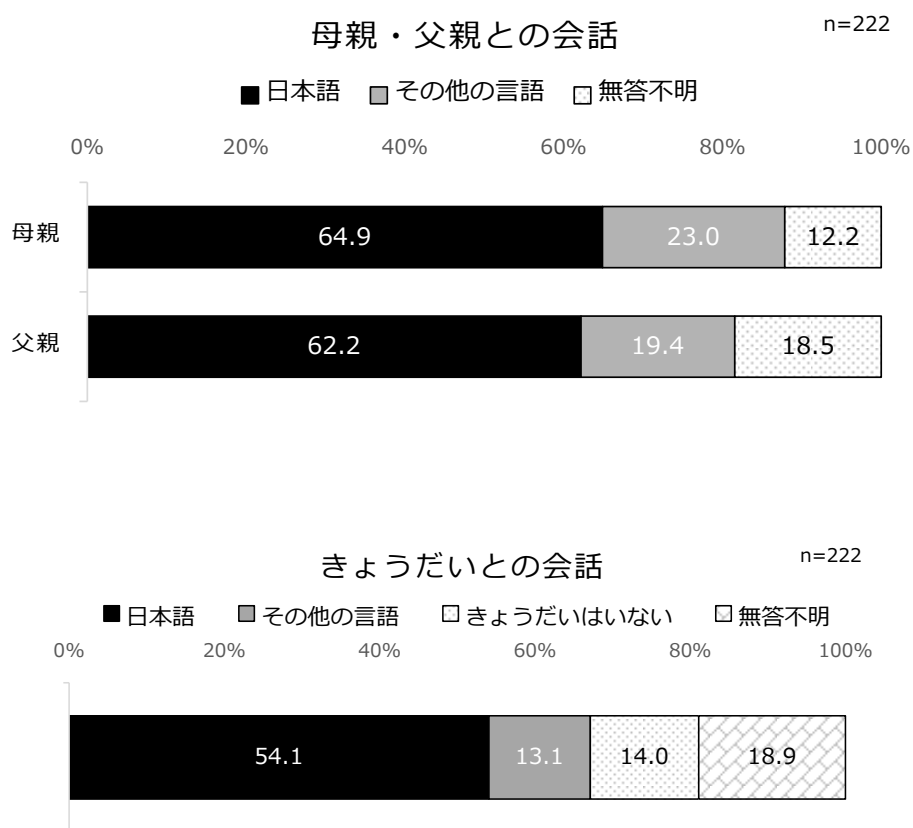


1.2 子どもが家庭で話す言語

調査対象の子どもが、家庭で母親（または母親に代わる方）・父親（または父親に代わる方）・きょうだいと、それぞれ主にどの言語で話すかを保護者にたずねた（図表 1-2）。日本語かその他の言語かで選択してもらったところ、母親との会話では 23.0%、父親との会話では 19.4%が「その他の言語」で主に話していた。具体的な言語を記入してもらくと、母親・父親ともに中国語が最多で、ネパール語・英語などが続いた。きょうだいと「その他の言語」で主に話すのは 13.1%であった。

なお、母親との会話・父親との会話の両方において主に「その他の言語」で話すのは 17.6%、いずれかの親と「その他の言語」で話すのは 24.8%であった（図表割愛）。

図表 1-2 子どもが家庭で話す言語

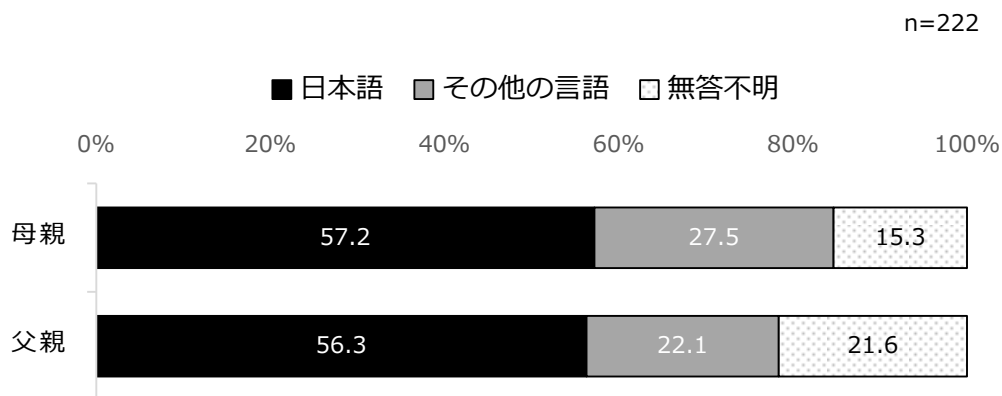


1.3 保護者の第一言語・日本在住歴

保護者の第一言語(最初に習得した言語)をたずねたところ、「その他の言語」を第一言語とするのは、母親の 27.5%、父親の 22.1%であった(図表 1-3)。「その他の言語」を選んだ人に具体的な言語を記入してもらったところ、母親・父親ともに中国語が最も多かった。母親では英語・ネパール語・タガログ語などが続き、父親ではネパール語・英語などが続いた。いずれも複数の言語を記入するケースがみられた。なお、両親ともに第一言語が「その他の言語」である割合は 19.8%、いずれかの親の第一言語が「その他の言語」である割合は 29.7%であった(図表割愛)。

第一言語で「その他の言語」を選んだ人には、日本在住歴を年単位で記入してもらった。在住歴は1年(1年未満を含む)～45年に分布し、平均値は15年であった。母親・父親ともに最多は「20年」で、回答の2割程度を占めた。母親では「10年」が続き、「1年」と「7年」が同数で並んだ。父親では「8年」「10年」「15年」が多かった。

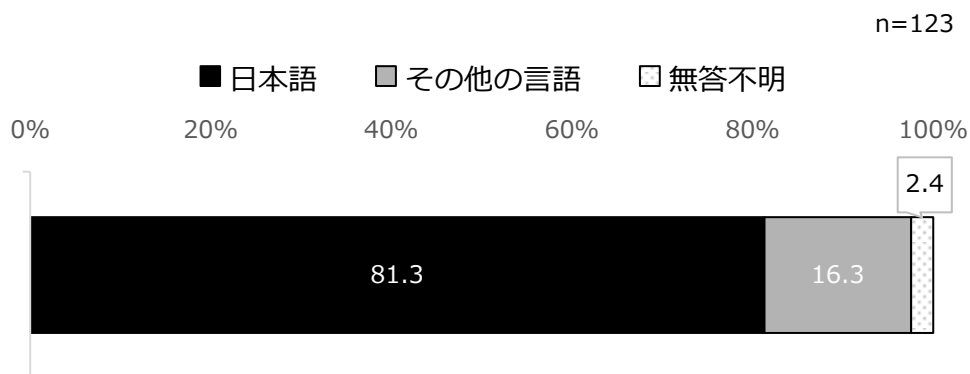
図表 1-3 保護者の第一言語



1.4 児童の言語アイデンティティ

4～6年生の児童に対しては、自分の気持ちや考えを最も伝えやすい言語をたずねた(図表 1-4)。「日本語」と「その他の言語」から選択してもらったところ、約 8 割が日本語、16.3%が「その他の言語」であった。具体的な言語では中国語が最も多く、ネパール語・英語と続き、複数の言語を記入する児童もみられた。

図表 1-4 児童の言語アイデンティティ

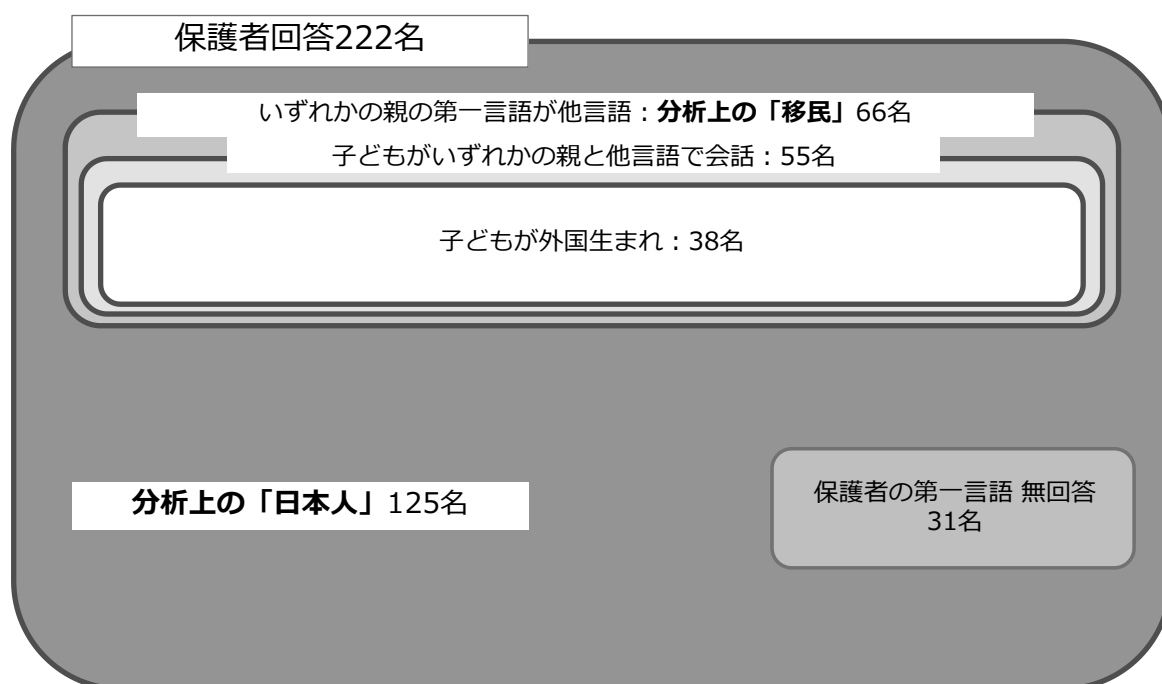


1.5 本報告で用いる「移民」「日本人」の定義

本調査においては「子どもの出生国」「子どもが家庭で話す言語」「保護者の第一言語」の3項目を、児童や家庭の背景(外国とのつながり)を識別する変数として用いることができる。本報告の分析では、いずれかの保護者(ひとり親の場合も含む)の第一言語が「その他の言語(日本語以外)」であるケースを「移民」、すべての保護者(ひとり親の場合も含む)の第一言語が「日本語」の場合を「日本人」として区分する。調査概要にも記したとおり、ここでの「移民」「日本人」はあくまで本調査における分析上の定義にすぎず、日本全体の「移民」に適用できる知見ではない点に注意が必要である。なお、第一言語をたずねる質問に無回答であったケースは除外して分析したため、「移民」の保護者は66名、「日本人」の保護者は125名となる。児童に関しては、分析対象とする学年や使用するデータ(質問紙・体力テスト)によって人数が異なるため、各図表に記載されたサンプル数を参照されたい。

回答を分析すると、子どもが外国生まれの児童・保護者、子どもがいずれかの親と他言語で会話する児童・保護者はすべて「移民」に含まれていた(図表 1-5)。主要調査項目については「子どもの出生国」「子どもが家庭で話す言語」を用いた区分でも分析したが、大きな違いはみられなかった。

図表 1-5 本報告で用いる「移民」「日本人」の定義



2. 児童票(2～6年生)

調査では全学年の児童から回答を得ているが、本章では共通する質問項目が多い 2～6 年生の回答を分析する。

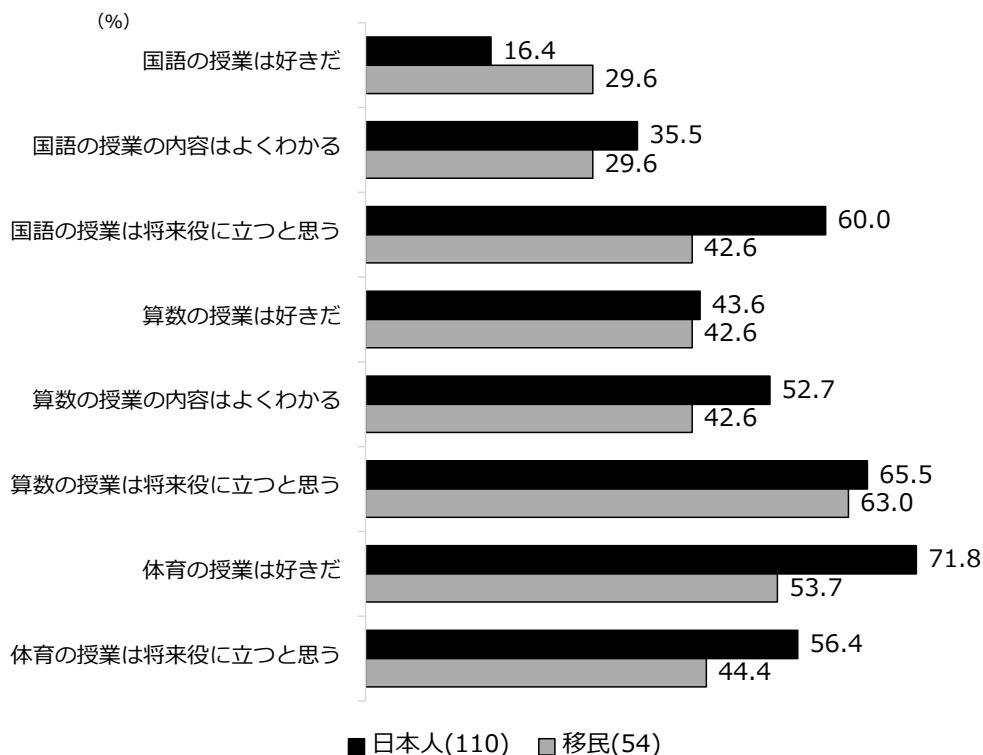
2.1 学校の授業

国語・算数・体育の授業について、好きかどうかや将来役に立つと思うかをたずねた(図表 2-1)。なお国語に関しては、その時間に日本語教室で授業を受けている児童は、日本語教室について回答をしている。

「好きだ」という設問に対して「とてもあてはまる」と回答した割合をみると、日本人は国語 16.4%、算数 43.6%、体育 71.8%となり、体育を好きと思う割合が圧倒的に高い。一般的に児童を対象とした調査では体育や図工などの実技・技能系教科の人気が高い結果が多く、A 小学校においても同様の傾向といえる。移民では国語 29.6%、算数 42.6%、体育 53.7%であり、国語が好きな割合は日本人を上回る一方で、体育に関しては下回っている。

国語・算数のみでたずねている「よくわかる」という設問に対する回答をみると、国語は日本人 35.5% > 移民 29.6%、算数は日本人 52.7% > 移民 42.6%と、いずれも日本人のほうが高かった。また、「将来役に立つと思う」という設問に対する回答では、国語は日本人 60.0% > 移民 42.6%、体育は日本人 56.4% > 移民 44.4%と差が生じたのに対して、算数はいずれも 6 割台であった。

図表 2-1 学校の授業



注) 「とてもあてはまる」の%。

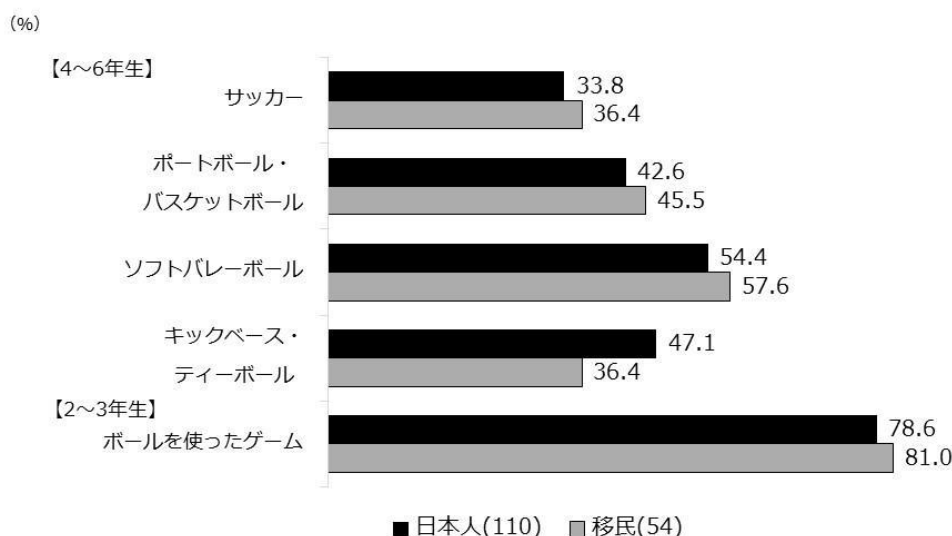
2.2 体育の単元

体育の各単元の内容について、好きかどうかをたずねた。学習指導要領上では2学年単位で具体的な内容が示されているが、本調査では2～3年の2学年、4～6年の3学年に対してそれぞれ1種類の質問紙を使用するため、学年を超えてある程度共通する内容を取り上げている。調査項目では指導要領上の単元名をそのまま使用せず、児童が理解しやすい具体的な運動・スポーツの名称で表現し、「ゲーム(4年)/ボール運動(5・6年)」に関しては実際にA小学校で実施している球技を入れている。学年ごとに項目が異なるボールゲームやゲーム、ボール運動に関する単元を図表2-2-1に、全学年に共通してたずねている単元を図表2-2-2にまとめた。

まず図表2-2-1をみると、2～3年生の「ボールを使ったゲーム」を「好き」と回答した割合は日本人78.6%、移民81.0%といずれも高く、図表2-2-2を含めたすべての単元の中で最も人気が高い。4～6年生をみると、「サッカー」(日本人33.8%、移民36.4%、以下同)、「ポートボール・バスケットボール」(42.6%、45.5%)、「ソフトバレーボール」(54.4%、57.6%)の3つは日本人と移民の差がみられず、「キックベース・ティーボール」では日本人47.1%>移民36.4%と、日本人のほうが10.7ポイント高かった。図表は割愛するが4～6年生のみのデータをみると、すべての単元の中で日本人の1位は「ソフトバレーボール」、3位は「キックベース・ティーボール」、移民の2位は「ソフトバレーボール」、3位は「ポートボール・バスケットボール」となり、ボールを使用する単元を好きな児童が多い。

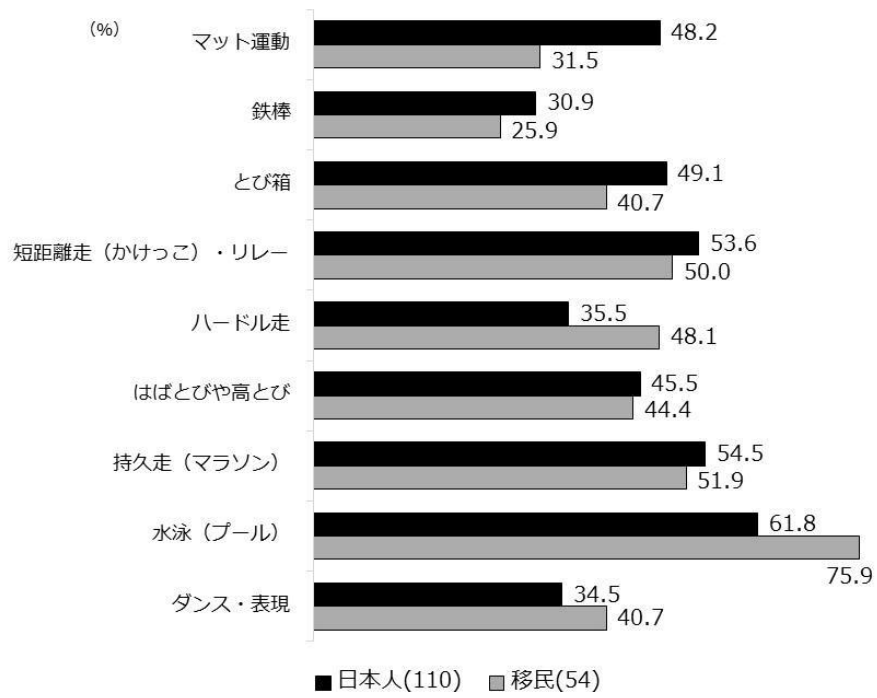
次に図表2-2-2でその他の単元を「好き」と回答した割合をみると、「水泳」は共通して人気が高く、日本人61.8%<移民75.9%と、特に移民で好きな児童が多いことがわかる。移民には宗教上の理由で水泳の授業が受けられない児童もいるものの、来日してはじめてプールを経験し、楽しむ児童も多いと推察される。また、「ハードル走」(35.5%<48.1%)や「ダンス・表現」(34.5%<40.7%)も、移民のほうが高い傾向にある。一方で「マット運動」(48.2%>31.5%)、「鉄棒」(30.9%>25.9%)、「とび箱」(49.1%>40.7%)といった器械運動の単元では、いずれも日本人より移民の割合が下回り、5～17ポイント程度の差がみられる。馴染みのない児童も多く、移民の指導における難しさが浮かび上がる。

図表2-2-1 体育の単元(ボールゲーム/ゲーム/ボール運動)



注)「好き」の%。

図表 2-2-2 体育の単元(その他の単元)



注 1) 「好き」の%。

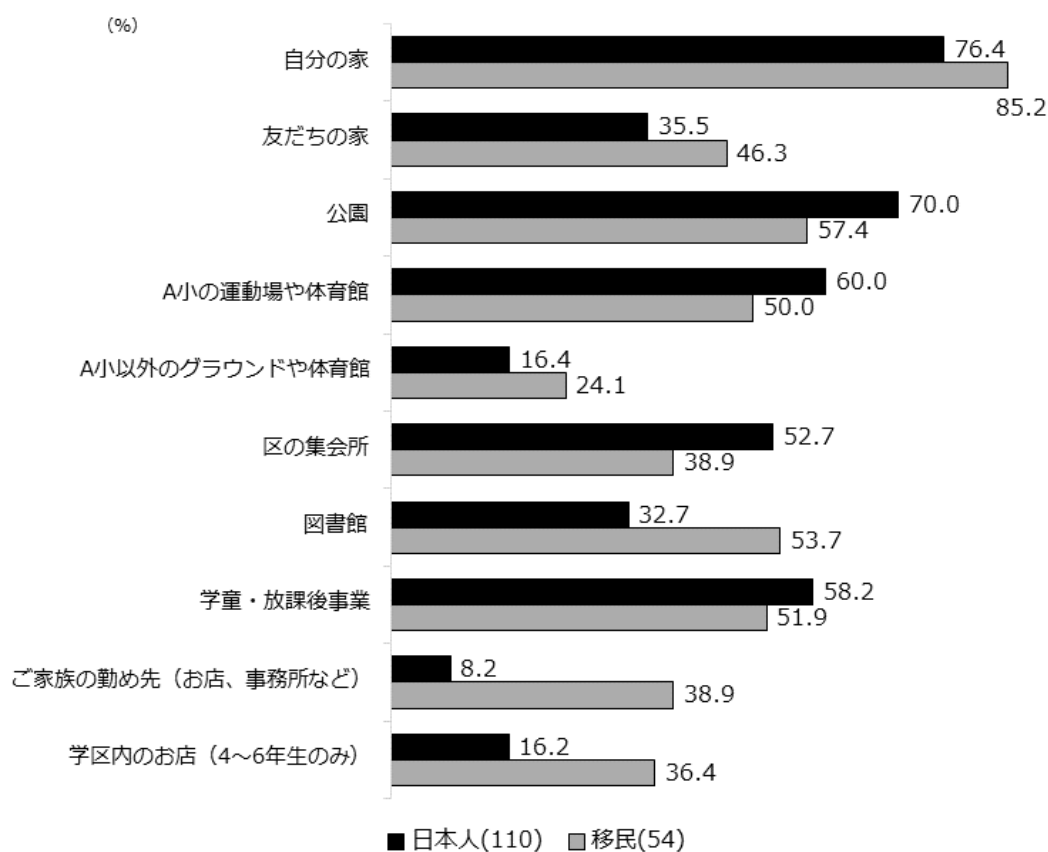
注 2) 「ハードル走」は 3 年生以上にたずねている。

2.3 遊ぶ場所

普段遊んでいる場所についてたずね、「よく遊ぶ」と「ときどき遊ぶ」の合計値を示した(図表 2-3)。日本人では「自分の家」76.4%、「公園」70.0%、「A 小の運動場や体育館」60.0%の順に多く、移民では「自分の家」85.2%、「公園」57.4%、「図書館」53.7%と続く。両者の差をみると、「自分の家」「友だちの家」「A 小以外のグラウンドや体育館」「図書館」「学区内のお店(4~6年生のみ)」は、移民のほうが10~20ポイント程度高い。「ご家族の勤め先」は日本人が8.2%であるのに対して移民では38.9%に達し、家族が勤めるお店や事務所で時間を過ごす児童が多いことがわかる。

反対に「公園」「A 小の運動場や体育館」「区の集会所」では、日本人のほうが10ポイント以上高い。多くの日本人児童が遊ぶ公的な場所では、移民の児童が日本人ほどには遊んでいないという事実は、子どものスポーツや運動遊びの環境を考える上で重要な知見といえる。

図表 2-3 遊ぶ場所



注 1) 「よく遊ぶ」+「ときどき遊ぶ」の%。

注 2) 「区の集会所」「学童・放課後事業」については、質問紙では具体的な施設名や事業名でたずねている。「区の集会所」は集会室や子どもの遊び場などを備えた区の施設である。

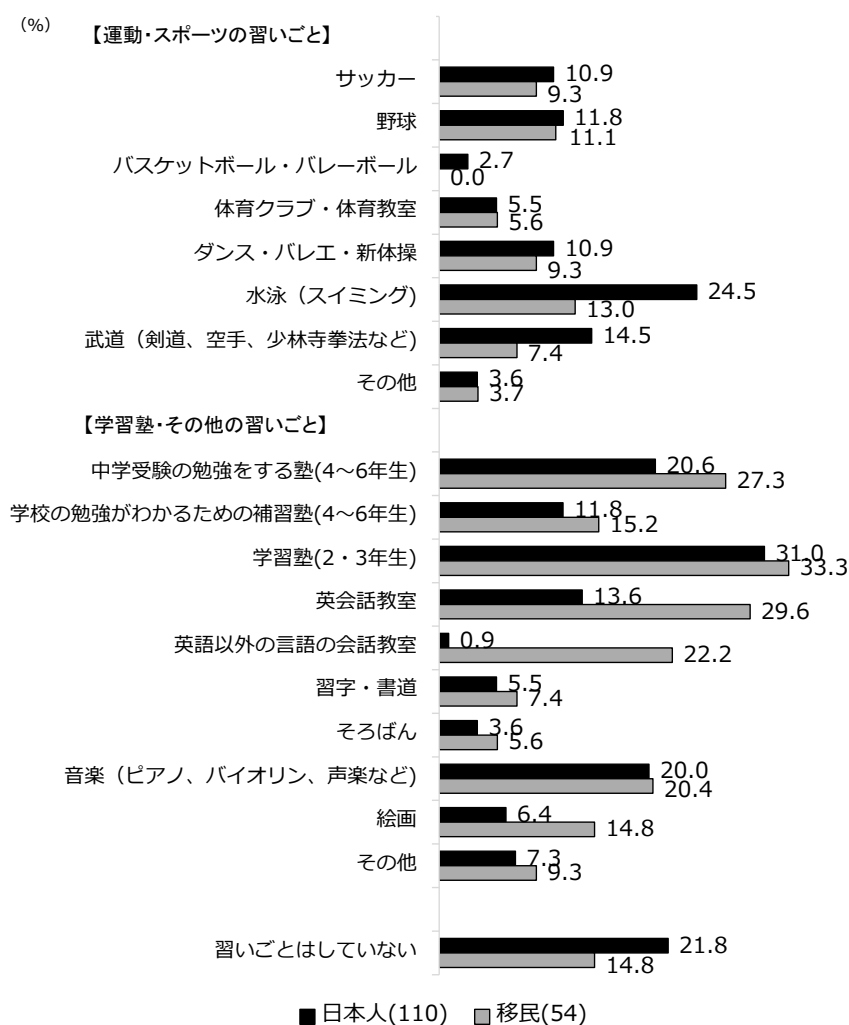
2.4 習いごと

現在行っている習いごとについてたずねた(図表 2-4)。運動・スポーツの習いごとを種目ごとにみると、「水泳(スイミング)」で日本人 24.5%>移民 13.0%と10ポイント以上の差がみられた。そのほかは「サッカー」(日本人 10.9%、移民 9.3%、以下同)、「野球」(11.8%、11.1%)、「ダンス・バレエ・新体操」(10.9%、9.3%)など同程度の実施率であった。1 種目でも習いごとをしている児童の割合を算出すると、日本人 55.8%>移民 36.8%となり、日本人のほうがスポーツの習いごとをしている割合が高い(図表割愛)。

学習塾・その他の習いごとにおいて、特に差が大きいのは「英会話教室」(日本人 13.6%<移民 29.6%)、「英語以外の言語の会話教室」(日本人 0.9%<移民 22.2%)で、いずれも移民のほうが多く実施している。「英語以外の言語」には中国語など保護者の第一言語が含まれ、母語教育の役割を果たしている可能性がある。移民の保護者も子どもにスポーツの習いごとをさせたいという意向は強い(3章8節参照)ものの、これらの教室との両立や時間の調整が難しい側面もあると考えられる。

なお、「習いごとはしていない」の割合は日本人 21.8%>移民 14.8%と、7.0ポイントの差がみられた。

図表 2-4 習いごと



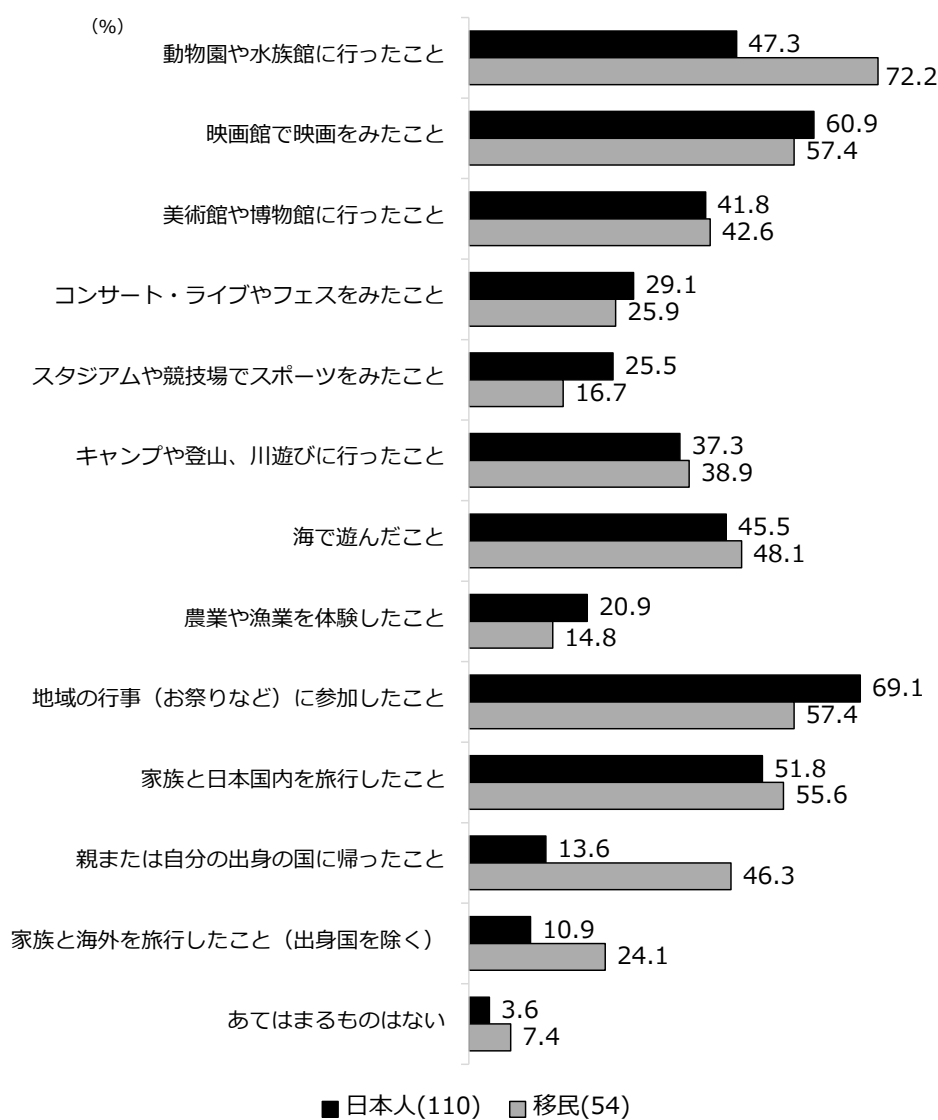
注) 複数回答。

2.5 体験

児童が調査当時の学年になってから体験したことのある内容(学校行事は除く)を複数回答形式でたずねた(図表 2-5)。「映画館で映画をみたこと」「地域の行事に参加したこと」「家族と日本国内を旅行したこと」の3項目は、日本人・移民ともに5割以上の児童が経験している。両者の差がみられた項目に着目すると、「地域の行事に参加したこと」(日本人 69.1% > 移民 57.4%、以下同)は日本人のほうが、「動物園や水族館に行ったこと」(47.3% < 72.2%)、「親または自分の出身の国に帰ったこと」(13.6% < 46.3%)、「家族と海外を旅行したこと」(10.9% < 24.1%)は移民のほうが、それぞれ10ポイント以上高い。

「スタジアムや競技場でスポーツをみたこと」は日本人 25.5%、移民 16.7%であった。性別との関連をみると、男子では日本人 33.3%、移民 23.5%、女子では日本人 17.9%、移民 5.0%となり(図表割愛)、特に移民の女子はスポーツを直接観戦する体験が非常に少ない。

図表 2-5 体験



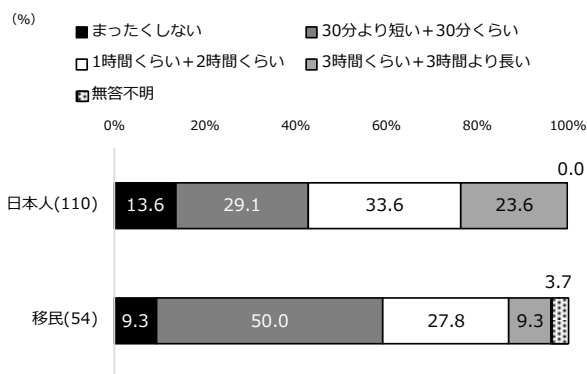
注) 複数回答。

2.6 スポーツや運動遊びの時間

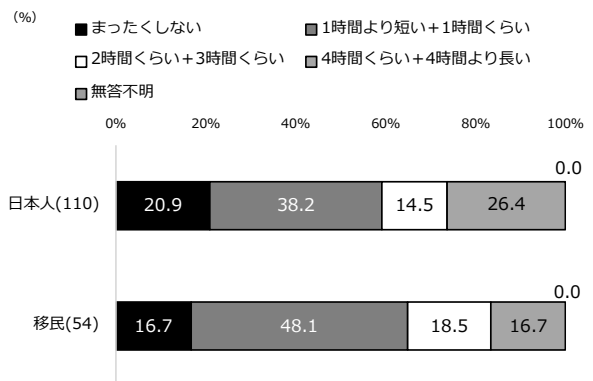
平日および休日に、「スポーツや体を動かす遊びをする」時間についてたずねた。平日の時間をみると、「まったくしない」の割合は日本人 13.6%、移民 9.3%と大きな差はみられない(図表 2-6-1)。「30 分より短い」と「30 分くらい」を合わせた割合が、日本人 29.1%<移民 50.0%と移民のほうが多いのに対して、「3 時間くらい」「3 時間より長い」を合わせた長時間層は、日本人 23.6%>移民 9.3%と日本人のほうが多い。休日の時間をみると、日本人では「まったくしない」20.9%、「4 時間くらい+4 時間より長い」26.4%と、まったくしない層と長時間層がいずれも 2 割を超えているのに対して、移民ではそれらが 1 割台にとどまり、「1 時間より短い+1 時間くらい」が 48.1%と高くなっている(図表 2-6-2)。日本人に長時間層が多い点は、スポーツの習いごとの有無や種目(2 章 4 節参照)も影響していると推察される。

また、それぞれの回答をもとに、週あたりのスポーツや運動遊びの時間を算出した(図表 2-6-3)。具体的には、「まったくしない」を 0 分、「1 時間より短い」を 30 分のように数値に換算し、「平日の時間×5+休日の時間×2」の計算を行っている。こちらも「0 分」の割合は日本人 10.9%、移民 9.6%とほぼ変わらないが、「1~420 分未満(1 日平均 1 時間未満)」は日本人 33.6%<移民 50.0%と移民が多く、「1,260 分以上(1 日平均 3 時間以上)」は日本人 21.8%>移民 7.7%と日本人のほうが多くなっている。

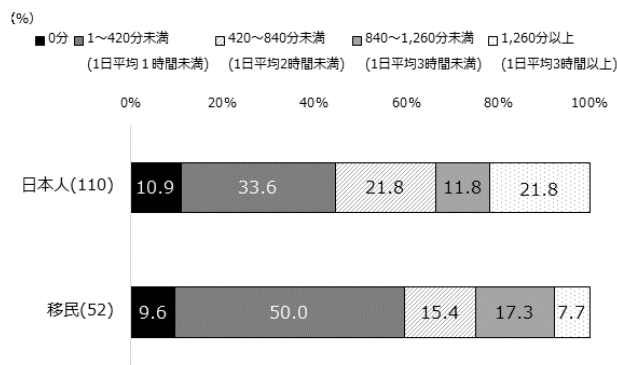
図表 2-6-1 平日のスポーツや運動遊びの時間



図表 2-6-2 休日のスポーツや運動遊びの時間



図表 2-6-3 週あたりのスポーツや運動遊びの時間



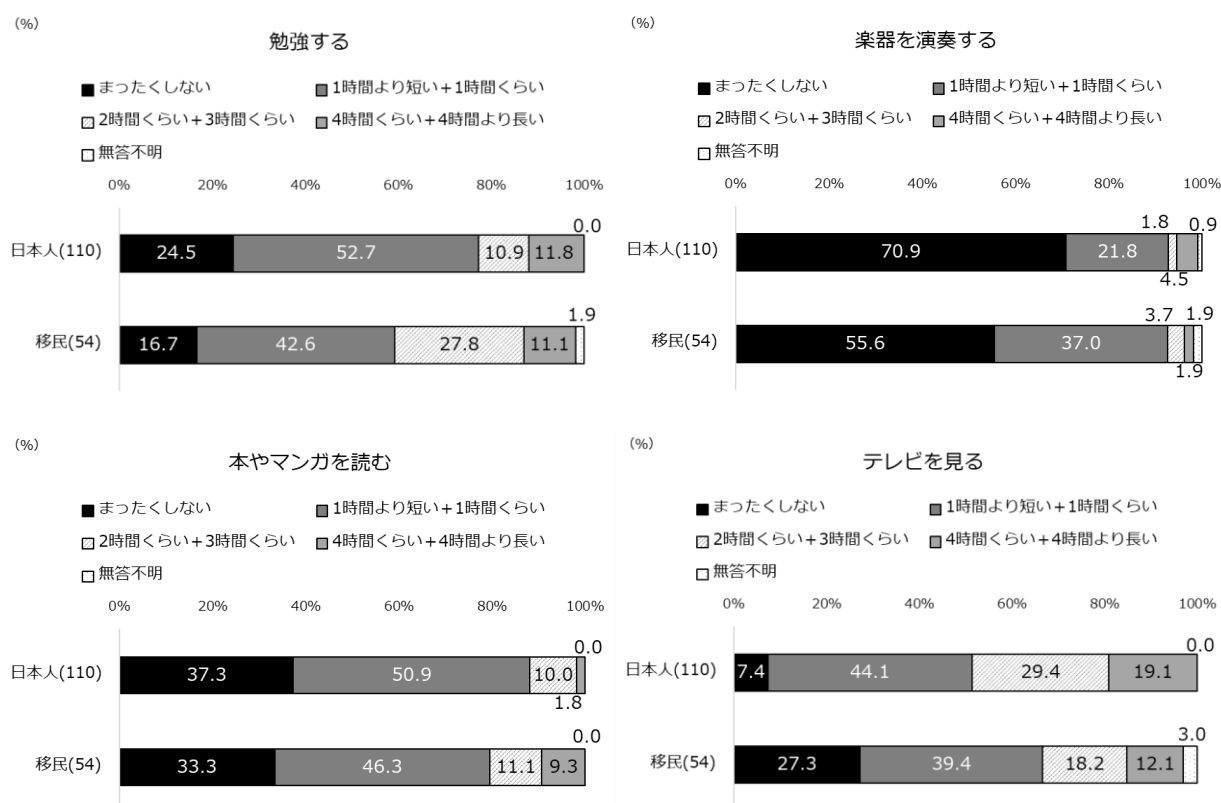
2.7 休日の生活時間

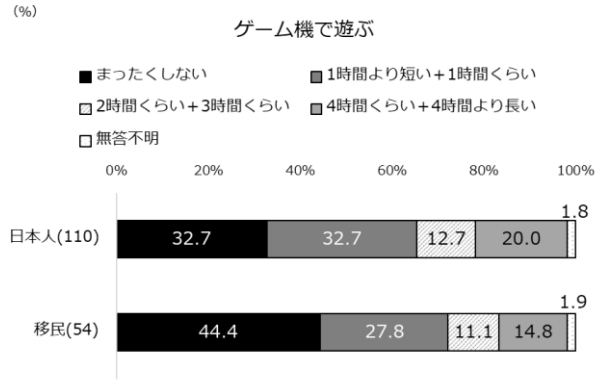
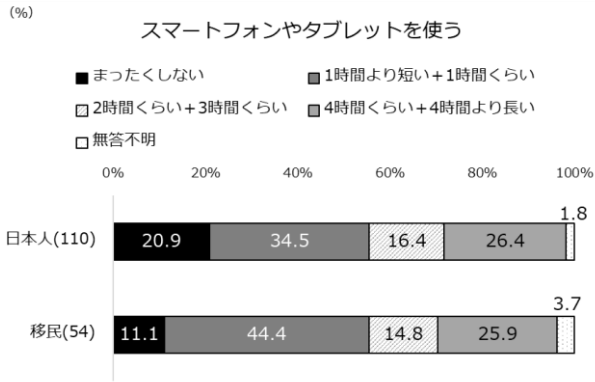
休日の生活時間について、「まったくしない」から「4 時間より長い」までの 7 段階でたずね、いくつかのカテゴリーを合計した値を示した(図表 2-7)。なお、「スポーツや体を動かす遊びをする」は前節で言及したため割愛する。

「勉強する」をみると、日本人では「まったくしない」24.5%、「1 時間より短い+1 時間くらい」52.7%で合わせて 77.2%であるのに対して、移民では「まったくしない」16.7%、「1 時間より短い+1 時間くらい」42.6%で合わせて 59.3%であり、日本人のほうが勉強時間は短い傾向にある。2 章 4 節の習いごとでも示したように、移民には中学受験に向けて塾に通っている児童が多い点も影響していると考えられる。ほかに移民のほうが時間の長い傾向にある項目としては、「楽器を演奏する」「本やマンガを読む」があげられる。「楽器を演奏する」では「まったくしない」が日本人 70.9%>移民 55.6%であるのに対して、「1 時間より短い+1 時間くらい」は日本人 21.8%<移民 37.0%と約 15 ポイントの差がみられる。「本やマンガを読む」では「4 時間くらい+4 時間より長い」が日本人 1.8%<移民 9.3%と、移民のほうが高い。

一方で、「テレビを見る」「ゲーム機で遊ぶ」は、日本人のほうがより長時間に分布している。「まったくしない」の割合に着目すると、「テレビを見る」は日本人 7.4%<移民 27.3%、「ゲーム機で遊ぶ」は日本人 32.7%<移民 44.4%で、これらのメディアに接触していない児童は移民のほうが多い。

図表 2-7 休日の生活時間



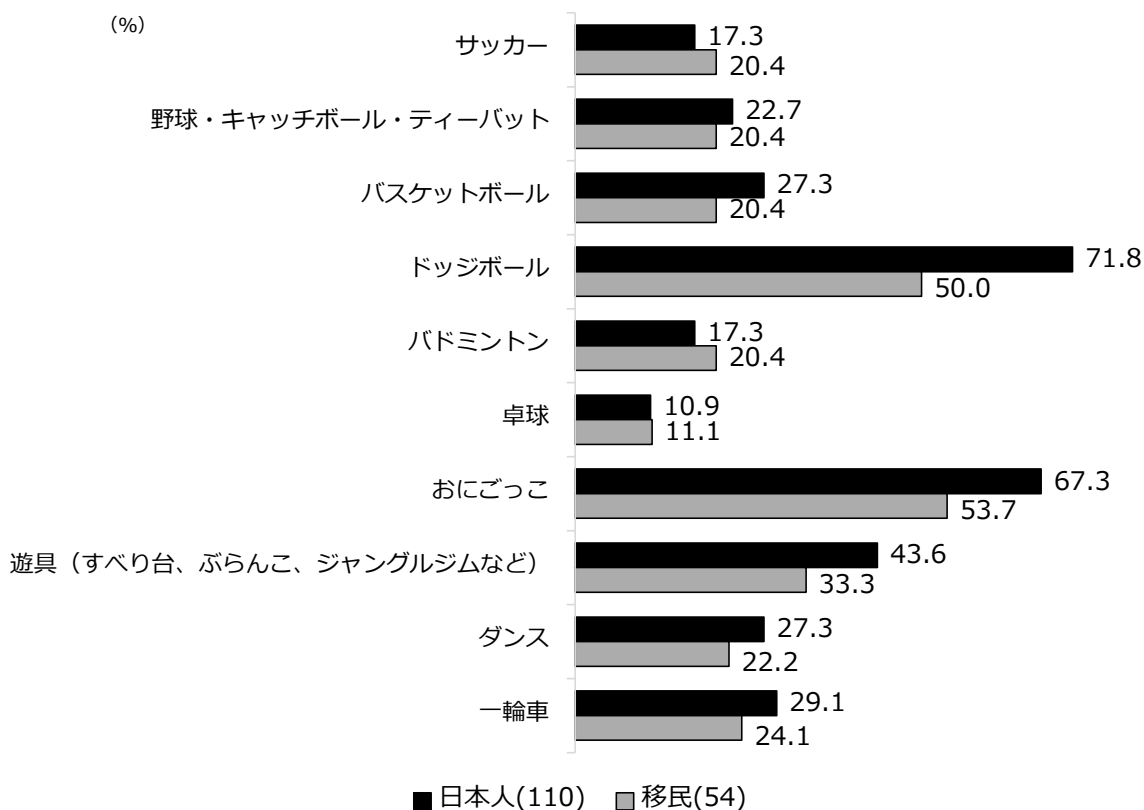


2.8 授業以外で行ったスポーツや運動遊び

児童が調査当時の学年になってから学校の授業以外で行ったスポーツや運動遊びの内容をたずねた。最初に休み時間や放課後など、学校で行った内容を示す(図表 2-8-1)。「ドッジボール」(日本人 71.8% > 移民 50.0%、以下同)と「おにごっこ」(67.3% > 53.7%)はいずれも 5 割以上の児童が実施しているものの、日本人と移民の差がみられ、特にドッジボールでは 20 ポイント以上の開きが確認された。ドッジボールやおにごっこには多様なルールがあり、途中で変更されることもある。言語の壁がある児童にとっては、状況の違いや変化を理解するのが難しく、参加しづらい側面があると推察される。また、1 種目でも行ったか否かで分けて学校でのスポーツ・運動遊びの実施率を算出したところ、日本人 90.0% > 移民 70.4%と、約 20 ポイントの差がみられた(図表 2-8-2)。2~3 年生と 4~6 年生に分けて分析すると、2~3 年生では日本人 95.2% > 移民 81.0%、4~6 年生では 86.8% > 63.6%となり、高学年になると移民の約 4 割が校内でスポーツや運動遊びに参加していないことがわかる。

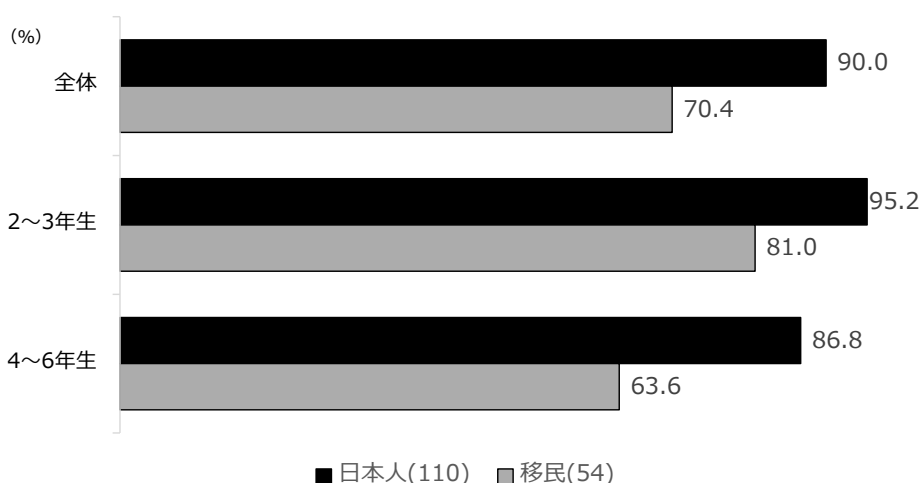
図表 2-8-1 および図表 2-8-2 を性別で分析した結果を図表 2-8-3 に示した。日本人男子は「ドッジボール」や「学校におけるスポーツや運動遊びの実施率」などの割合がほかの群と比べて高く、日本人女子は「おにごっこ」や「遊具」などが相対的に高かった。移民女子では「バドミントン」や「ダンス」の割合がほかの群より高いものの、移民男子は全体的に低い数値が多く、「学校におけるスポーツや運動遊びの実施率」は 67.6%と各群の中で最も低い。同じように学校で遊んでいても属性によって内容に差がみられ、特に男子や高学年の移民児童では運動遊びの実施率が低い状況が浮かび上がった。

図表 2-8-1 学校で行ったスポーツや運動遊び



注) 複数回答。

図表 2-8-2 学校で行ったスポーツや運動遊びの有無



注) 図表 2-8-1 に掲載した種目のうちいずれかを実施している児童の割合を示している。

図表 2-8-3 学校で行ったスポーツや運動遊び(性別)

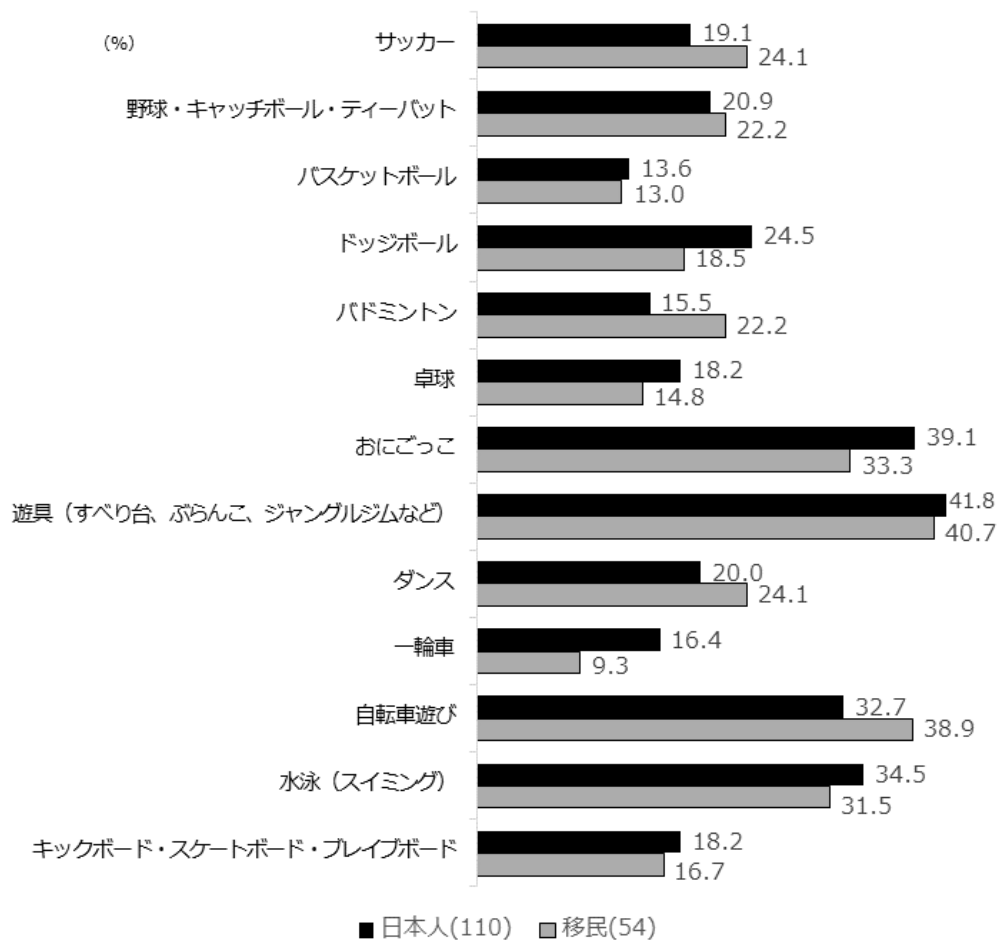
		(%)	
		男子	女子
サッカー	日本人	24.1	10.7
	移民	20.6	20.0
野球・キャッチボール・ティーバット	日本人	27.8	17.9
	移民	23.5	15.0
バスケットボール	日本人	29.6	25.0
	移民	23.5	15.0
ドッジボール	日本人	81.5	62.5
	移民	58.8	35.0
バドミントン	日本人	13.0	21.4
	移民	17.6	25.0
卓球	日本人	11.1	10.7
	移民	11.8	10.0
おにごっこ	日本人	61.1	73.2
	移民	47.1	65.0
遊具(すべり台、ぶらんこ、 ジャングルジムなど)	日本人	40.7	46.4
	移民	32.4	35.0
ダンス	日本人	24.1	30.4
	移民	14.7	35.0
一輪車	日本人	22.2	35.7
	移民	17.6	35.0
学校におけるスポーツや運動遊びの実施率	日本人	90.7	89.3
	移民	67.6	75.0

注) 複数回答。「学校におけるスポーツや運動遊びの実施率」は、「サッカー」から「一輪車」までのいずれかを実施している児童の割合を示している。

続いて、学校以外の場合(習いごとを含む)で行ったスポーツや運動遊びの内容を示す(図表 2-8-4)。日本人のほうが多いものとして、「ドッジボール」(日本人 24.5% > 移民 18.5%、以下同)、「おにごっこ」(39.1% > 33.3%)、「一輪車」(16.4% > 9.3%)があげられる。ただし、図表 2-8-1 で示した学校で行ったスポーツや運動遊びに比べると差は小さい。また、「サッカー」(19.1% < 24.1%)、「バドミントン」(15.5% < 22.2%)、「自転車遊び」(32.7% < 38.9%)は移民のほうが多い。1 種目でも行ったか否かで分けて、学校以外でのスポーツ・運動遊びの実施率を算出したところ、日本人 71.8% < 移民 77.8%と、移民のほうが高かった(図表 2-8-5)。2~3 年生と 4~6 年生に分けてみると、低学年では移民の実施率が高く、高学年ではほぼ同じであった。学校内の遊びのように高学年になるほど差が開く傾向はみられず、種目には若干の違いがあるものの、日本人も移民も同程度の児童が学校以外でスポーツや運動遊びを行っていることがわかった。

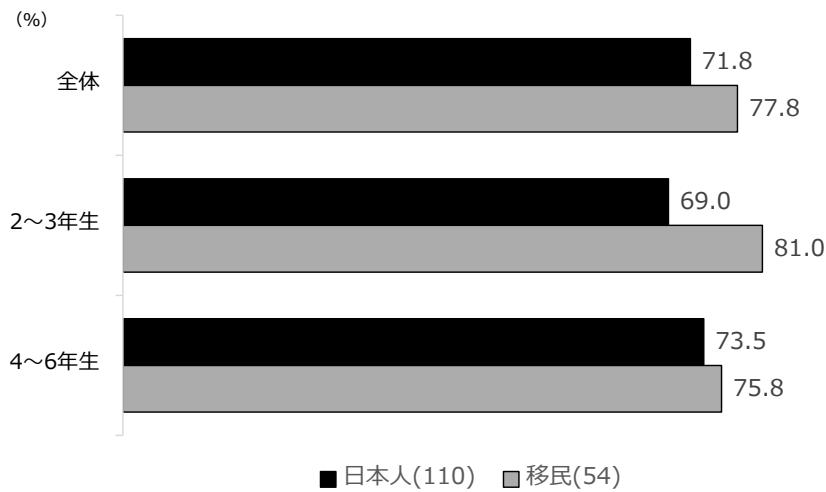
図表 2-8-4 および図表 2-8-5 を性別で分析した結果を図表 2-8-6 に示した。校内のスポーツや運動遊びと同様に、「ドッジボール」は日本人男子が最も高く、「おにごっこ」は日本人女子で最も高いといった傾向はみられるが、群ごとの差は比較的小さい。移民女子では「遊具」「ダンス」「自転車遊び」の割合がほかの群に比べて高く、移民男子では「バドミントン」や「水泳」が高い割合を示した。「学校以外におけるスポーツや運動遊びの実施率」はいずれの群も 6~7 割台となり、日本人と移民の間で顕著な差はみられなかった。

図表 2-8-4 学校以外で行ったスポーツや運動遊び



注) 複数回答。

図表 2-8-5 学校以外で行ったスポーツや運動遊びの有無



注) 図表 2-8-4 に掲載した種目のうちいずれかを実施している児童の割合を示している。

図表 2-8-6 学校以外で行ったスポーツや運動遊び(性別)

		(%)	
		男子	女子
サッカー	日本人	33.3	5.4
	移民	32.4	10.0
野球・キャッチボール・ティーバット	日本人	35.2	7.1
	移民	29.4	10.0
バスケットボール	日本人	20.4	7.1
	移民	17.6	5.0
ドッジボール	日本人	29.6	19.6
	移民	20.6	15.0
バドミントン	日本人	13.0	17.9
	移民	23.5	20.0
卓球	日本人	20.4	16.1
	移民	14.7	15.0
おにごっこ	日本人	38.9	39.3
	移民	35.3	30.0
遊具(すべり台、ぶらんこ、 ジャングルジムなど)	日本人	42.6	41.1
	移民	35.3	50.0
ダンス	日本人	14.8	25.0
	移民	20.6	30.0
一輪車	日本人	9.3	23.2
	移民	11.8	5.0
自転車遊び	日本人	29.6	35.7
	移民	32.4	50.0
水泳(スイミング)	日本人	37.0	32.1
	移民	38.2	20.0
キックボード・スケートボード・ ブレイブボード	日本人	13.0	23.2
	移民	14.7	20.0
学校以外におけるスポーツや運動遊びの実施率	日本人	75.9	67.9
	移民	79.4	75.0

注) 複数回答。「学校以外におけるスポーツや運動遊びの実施率」は、「サッカー」から「キックボード・スケートボード・ブレイブボード」までのいずれかを実施している児童の割合を示している。

2.9 好きな運動・スポーツ

児童に「するのが好きな運動やスポーツ」「見るのが好きな運動やスポーツ」「好きなスポーツ選手」を自由記述で回答してもらった。それぞれ該当する種目や選手がある場合にはひとつずつ記入するように指示したが、複数の種目や選手を記入するほか、無記入や「なし」という回答もみられた。複数回答はすべて集計に含め、上位3つをランキング形式でまとめたのが図表2-9である。

「するのが好きな運動やスポーツ」については、日本人の児童90名、移民の児童44名が具体的に記入していた。日本人では「野球」が12名と最も多く、「サッカー」11名、「水泳」「ドッジボール」10名と続いた。移民の1位は「水泳」11名で、「サッカー」「バドミントン」7名が続く。移民では、体育の単元でも水泳を好きとする児童が多く(2章2節参照)、人気の高さが示されている。また、日本人では「ドッジボール」、移民では「バドミントン」と、普段行う種目があげられている(2章8節参照)。

「見るのが好きな運動やスポーツ」については、日本人の児童66名、移民の児童34名が具体的に記入していた。日本人では「野球」20名が特に多く、「サッカー」9名、「バスケットボール」8名が続く。移民では「サッカー」9名、「野球」7名、「テニス」4名と、サッカーが多いものの回答が比較的分散している。「するのが好きな運動やスポーツ」と合わせて、日本人の児童には野球が好きな子どもが多いことがわかる。

「好きなスポーツ選手」については、日本人の児童38名、移民の児童19名が回答した。日本人・移民ともに「大谷翔平」が1位となり、ほかの選手を上回る回答数であった。

図表2-9 好きな運動・スポーツ

	するのが好きな運動やスポーツ			見るのが好きな運動やスポーツ			好きなスポーツ選手		
	順位	種目	回答数	順位	種目	回答数	順位	選手名	回答数
日本人	1	野球	12	1	野球	20	1	大谷翔平	9
	2	サッカー	11	2	サッカー	9	2	岡本和真	2
	3	水泳	10	3	バスケットボール	8	2	羽生結弦	2
	3	ドッジボール	10				2	リオネル・メッシ	2
移民	1	水泳	11	1	サッカー	9	1	大谷翔平	7
	2	サッカー	7	2	野球	7		(以下は各1名が回答)	
	2	バドミントン	7	3	テニス	4			

2.10 運動有能感・楽しさ

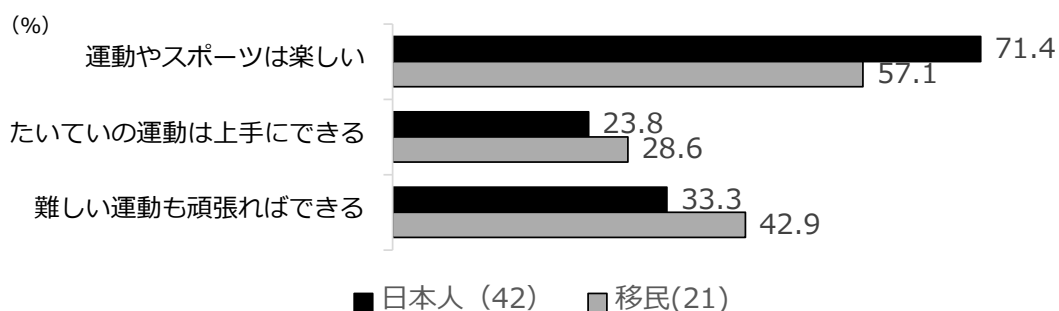
運動有能感や運動・スポーツの楽しさについてたずねた。参照している運動有能感の尺度に低学年版と高学年版があることから、本調査では2～3年生と4～6年生で異なる表現を用い、かつ回答負荷を考慮して2～3年生の項目数をより少なくしている。

2～3年生はサンプル数が限られるものの、「運動やスポーツは楽しい」は日本人71.4%>移民57.1%と日本人のほうが高いのに対して、統制感の1項目である「難しい運動も頑張ればできる」では33.3%<42.9%と移民のほうが高かった(図表2-10-1)。

4～6年生では「運動やスポーツが好きだ」「運動やスポーツをするのは楽しい」で日本人が6割を超えたのに対して、移民は5割を下回った。身体的有能さの認知(「たいていの運動は上手にできる」「運動やスポーツには自信がある」)や統制感(「難しい運動でも努力すればできる」「練習をすれば、必ず記録はのびる」)では顕著な差はみられなかった(図表2-10-2)。

受容感をみると、「運動をしていると、友だちがはげましてくれる」の差は小さかったが、「先生がはげましてくれる」では日本人29.4%>移民18.2%と10ポイント以上の差がみられた。校内でスポーツや運動遊びに参加していない児童(2章8節参照)や、日本語での会話が難しい児童がいる状況での指導の難しさを示す結果でもある。

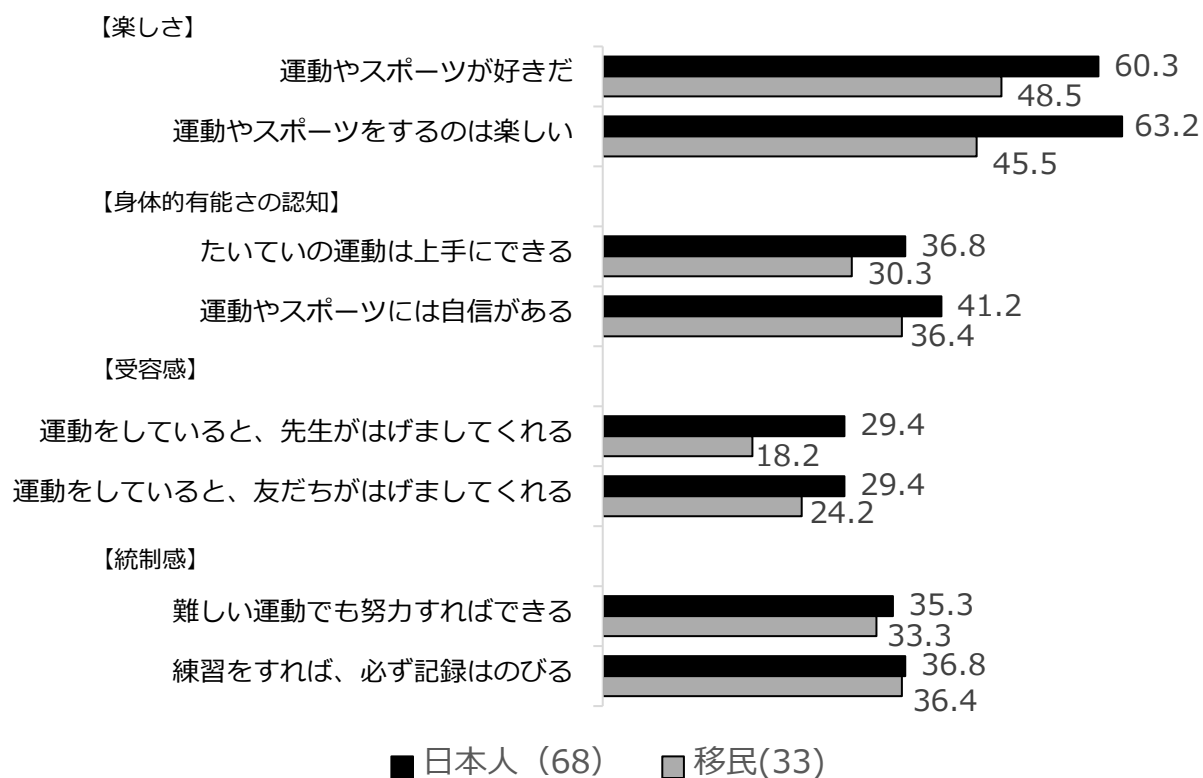
図表2-10-1 運動有能感・楽しさ(2～3年生)



注)「とてもあてはまる」の%。

図表 2-10-2 運動有能感・楽しさ(4~6年生)

(%)

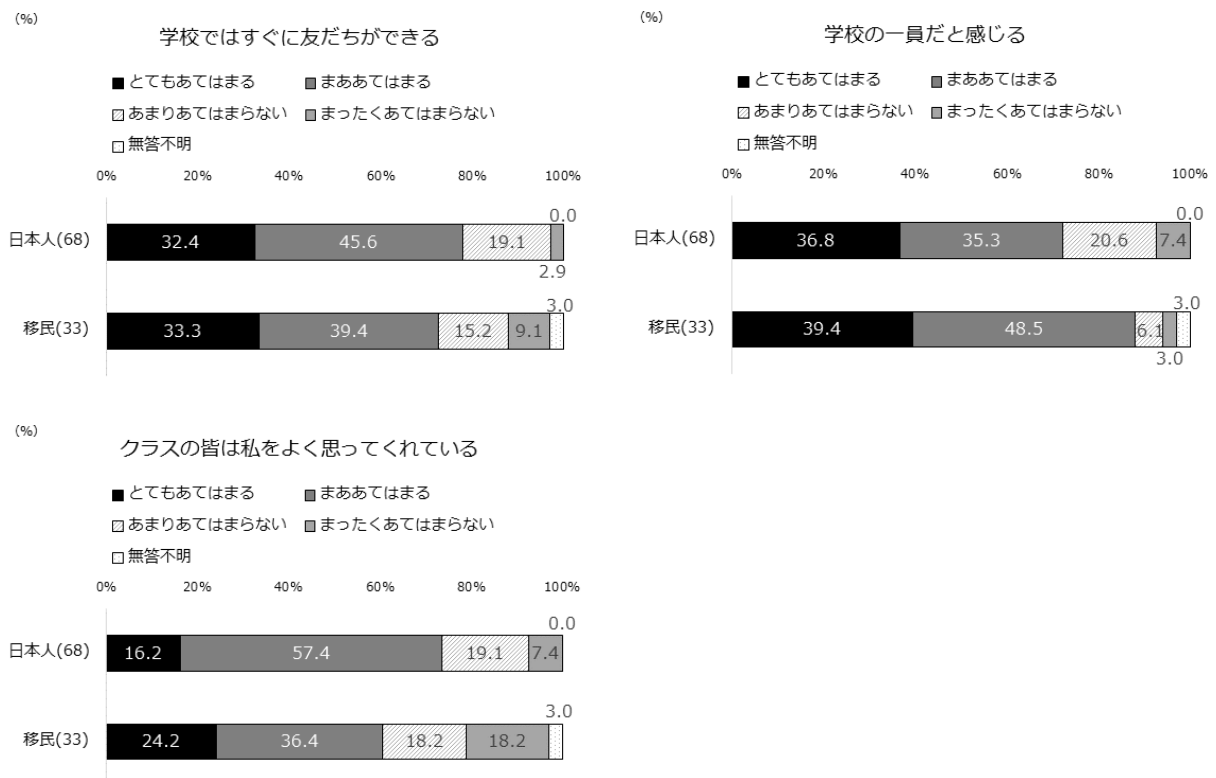


注)「とてもあてはまる」の%。

2.11 学校生活

ここからは4～6年生のみにたずねている項目の結果を紹介する。PISA2022(OECD 生徒の学習到達度調査)における学校への所属感の質問項目を参照し、A 小学校での生活についてたずねた(図表 2-11)。「学校ではすぐに友だちができる」は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計値を算出すると、日本人 78.0%、移民 72.7%で大きな差はみられない。「学校の一員だと感じる」で同様に合計値を確認すると、日本人 72.1%、移民 87.9%で、移民のほうが約 15 ポイント高い。「クラスの皆は私をよく思ってくれている」では日本人 73.6%、移民 60.6%と日本人のほうが高い。移民では 24.2%が「とてもあてはまる」と回答する一方で、「まったくあてはまらない」も 18.2%であり、同級生に受け入れられていると感じる児童とそうでない児童がいることがわかる。

図表 2-11 学校生活



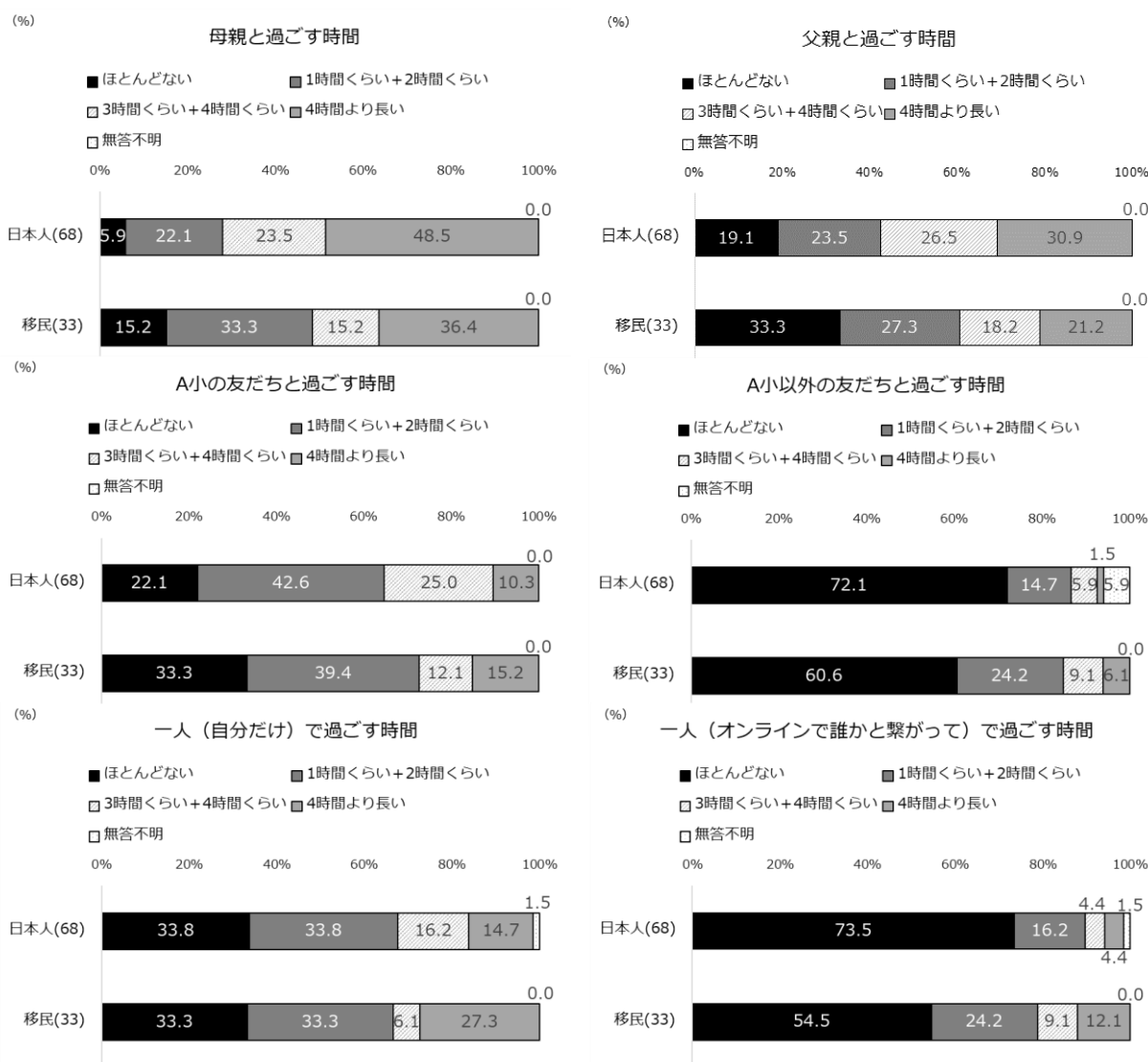
2.12 誰かと過ごす時間

放課後に誰とどのくらいの時間を一緒に過ごしているのかをたずねた(図表 2-12)。就寝中は除き、家族や親族に関して一緒に暮らしていない場合には「ほとんどない」を選択してもらっている。

母親と過ごす時間について、「4 時間より長い」は日本人では 48.5%と半数近くに達する一方で、移民では 36.4%にとどまり、「ほとんどない」「1 時間くらい+2 時間くらい」が相対的に高かった。父親と過ごす時間も同様の傾向がみられる。友だちと過ごす時間をみると、A 小学校の友だちに関しては移民では「ほとんどない」が 33.3%と日本人に比べて高い一方で、「4 時間より長い」児童も 15.2%いる。A 小学校以外の学校の友だちと過ごす時間をみると、移民では「ほとんどない」が 60.6%で日本人よりも約 10 ポイント低く、「4 時間より長い」は 6.1%である。総じて日本人と移民の児童が友だちと過ごす時間には明確な長短の差はないものの、移民では A 小学校以外の学校の友だちと過ごしている児童がやや多い特徴が見出せる。

最後に一人で過ごす時間をみると、自分だけで過ごす時間は移民で「4 時間より長い」が 27.3%と多い傾向にある。また、一人だがオンラインで誰かとつながって過ごす時間は、「ほとんどない」が日本人よりも約 20 ポイント低い 54.5%で、「4 時間より長い」は 12.1%である。

図表 2-12 誰かと過ごす時間

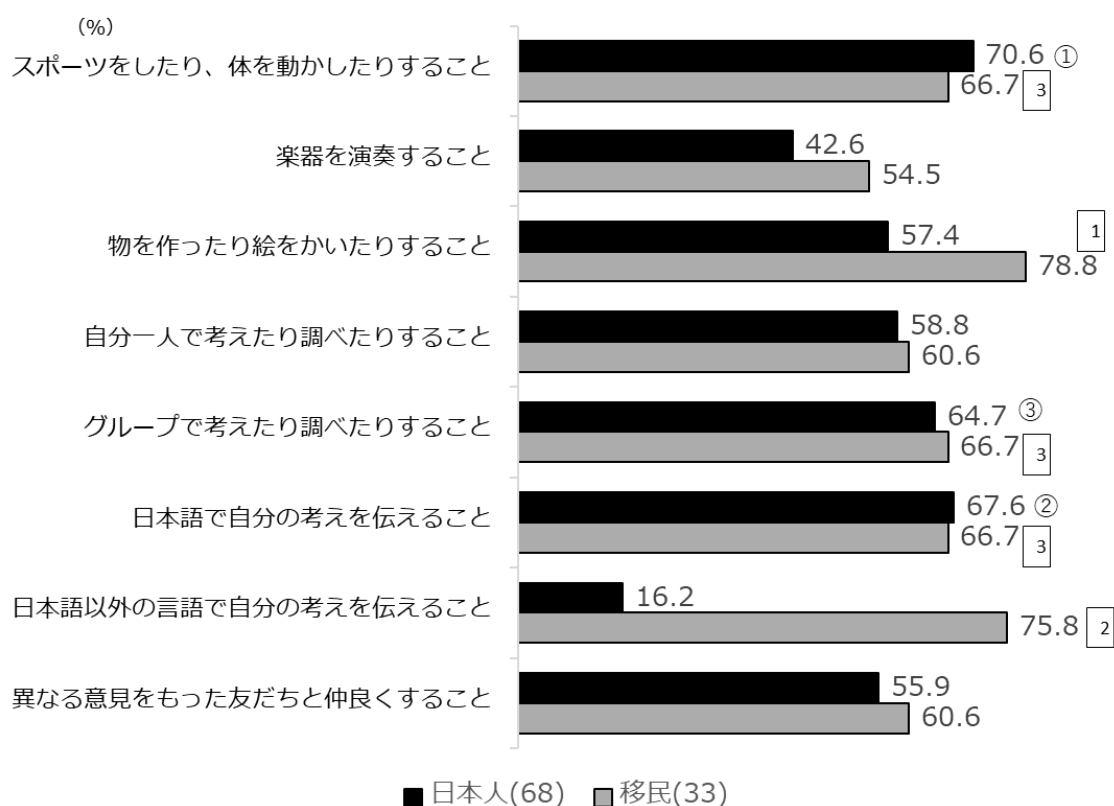


2.13 得意なこと

子どもたちが得意だと感じることや苦手だと感じることをたずね、「とても得意」と「やや得意」の合計値を示した(図表 2-13)。日本人では「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」70.6%、「日本語で自分の考えを伝えること」67.6%、「グループで考えたり調べたりすること」64.7%の順に多く、移民では「物を作ったり絵をかいたりすること」78.8%、「日本語以外の言語で自分の考えを伝えること」75.8%、「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」「グループで考えたり調べたりすること」「日本語で自分の考えを伝えること」66.7%であった。

全体的に移民の児童は「得意」と回答する割合が高い。特に「日本語以外の言語で自分の考えを伝えること」は日本人を約 60 ポイント上回るが、「日本語で自分の考えを伝えること」では両者の差はみられない。

図表 2-13 得意なこと



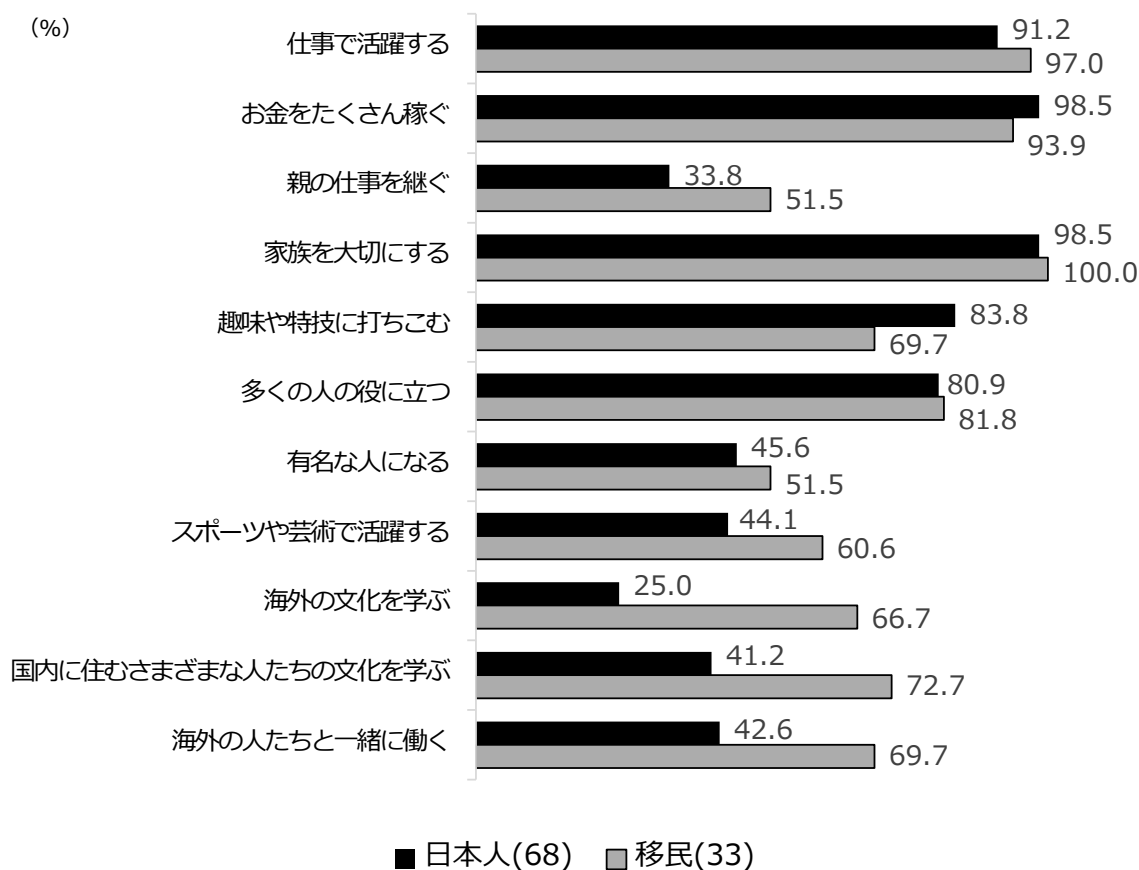
注 1) 「とても得意」+「やや得意」の%。

注 2) 日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1~3 の番号を付している。

2.14 将来のイメージ

「あなたは大人になったとき、どのように過ごしたいと思いますか」とたずねた(図表2-14)。日本人・移民ともに、「仕事で活躍する」(日本人 91.2%、移民 97.0%、以下同)「お金をたくさん稼ぐ」(98.5%、93.9%)「家族を大切にする」(98.5%、100.0%)「多くの人の役に立つ」(80.9%、81.8%)の数値が高い点は共通している。「趣味や特技に打ちこむ」(83.8% > 69.7%)は日本人のほうが 14.1 ポイント高く、「親の仕事を経営」(33.8% < 51.5%)「スポーツや芸術で活躍する」(44.1% < 60.6%)「海外の文化を学ぶ」(25.0% < 66.7%)「国内に住むさまざまな人たちの文化を学ぶ」(41.2% < 72.7%)「海外の人たちと一緒に働く」(42.6% < 69.7%)などは移民のほうが高い。特に外国の文化、国内の多様な文化に対する意識で差が大きく、移民の子どもたちには、国際的な視野や文化の多様性への意識をもっている児童が多いことがうかがえる。

図表 2-14 将来のイメージ

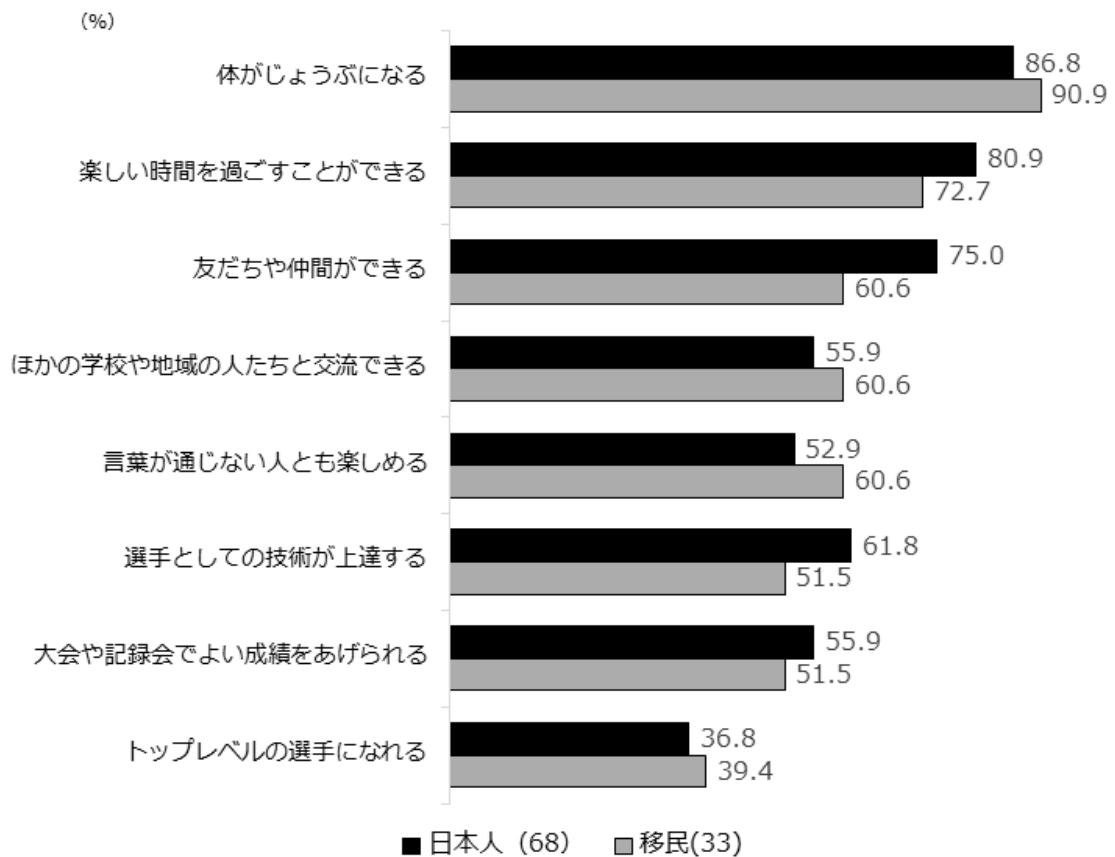


注) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

2.15 スポーツの価値

「あなたがスポーツをしたら、次のことができますか」という質問文を用いて、スポーツの価値についてたずねた(図表 2-15)。日本人・移民ともに「体がじょうぶになる」(日本人 86.8%、移民 90.9%)、「楽しい時間を過ごすことができる」(日本人 80.9%、移民 72.7%)が高く、ほとんどの児童が肯定している。ほかの項目もおよそ日本人と移民の傾向は共通しているが、「友だちや仲間ができる」は日本人 75.0%>移民 60.6%と、約 15 ポイントの差がみられた。一方で「ほかの学校や地域の人たちと交流できる」「言葉が通じない人とも楽しめる」はいずれも移民は 60.6%となり、日本人をわずかに上回る結果であった。

図表 2-15 スポーツの価値



注) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

コラム① 体育の授業

2 学期のある日、ソフトバレーボールをもとにしたゲーム(ネット型のボール運動)の授業を見学した。指導要領上、5～6 年生では「ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること」が目標に掲げられている。この授業でも、冒頭で教員が児童に対し、今日のゲームのルールについて意見を求める場面があった。教員はボードなどを用いて視覚的に伝える工夫をしているが、この授業には通訳が同行しておらず、発言するのは日本語でスムーズにやり取りできる児童のみであった。ルールが決定すると、まずは各自がボールを持ち、自由にトスなどの練習をする時間が設けられた。この時間になると、日本語の会話が難しい児童が、目を輝かせて夢中になる様子がみられた。しかし、いざゲームが始まると、一人は教員の横で得点ボードをめくる係を担当していた。

体育の授業を通じて、異なる背景をもつ児童同士がスポーツを楽しむ力を育むのが理想であるが、現実には、日本語でコミュニケーションが可能な児童を中心に授業が進行する。現行の体育の枠組みの中で可能な対応を模索するとともに、体育以外のスポーツの場面で可能な取り組みを検討する必要がある。

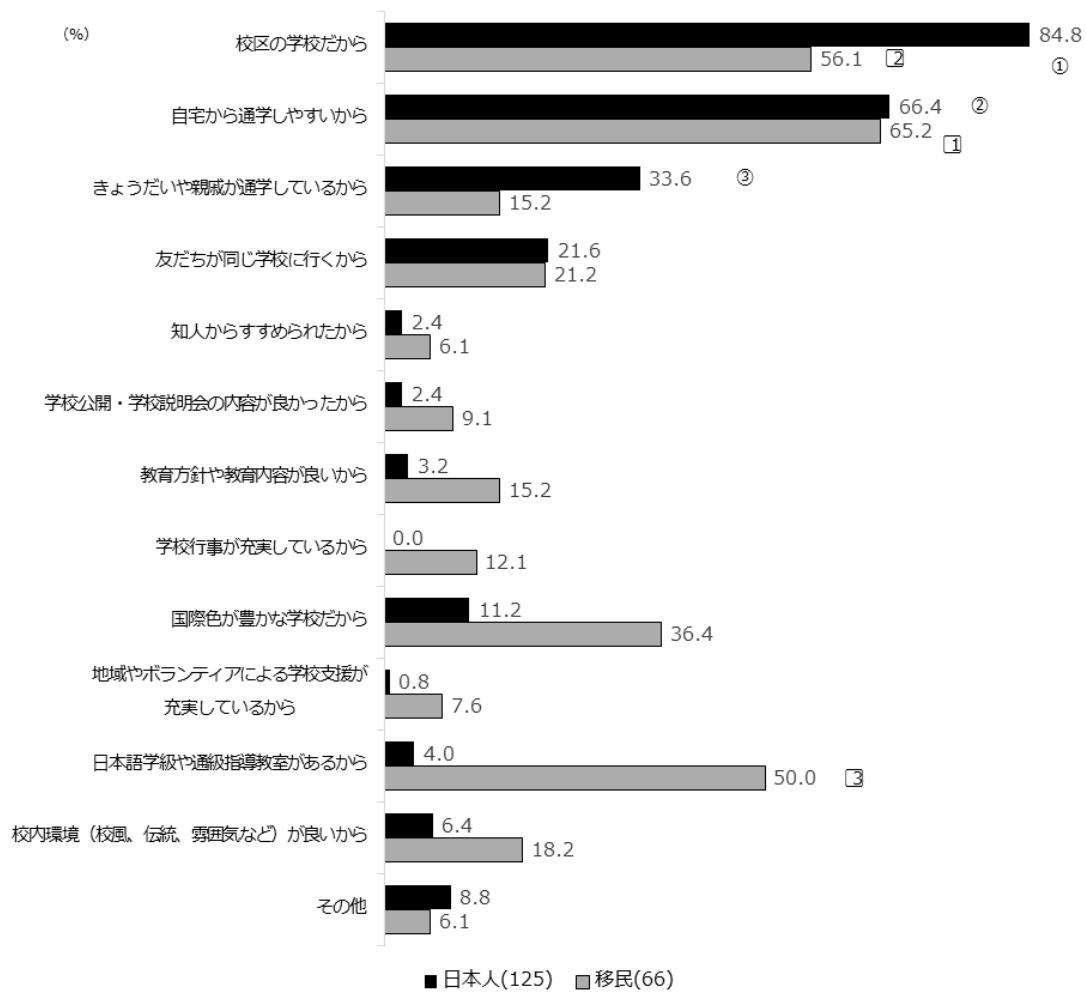
3. 保護者票(全学年)

3.1 学校選択理由

区では学校選択制を実施しており、A 小学校でも 2 割強の保護者が入学前にほかの学校の情報収集や入学の検討をしている(日本人 29.6%、移民 22.7%、図表割愛)。子どもと保護者がどのような理由で A 小学校を選択したのか、複数回答でたずねた(図表 3-1)。

日本人では「校区の学校だから」84.8%、「自宅から通学しやすいから」66.4%、「きょうだいや親戚が通学しているから」33.6%の順に多く、地元の小学校であるために選ばれている様子がうかがえる。「その他」の具体的な記述でも、家族の母校だからという回答が複数みられた。一方で移民では、「自宅から通学しやすいから」65.2%、「校区の学校だから」56.1%に「日本語学級や通級指導教室があるから」50.0%や「国際色が豊かな学校だから」36.4%が続く。そのほかにも「教育方針や教育内容が良いから」(日本人 3.2%<移民 15.2%)、「校内環境が良いから」(日本人 6.4%<移民 18.2%)などでも差がみられ、移民のほうが A 小学校の具体的な特徴を選択理由にあげる傾向がみられる。

図表 3-1 学校選択理由



注1) 複数回答。

注2) 日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1~3 の番号を付している。

注3) 通級指導教室については、質問紙では A 小学校の具体的な名称を入れてたずねている。

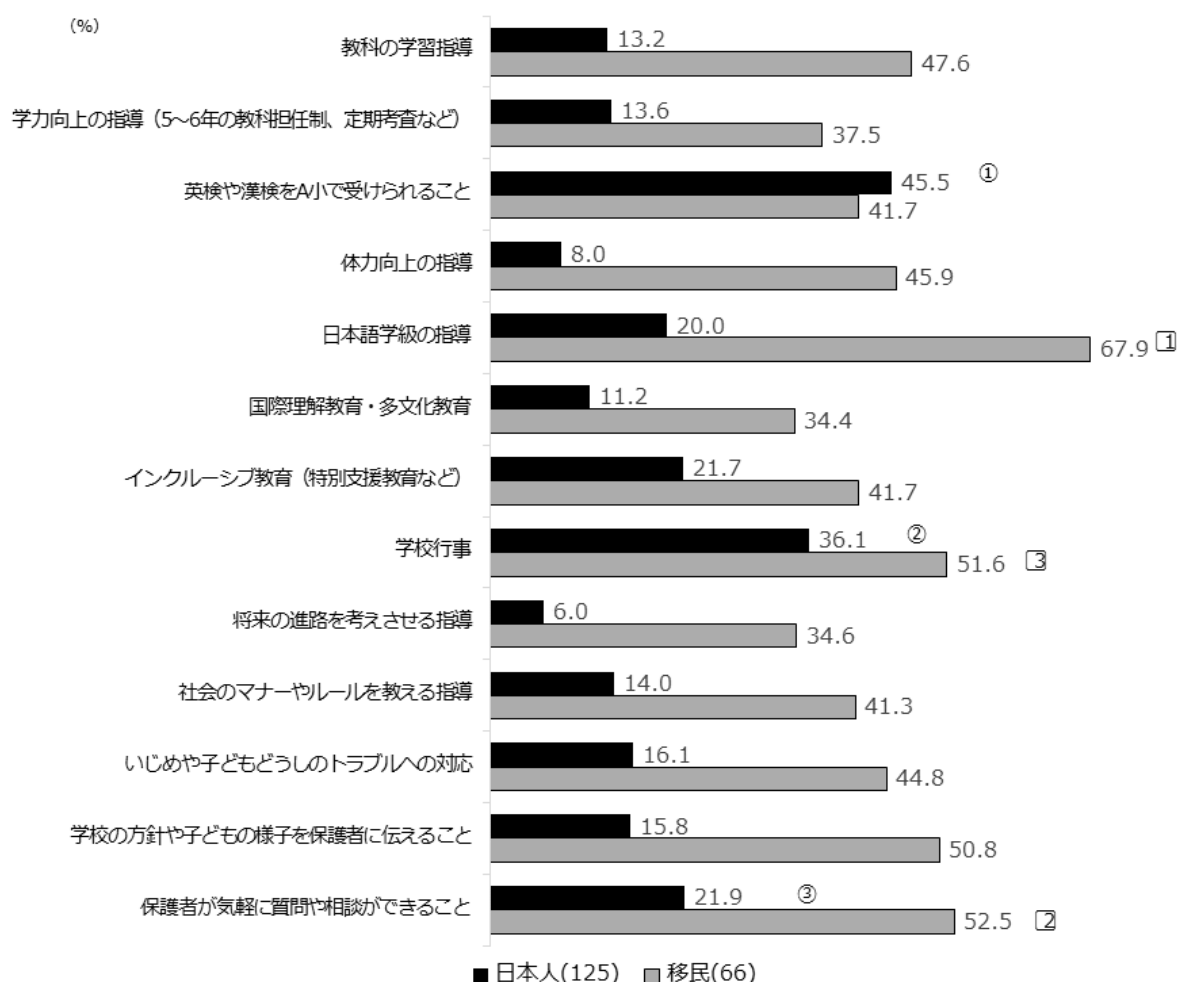
3.2 学校満足度

学校のさまざまな取り組みに対して、どの程度満足しているのかをたずねた(図表 3-2)。なお、学年によっては「わからない・受けていない」と回答する割合が高い項目がみられたため、本項ではすべての項目で「わからない・受けていない」を除外した上で「とても満足している」の割合を算出した。

日本人では「英検や漢検を A 小で受けられること」45.5%、「学校行事」36.1%、「保護者が気軽に質問や相談ができること」21.9%の順に高い。移民では「日本語学級の指導」67.9%、「保護者が気軽に質問や相談ができること」52.5%、「学校行事」51.6%と続き、特に日本語学級に対する満足度は非常に高い様子が見えらる。全体的に移民のほうが「とても満足している」の割合は高い。

日本人の回答をみると、「体力向上の指導」8.0%と「将来の進路を考えさせる指導」6.0%は 1 割を下回る。両者は「まあ満足している」を足し合わせると 7 割程度になるが、ほかの項目に比べると低く、今後の課題のひとつと捉えられる。

図表 3-2 学校満足度



注 1) 「とても満足している」の%。

注 2) 各項目「わからない・受けていない」と回答したケースを除外して集計している。

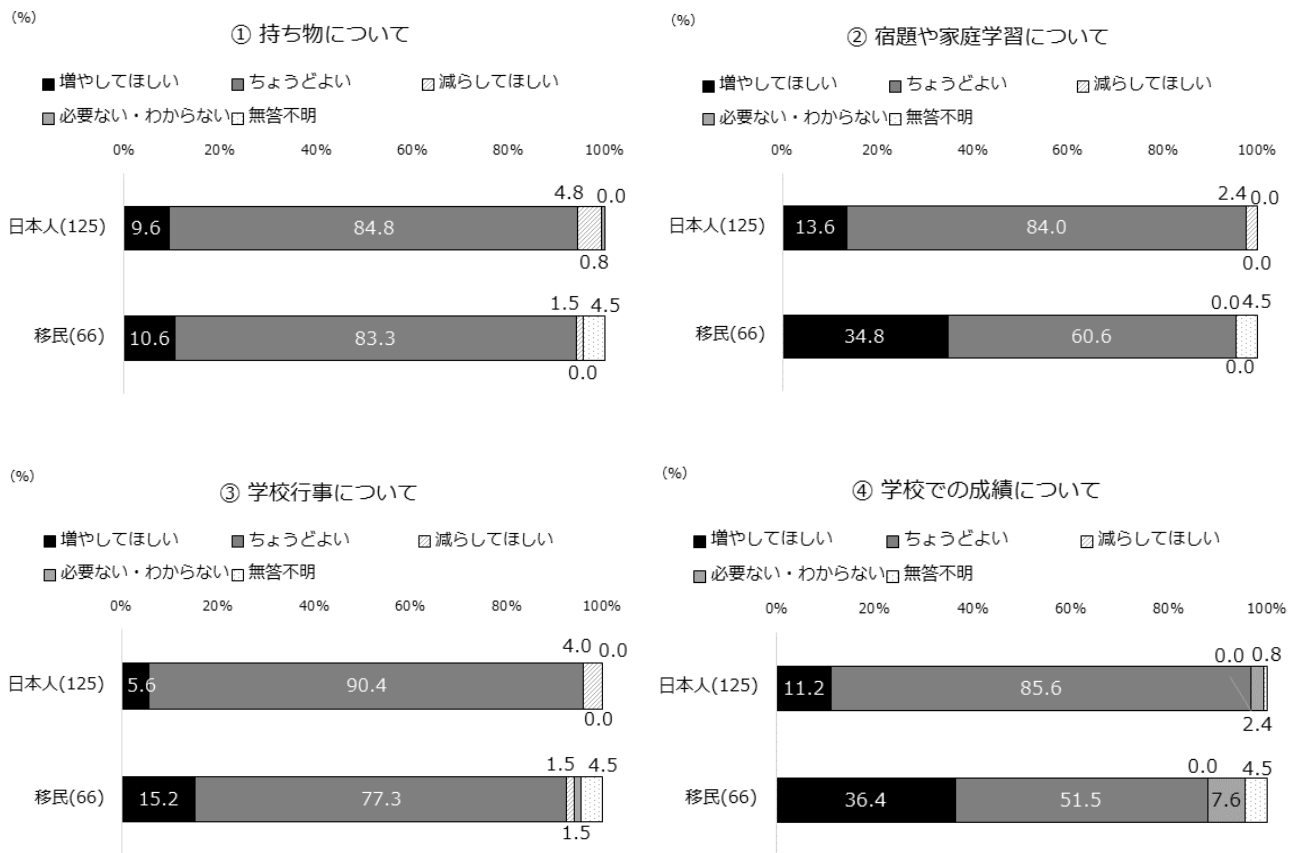
注 3) 日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1~3 の番号を付している。

注 4) 「国際理解教育・多文化教育」「学校行事」については、質問紙では A 小学校で使用されている具体的な名称でたずねている。

3.3 学校からの連絡

学校から保護者への連絡回数について、保護者の希望をたずねた(図表 3-3-1)。いずれの項目においても「減らしてほしい」「必要ない・わからない」は 1 割未満と少数で、「ちょうどよい」が最も多い結果となった。「増やしてほしい」の割合はいずれの項目でも日本人より移民のほうが高い。特に差が大きかったのは「宿題や家庭学習について」(日本人 13.6% < 移民 34.8%)と、「学校での成績について」(日本人 11.2% < 移民 36.4%)で、20 ポイント強の差がみられる。移民の保護者がより、学校からの連絡に対する希望や学習・成績への関心の高い様子がうかがえる。

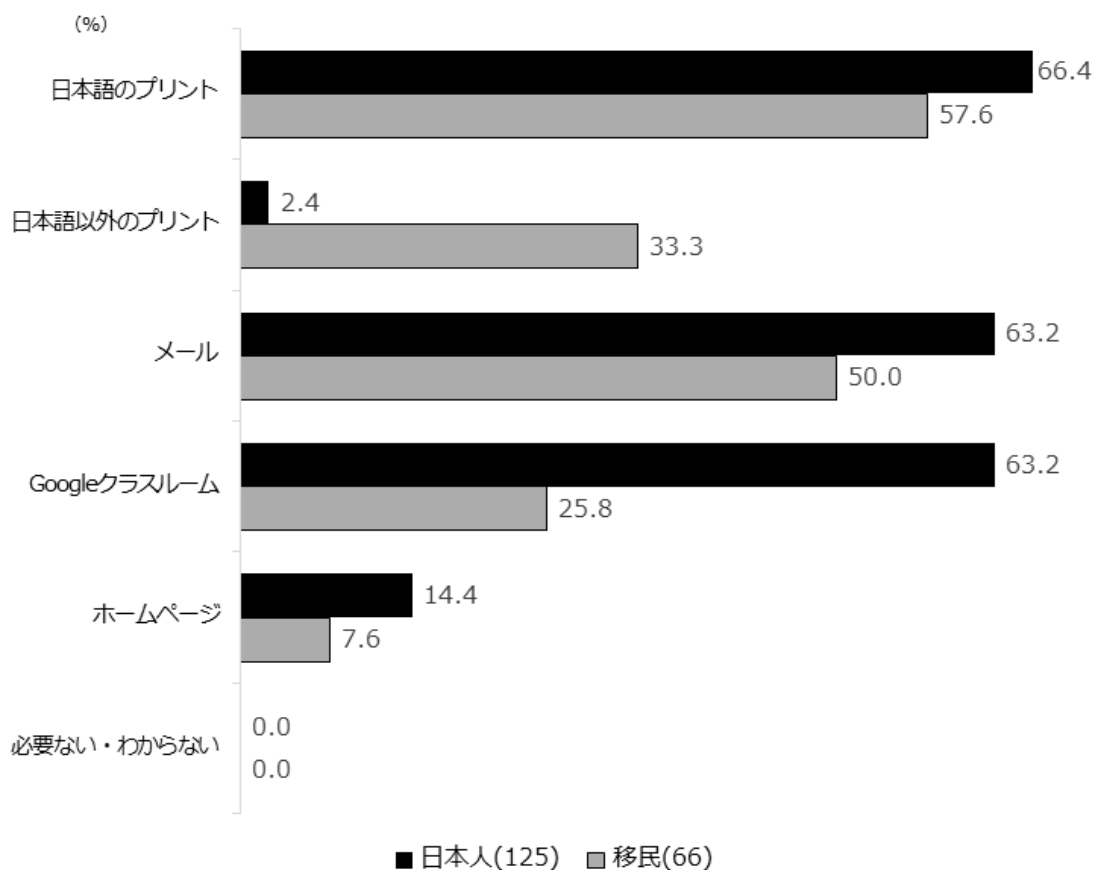
図表 3-3-1 学校からの連絡回数



学校からの連絡手段についても、保護者の希望をたずねた(図表 3-3-2)。項目には実際に A 小学校で使用可能な手段を取り入れ、複数回答の設問としている。日本人では「日本語のプリント」66.4%、「メール」63.2%、「Google クラスルーム」63.2%の 3 つがほぼ同率で高い数値となった。移民では「日本語のプリント」57.6%、「メール」50.0%を半数以上の保護者が希望し、次いで「日本語以外のプリント」33.3%が高かった。

調査設計時には、メールや Google クラスルームなどの IT を用いた連絡手段を希望する移民の保護者が多いと予想していたが、調査結果では 3 分の 1 が「日本語以外のプリント」を希望していた。移民の保護者の習慣や使用言語は多様であり、日本語のプリントが子どもから親に渡らないケース、渡っても親が読めないケースなども考えられる。保護者の実態にあわせた学校からの連絡手段の工夫、また、それを可能にする通訳や翻訳アプリを行政や民間が支援することが求められる。

図表 3-3-2 学校からの連絡手段



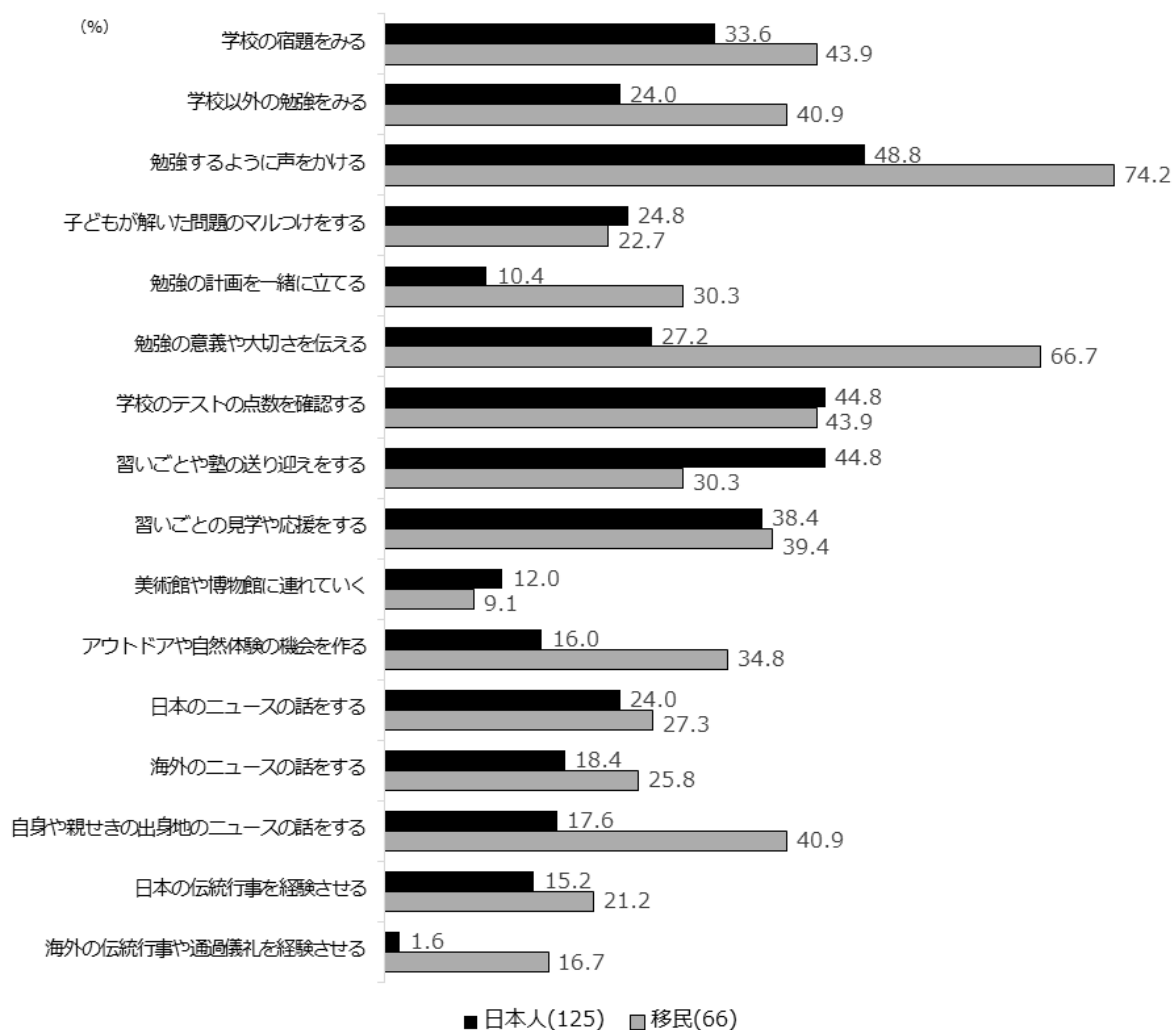
注) 複数回答。

3.4 教育戦略

保護者が子どもの勉強などに対してどのくらい関わっているのかをたずねた(図表 3-4)。全体的に移民のほうが数値の高い項目が目立ち、普段の勉強については「学校の宿題をみる」「学校以外の勉強をみる」「勉強するように声をかける」「勉強の計画を一緒に立てる」「勉強の意義や大切さを伝える」の 5 項目で、日本人を 10 ポイントから 40 ポイント程度上回っている。特に「勉強するように声をかける」「勉強の意義や大切さを伝える」は 7 割前後に達し、「よくする」の割合としては非常に高い。保護者の教育熱心さは移民の特徴として指摘されるところだが、本調査においても同様の傾向がみとれる。

そのほかの項目についてみると、「アウトドアや自然体験の機会を作る」「自身や親せきの出身地のニュースの話をする」「海外の伝統行事や通過儀礼を経験させる」の 3 項目で、移民が日本人の数値を 10 ポイント以上上回る。また、「日本のニュースの話をする」や「日本の伝統行事を経験させる」では、日本人と移民はほぼ同程度の関わりをしている結果となった。学業達成や地位達成の志向、出身国の文化の伝達や日本の文化の習得など、さまざまな角度から子どもに熱心に関わる移民保護者の姿が浮かび上がる。

図表 3-4 教育戦略



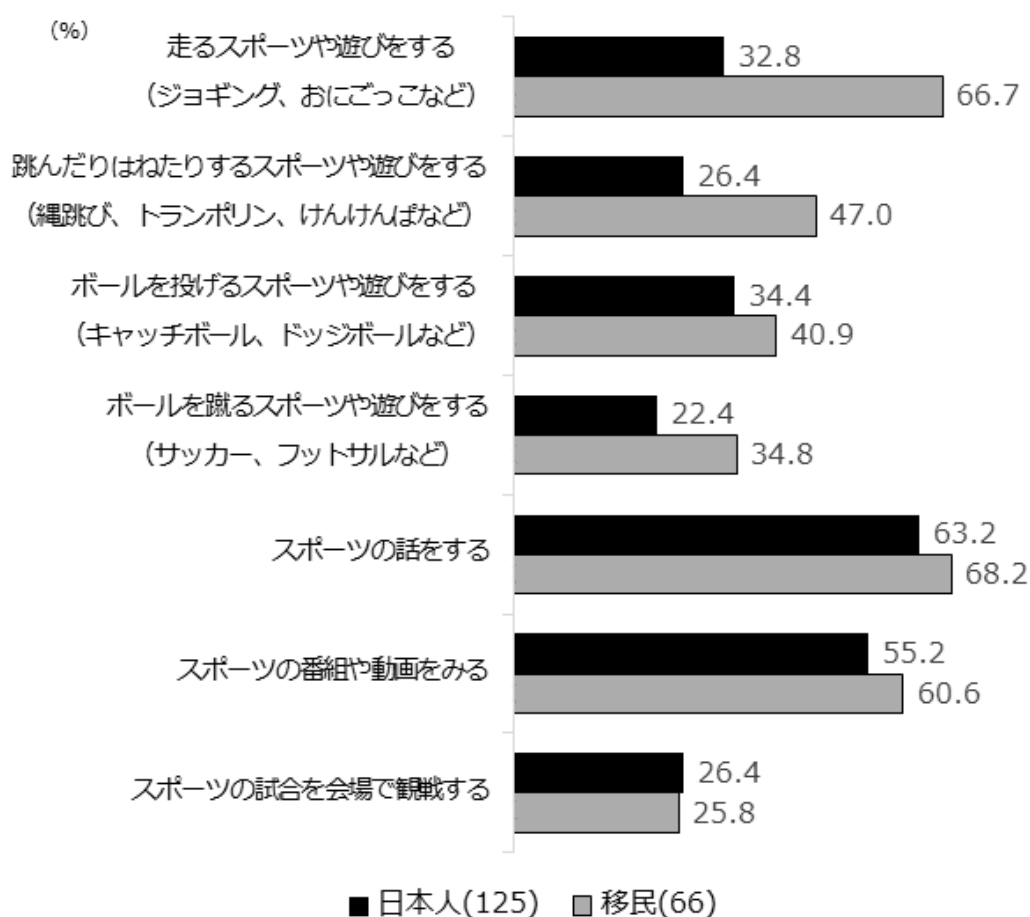
注) 「よくする」の%。

3.5 子どもとのスポーツ・運動遊び

子どもと一緒に取り組むスポーツや運動遊びについて、する・話す・みるの観点から7項目にわけて頻度をたずね、「よくする」と「ときどきする」の合計値を示した(図表3-5)。するスポーツについては、「走るスポーツや遊びをする」(日本人32.8%<移民66.7%、以下同)「跳んだりはねたりするスポーツや遊びをする」(26.4%<47.0%)「ボールを投げるスポーツや遊びをする」(34.4%<40.9%)「ボールを蹴るスポーツや遊びをする」(22.4%<34.8%)の4項目いずれも移民のほうが高く、特に「走るスポーツや遊びをする」では日本人を30ポイント以上上回る。

一方で、話す・みるに関しては、「スポーツの話をする」(63.2%<68.2%)「スポーツの番組や動画をみる」(55.2%<60.6%)では移民のほうが若干高く、「スポーツの試合を会場で観戦する」(26.4%、25.8%)は同程度で、顕著な差はみられなかった。

図表3-5 子どもとのスポーツ・運動遊び

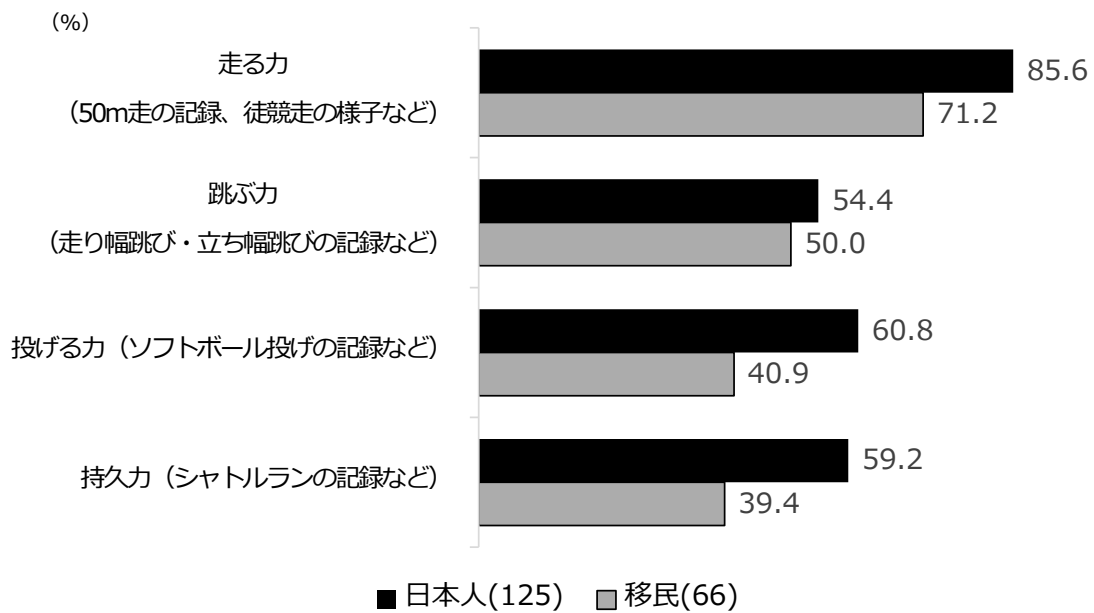


注) 「よくする」+「ときどきする」の%。

3.6 子どもの運動能力の認知

子どもの運動能力についてどのくらい知っているかをたずね、「よく知っている」と「だいたい知っている」の合計値を示した(図表 3-6)。「走る力」は日本人 85.6%、移民 71.2%と、差はあるもののいずれも多くは保護者が認知している結果であった。「跳ぶ力」は日本人 54.4%、移民 50.0%で、ともに半数程度が把握していた。「投げる力」「持久力」の認知度は、日本人が 6 割程度であるのに対して移民では約 4 割と、差がみられた。4 項目いずれも日本人のほうが知っている割合は高く、移民の保護者における体力テストの指標の馴染みのなさや、日本語の資料の難しさなどが背景にあると推察される。

図表 3-6 子どもの運動能力の認知

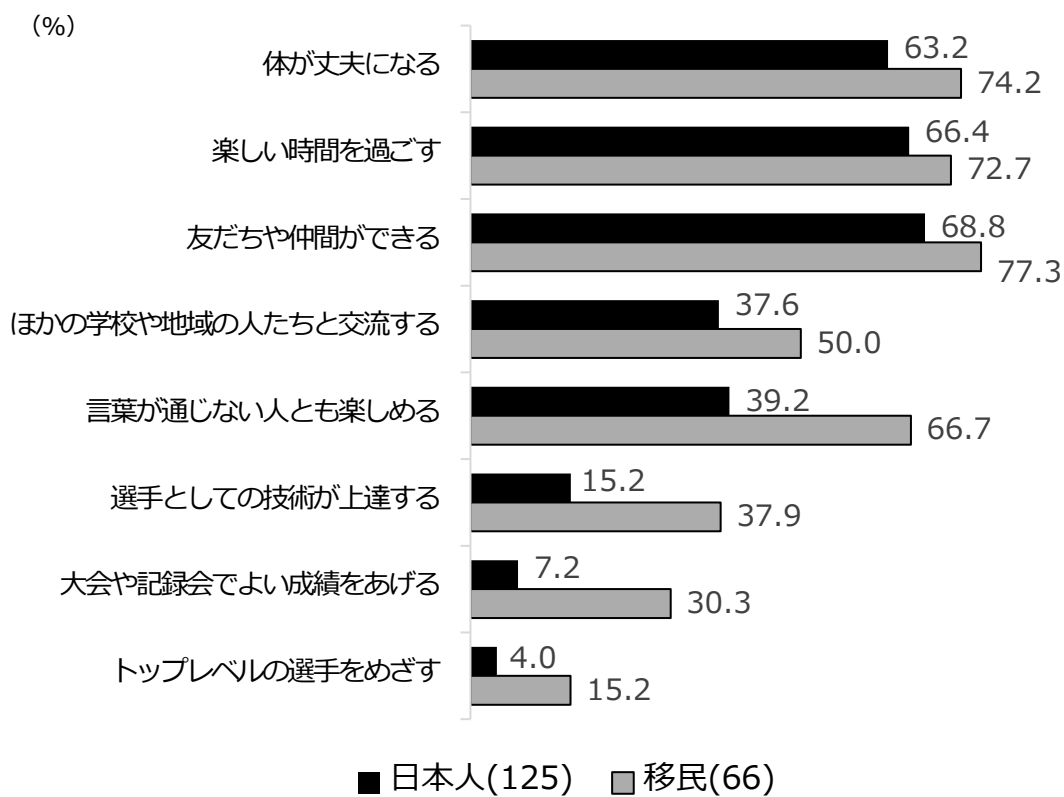


注) 「よく知っている」+「だいたい知っている」の%。

3.7 子どものスポーツへの期待

子どもの運動やスポーツについて、保護者がどのような期待をしているのかをたずねた(図表 3-7)。日本人・移民ともに「体が丈夫になる」「楽しい時間を過ごす」「友だちや仲間ができる」の割合が高く、6～7割台に達した。この3項目を含め、すべての項目で移民の保護者の数値が高く、子どものスポーツにさまざまな期待をしている。特に差が大きかったのは「言葉が通じない人とも楽しめる」(日本人 39.2%<移民 66.7%、27.5 ポイント差、以下同)、「選手としての技術が上達する」(15.2%<37.9%、22.7 ポイント差)、「大会や記録会でよい成績をあげる」(7.2%<30.3%、23.1 ポイント差)であった。児童にたずねたスポーツの価値の項目(2章 15 節参照)では、日本人に比べて移民の評価が低い項目も散見されたが、保護者においては対照的に移民の期待が高い結果となった。

図表 3-7 子どものスポーツへの期待



注)「とても期待する」の%。

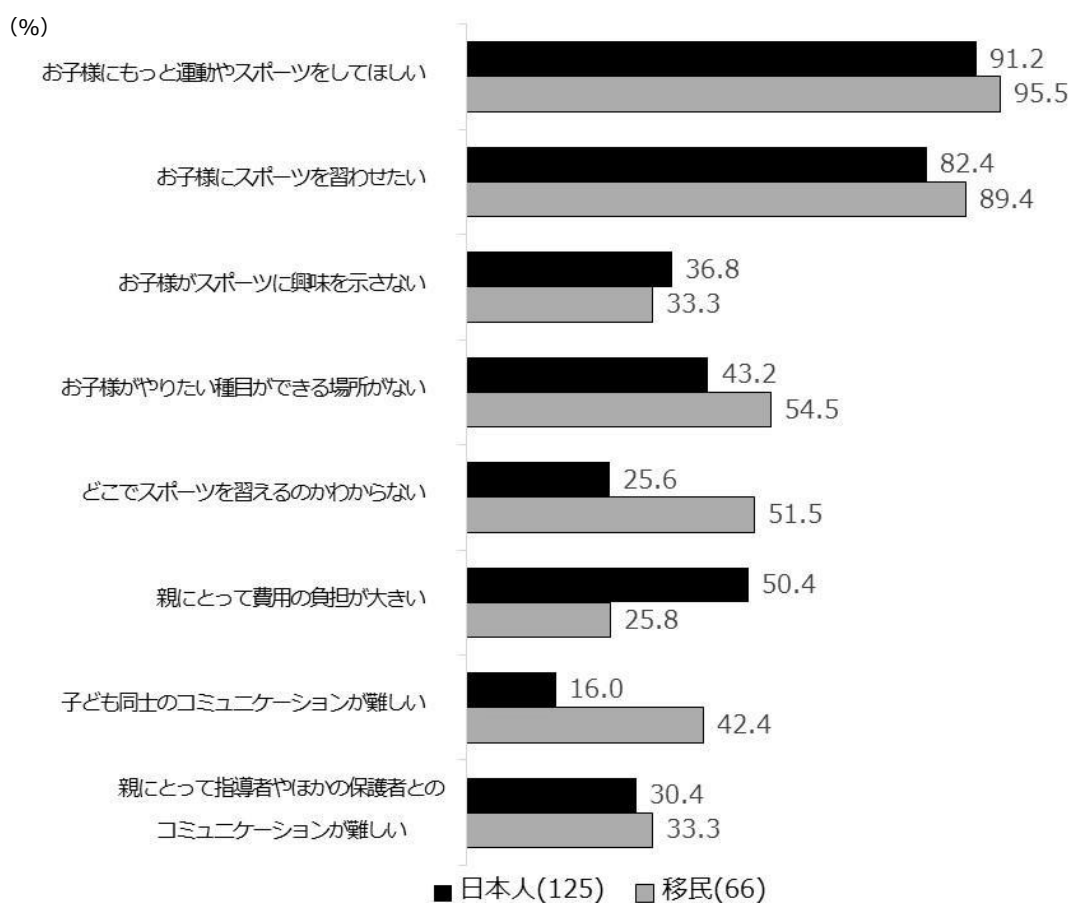
3.8 子どものスポーツに関する悩み

子どものスポーツに関する悩みをたずねた(図表 3-8)。日本人・移民ともに「お子様にもっと運動やスポーツをしてほしい」「お子様にスポーツを習わせたい」が 8 割から 9 割強に達した一方で、「お子様がスポーツに興味を示さない」はいずれも 3 割強であった。出身国の背景にかかわらず、多くの保護者が子どもにスポーツをしてほしいと願うものの、子どもが関心を示さない状況を悩ましく思う様子がうかがえる。

スポーツのできる環境についてたずねた「お子様がやりたい種目ができる場所がない」「どこでスポーツを習えるのかわからない」では移民の割合が高く、5 割に達している。自由記述では、日本人・移民を問わず「遊べる場所がない」「特定のスポーツや遊びをどこでできるのかわからない」という回答が多くみられた。加えて移民の保護者からは「子ども向けの水泳レッスンがどこにあるのかわからない」という意見も複数寄せられた。

また、「親にとって費用の負担が大きい」は日本人 50.4%>移民 25.8%と、日本人のほうが高い割合を示した。家庭の経済状況に加え、具体的な費用の検討状況や情報の入手の度合いも関係していると推察される。親子のコミュニケーションに関しては、日本人では「子ども同士のコミュニケーション」よりも「親にとってのコミュニケーション」が難しいと回答する割合が高かったのに対して、移民では「子ども同士のコミュニケーションが難しい」と答える割合が高かった。

図表 3-8 子どものスポーツに関する悩み

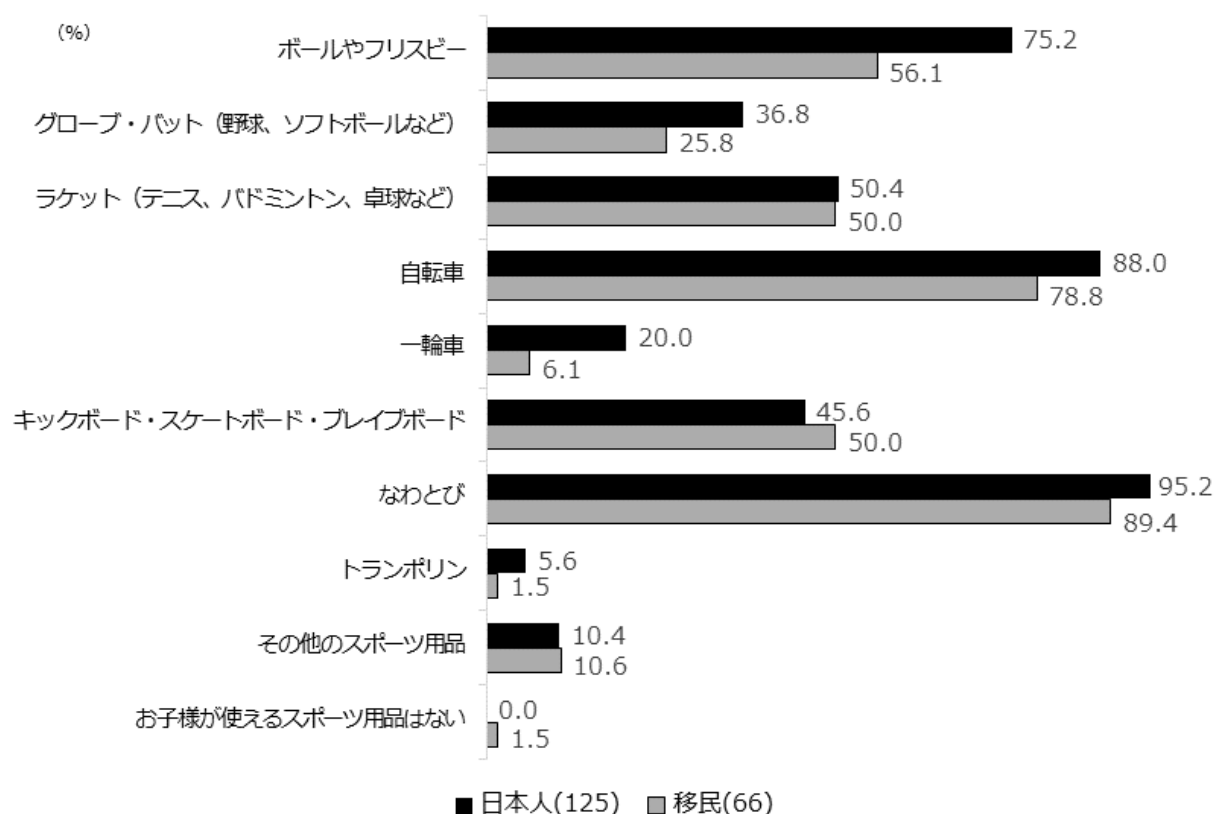


注)「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

3.9 家庭にあるスポーツ用品

自宅にある、子どもが使えるスポーツ用品についてたずねた(図表 3-9)。日本人・移民ともに「なわとび」が9割前後、「自転車」が8割前後と、多くの家庭で子どもたちが使用できる状態にある。「ボールやフリスビー」(日本人75.2%>移民56.1%、以下同)、「グローブ・バット」(36.8%>25.8%)、「一輪車」(20.0%>6.1%)は、日本人家庭の所有率が高い。「その他のスポーツ用品」には、フラフープやウィンタースポーツ用品などがあげられた。「お子様が使えるスポーツ用品はない」を選択した割合はごくわずかであった。

図表 3-9 家庭にあるスポーツ用品



注 1) 複数回答。

注 2) トランポリンは「その他のスポーツ用品」の具体的な回答から抽出した。

3.10 好きな運動・スポーツ

保護者に「するのが好きな運動やスポーツ」「見るのが好きな運動やスポーツ」を自由記述で回答してもらった。それぞれ該当する種目がある場合にはひとつずつ記入するように指示したが、複数の種目を記入するほか、無記入や「なし」という回答もみられた。複数回答はすべて集計に含め、上位 3 つをランキング形式でまとめたのが図表 3-10 である。

「するのが好きな運動やスポーツ」については、日本人の保護者 60 名、移民の保護者 48 名が具体的に記入していた。日本人では「バレーボール」が 10 名と最も多く、「バドミントン」8 名、「野球」「水泳」「スキー」がそれぞれ 5 名であった。移民では「サッカー」9 名が 1 位で、「バドミントン」6 名、「水泳」5 名と続く。日本人の「バレーボール」に関しては、PTA が主催するバレーボール活動への参加者が含まれていると推察される。移民で「サッカー」が上位にあがった点については、保護者票の回答者に父親が多い(日本人 10.4% < 移民 34.8%) 点も影響したと考えられる。

「見るのが好きな運動やスポーツ」については、日本人の保護者 73 名、移民の保護者 51 名が具体的に回答した。日本人では「サッカー」「野球」がそれぞれ 15 名と最多で、「バレーボール」14 名が続いた。移民では「サッカー」15 名が特に多く、「バスケットボール」7 名、「水泳」5 名があげられた。児童の回答(2章 9 節参照)と同様、日本人では野球の人気が高い点の特徴である。

図表 3-10 好きな運動・スポーツ

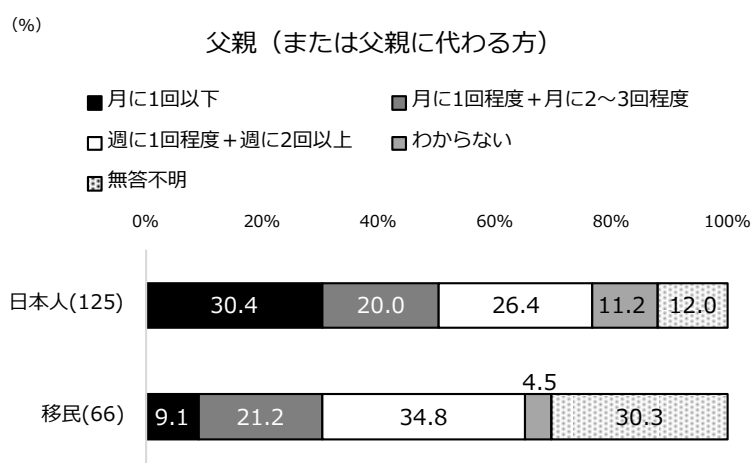
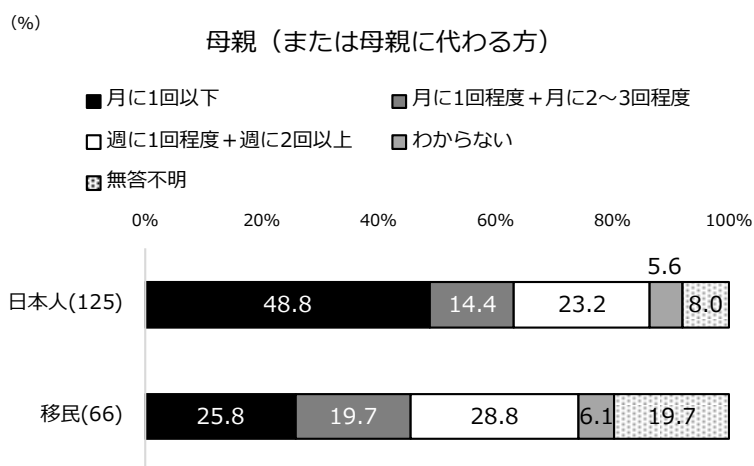
	するのが好きな運動やスポーツ			見るのが好きな運動やスポーツ		
	順位	種目	回答数	順位	種目	回答数
日本人	1	バレーボール	10	1	サッカー	15
	2	バドミントン	8	1	野球	15
	3	野球	5	3	バレーボール	14
	3	水泳	5			
	3	スキー	5			
移民	1	サッカー	9	1	サッカー	15
	2	バドミントン	6	2	バスケットボール	7
	3	水泳	5	3	水泳	5

3.11 保護者のスポーツ実施頻度

保護者が普段、1回あたり30分以上の運動やスポーツをどのくらい実施しているかをたずねた(図表3-11)。なお、ひとり親や別居などで該当する人がいない場合には無記入にしてもらったため、無回答率がほかの質問項目に比べて高い。

母親の結果をみると、日本人は「月に1回以下」が48.8%と最多で、「週に1回程度」と「週に2回以上」を合わせた23.2%が続き、半数近くがほとんど運動・スポーツを実施していないことがわかる。移民では「月に1回以下」が25.8%で、運動・スポーツをほとんど実施していない母親は4分の1程度にとどまる。なお、「無答不明」を除外して集計しても同様の傾向がみられ、日本人のほうが「月に1回以下」が20ポイント以上高かった(図表割愛)。

父親も同様で、日本人では「月に1回以下」30.4%、「週に1回程度」と「週に2回以上」を合わせた26.4%と続くが、移民では「週に1回程度+週に2回以上」34.8%、「月に1回程度+月に2~3回程度」21.2%の順で、「月に1回以下」は9.1%にとどまる。父親の集計においても、「無答不明」を除外した場合でも「月に1回以下」は日本人のほうが20ポイント以上高い。日本人の保護者の運動・スポーツ実施頻度の低さが浮き彫りになる結果であった。



コラム② 保護者面談

多くの小学校では、担任教師と保護者の面談が行われている。A 小学校も例外ではない。ただし、児童以上に日本語での会話が難しい保護者が多く、通訳を交えた「三者面談」になるケースが少なくない。通常の保護者面談であれば、各家庭と担任との間で予定を調整するが、A 小学校では通訳も含めた三者間でスケジュールを調整する必要があり、その過程はより複雑になる。特に、通訳の必要な保護者が多い中国語の場合、通訳の方が 1 日に複数の面談に同行することもある。さらに、保護者の中にはお知らせの内容が十分に伝わっていなかったり、出身国に保護者面談がなかったりするため、時間になっても学校に来ない場合もある。その際は、再びスケジュールを調整する必要がある。

保護者面談は、移民の家庭にとっても、学校にとっても、通訳を介するとはいえ直接コミュニケーションを取れる貴重な機会である。一方で、その予定調整ひとつをとっても、移民の少ない学校では発生しない多くの業務を抱えているのも事実である。

4. 体力テスト(全学年)

4.1 体力テスト

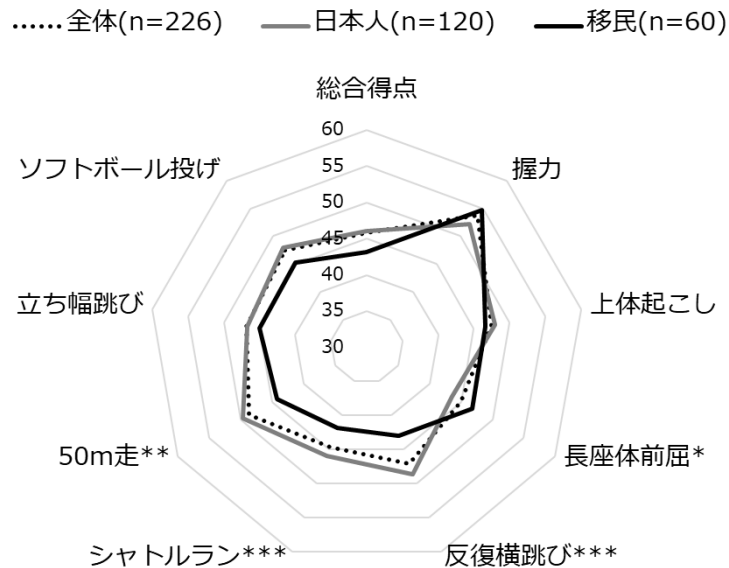
本章ではA小学校で実施された体力テスト(「新体力テスト」)の結果を、これまでの章と同様に「日本人」「移民」の区分で傾向を確認する。なお、この章における「全体」は、A小学校の全校児童を示す。本報告書に用いた「日本人」「移民」の定義をする際に変数として使用した調査項目に回答していない児童も含まれているため、「全体」は「日本人」と「移民」の合計値よりも大きくなっている。

4.1.1 A小学校全体のTスコア

本報告書で用いるTスコアとは、全国で実施された体力テストの結果の年齢(学年)別の平均値・標準偏差を用いて、偏差値(=(個人の測定結果-平均値)÷標準偏差×10+50)を求めたものである。種目・総合得点それぞれについてTスコアを算出し、A小学校全体(全体)、日本人、移民それぞれの平均をレーダーチャートに示した。(図表4-1-1)

A小学校全体において、全国平均値(Tスコア50.0)を超えている種目は握力のみであった。握力は日本人52.1、移民54.7、長座体前屈は日本人43.6、移民46.8と移民のスコアが若干高かったが、そのほかの種目では日本人のほうが高かった。長座体前屈・反復横跳び・シャトルラン・50m走においては、日本人と移民との平均値に有意な差がみられた。特に反復横跳びは日本人48.5、移民42.9、シャトルランは日本人45.9、移民41.8と大きな差を認めた。

図表4-1-1 全学年の種目別Tスコア



注) *** p<.001, ** p<.01, * p<.05

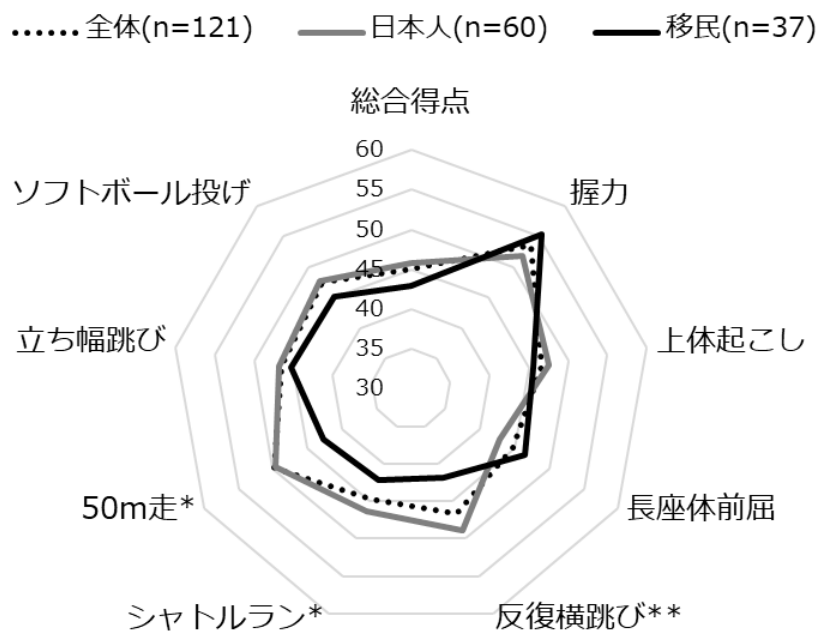
	総合得点	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横跳び	シャトルラン	50m走	立ち幅跳び	ソフトボール投げ
日本人(n=120)	46.0	52.1	48.0	43.6	48.5	45.9	49.6	46.8	47.9
移民(n=60)	43.2	54.7	46.6	46.8	42.9	41.8	44.2	45.0	45.3

続いて、図表 4-1-2 に男子の種目別 T スコアをレーダーチャートで示す。また図表 4-1-3 に女子のレーダーチャートを示す。

男女ともに、全体で全国の平均値を超えている種目は握力のみであった。男子では、握力、長座体前屈は移民のほうが日本人よりもスコアが高かったが、有意な差はみられなかった。そのほかの種目では日本人のほうがスコアが高く、特に反復横跳び、シャトルラン、50m 走では、有意に高かった。

女子も握力、長座体前屈は移民のほうが日本人よりもスコアが高かった。そのほかの種目は日本人のほうが高く、反復横跳び、シャトルランでは有意な差がみられたが、男子に比べると日本人と移民の差は小さかった。

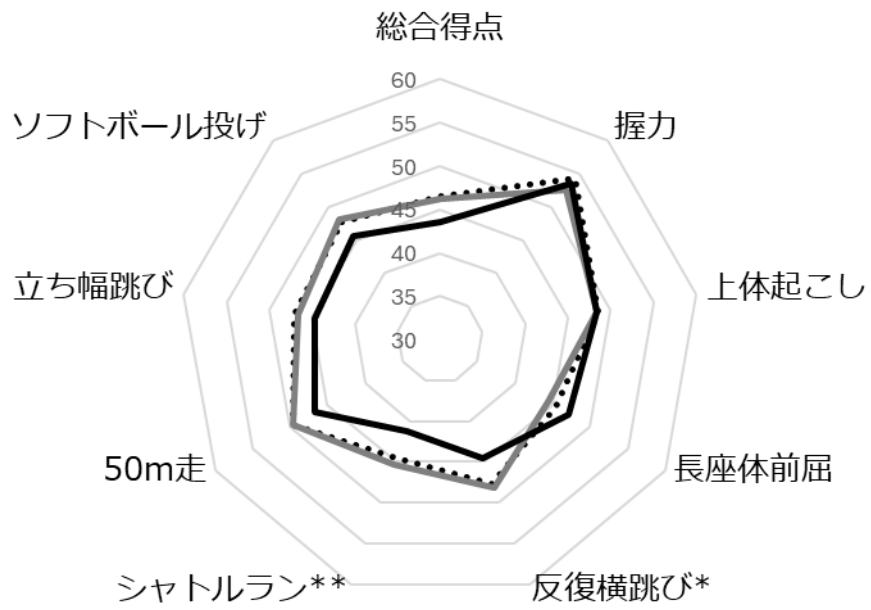
図表 4-1-2 男子の種目別 T スコア



注) ** p<.01, * p<.05

図表 4-1-3 女子の種目別 Tスコア

.....全体(n=106) — 日本人(n=60) — 移民(n=23)



注) ** p<.01, * p<.05

4.1.2 A小学校2学年ごとのTスコア

ここでは、2学年ごと(1年生と2年生を低学年、3年生と4年生を中学年、5年生と6年生を高学年とした)に分け、前節同様、全体および日本人・移民のTスコアの平均値をチャートレーダーに表した。低学年を図表4-1-4、中学年を図表4-1-5、高学年を図表4-1-6に示す。

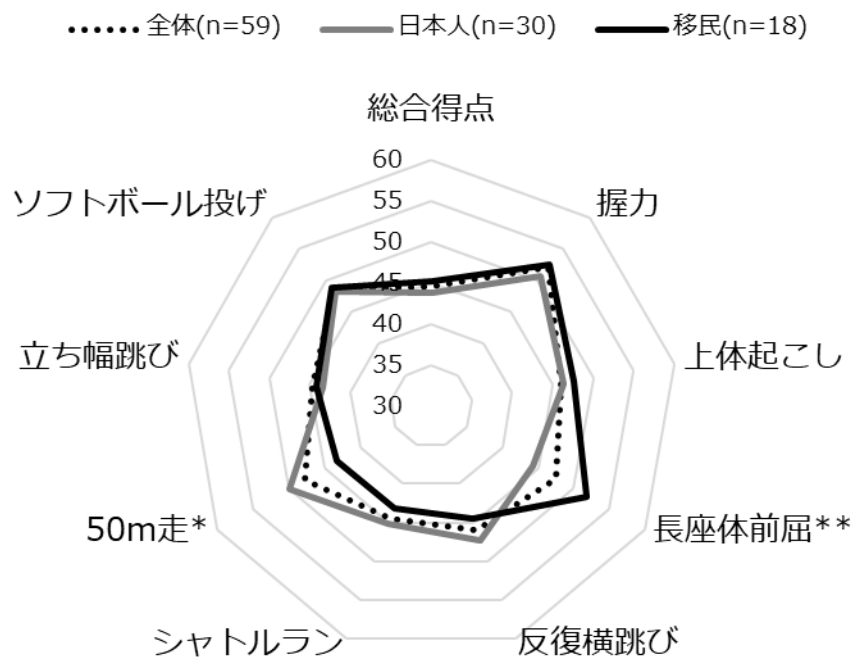
各学年共通して、握力は移民のほうが日本人よりも平均値が高く、また全国平均値を上回っていた。

低学年では、反復横跳び、シャトルラン、50m走は日本人のほうが高かったが、総合得点やその他の種目では移民のほうが高く、A小学校全体の傾向とは異なっていた。長座体前屈では移民が、50m走では日本人が有意に高かった。

中学年では、移民のほうが高かった種目は握力のほかに長座体前屈であった。総合得点、上体起こし、反復横跳び、シャトルラン、50m走、ソフトボール投げでは日本人が有意に高かった。

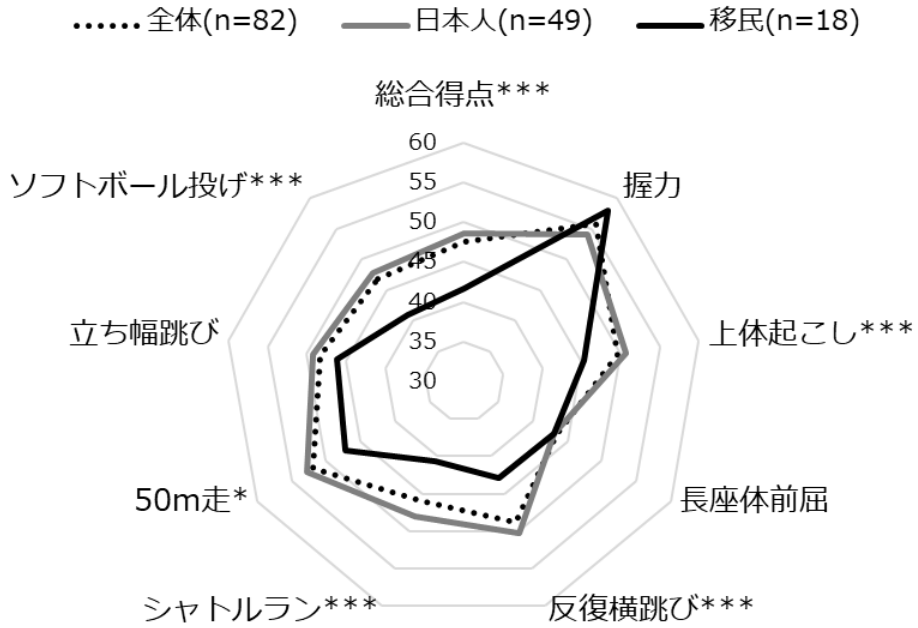
高学年では、移民のほうが高かった種目は握力のほかに、上体起こし、長座体前屈であった。そのほかの種目は日本人のほうが高かったものの、有意差がみられたのは反復横跳びのみであった。

図表 4-1-4 低学年の種目別Tスコア



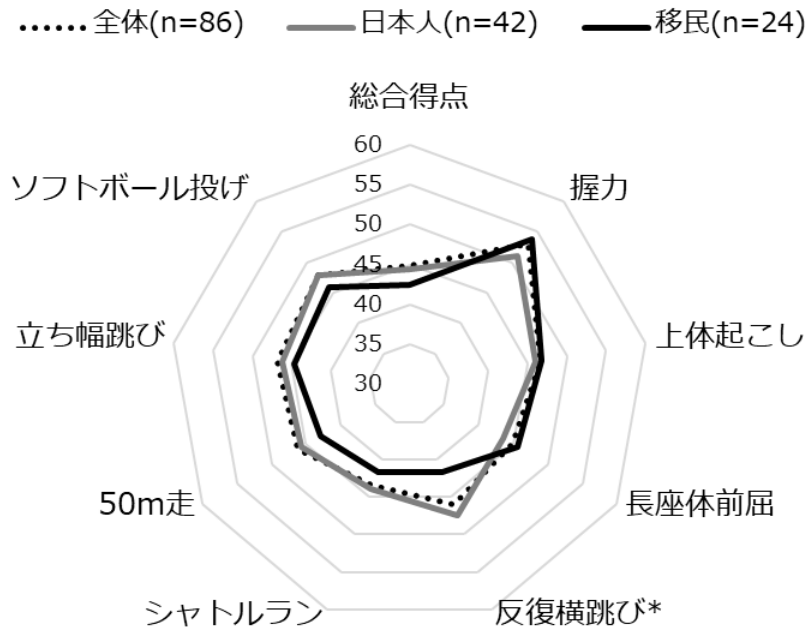
注) ** p<.01, * p<.05

図表 4-1-5 中学年の種目別 Tスコア



注) *** p<.001, * p<.05

図表 4-1-6 高学年の種目別 Tスコア



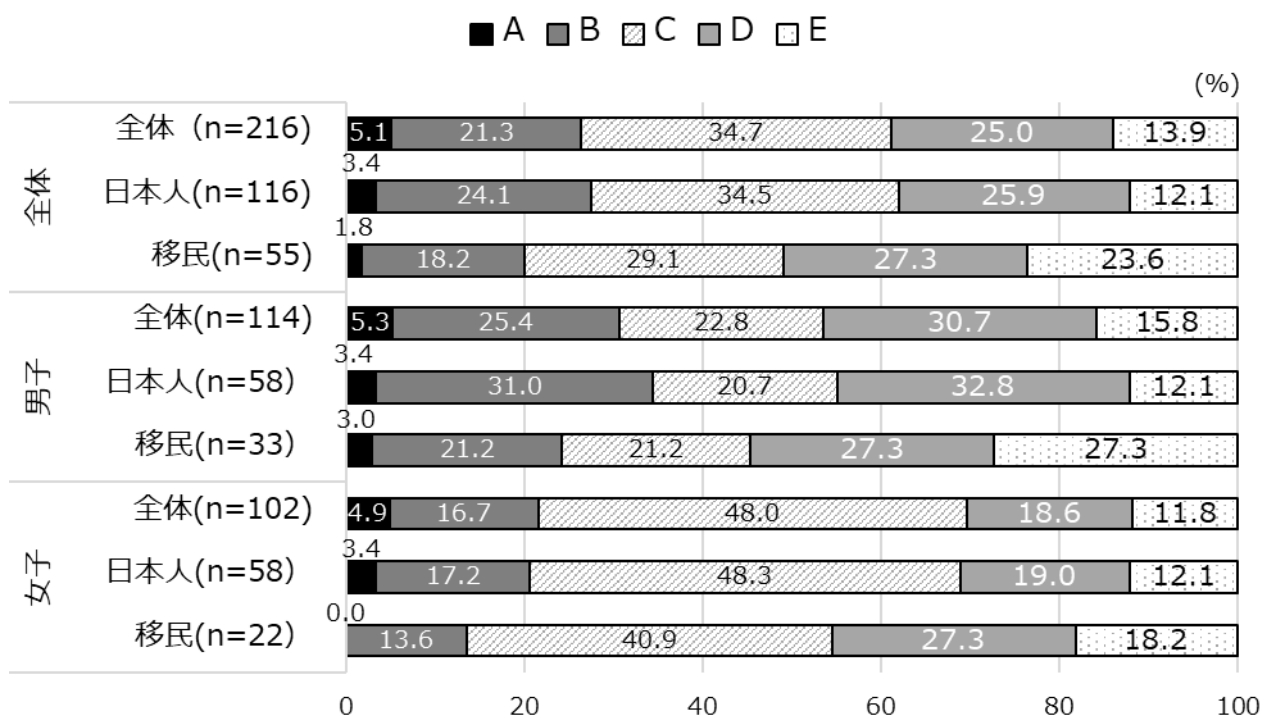
注) * p<.05

4.1.3 総合評価

体力テストの8種目をすべて実施した児童について、体力テストの各項目別得点表、総合得点基準表に基づき、A～Eの5段階の総合評価を判定した。総合評価はAが最も総合得点が高く、BからEにかけて順次低くなる。また、スポーツ庁の「第3期スポーツ基本計画」では、総合評価C以上の児童の割合の増加を目標としている。この総合評価を性別で全体、日本人、移民ごとにみたものを図表4-1-7に示す。

全体をみると、E評価の割合は日本人12.1%、移民は23.6%と日本人より2倍近く高く、AからCまでの評価は日本人62.0%、移民49.1%と10ポイント以上移民が少なかった。性別にみると、男子では全体と同様にE評価の割合は日本人が12.1%であるのに対し、移民は27.3%と2倍以上高く、B評価は日本人31.0%、移民21.2%と、移民が10ポイント近く少なかった。女子では、全体と同様の傾向を示し、AからCまでの評価は日本人68.9%、移民54.5%と移民が14.4ポイント低く、D評価は日本人19.0%、移民27.3%、E評価は日本人12.1%、移民18.2%と、それぞれ8.3ポイント、6.1ポイント移民が高かった。

図表 4-1-7 体力テストの総合評価(全体、性別、日本人・移民)



4.2 体格と肥満度

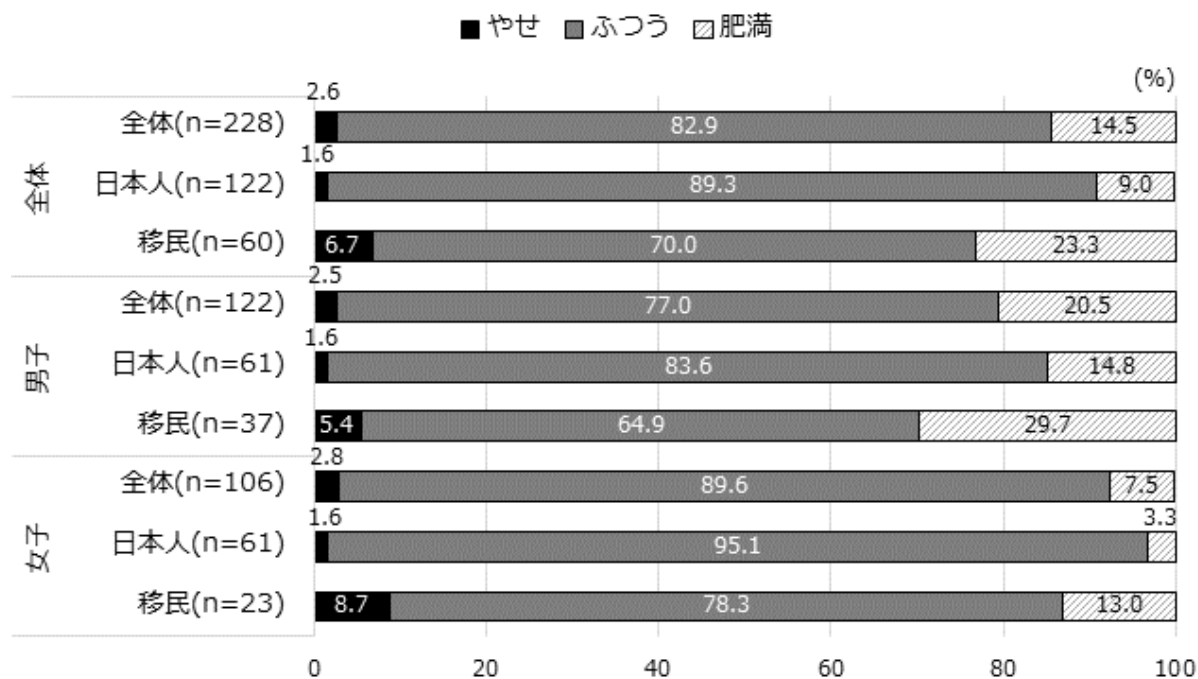
4.2.1 身長別標準体重に基づく肥満度

身長・体重の測定結果を用いて、肥満傾向児・痩身傾向児の出現率の算出(児童生徒等の健康診断マニュアル(平成 27 年度改訂版))に基づく肥満度を判定した。この肥満度は、身長別標準体重に基づいて計算し、肥満とやせを判定したものである。細分化すると、高度やせ、やせ、ふつう、軽度肥満、中等度肥満、高度肥満の 6 段階に分類されるが、今回の対象者には高度やせ、高度肥満がいなかったため、「やせ」「ふつう」「肥満」の 3 段階に分類した結果を図表 4-2-1 に示す。

全体でみると、「やせ」2.6%、「ふつう」82.9%、「肥満」14.5%であった。日本人・移民に分けてみると、「やせ」は日本人 1.6%、移民 6.7%と 4 倍以上、「肥満」は日本人 9.0%、移民 23.3%と 2 倍以上、移民が高かった。移民の「ふつう」は日本人と比べ 19.3 ポイント低かった。

性別にみると、男女の全体で、「ふつう」が男子 77.0%、女子 89.6%と 12.6 ポイント男子が低かった。「やせ」は男子 2.5%、女子 2.8%と男女に差はなかったが、「肥満」は男子 20.5%、女子 7.5%と男子が 13.0 ポイント高く、「肥満」の児童が多い傾向がみられた。男子を日本人・移民に分けてみると、日本人では「やせ」1.6%、「ふつう」83.6%、「肥満」14.8%に対し、移民では「やせ」5.4%、「ふつう」64.9%、「肥満」29.7%であった。男子の移民は日本人と比べると、「やせ」で 3 倍以上、「肥満」も 2 倍以上高く、「ふつう」が 18.7 ポイント低かった。女子を日本人・移民別にみると日本人は「やせ」1.6%、「ふつう」95.1%、「肥満」3.3%、移民は「やせ」8.7%、「ふつう」78.3%、「肥満」13.0%であった。移民は、日本人と比べて「やせ」は 5 倍以上、「肥満」が約 4 倍高く、「ふつう」が 16.8 ポイント低かった。男女ともに、移民は日本人と比べて、「やせ」や「肥満」の割合が高く、「ふつう」の割合が低い傾向がみられた。

図表 4-2-1 身長別標準体重に基づく肥満度(全体、性別、日本人・移民)



4.2.2 ローレル指数

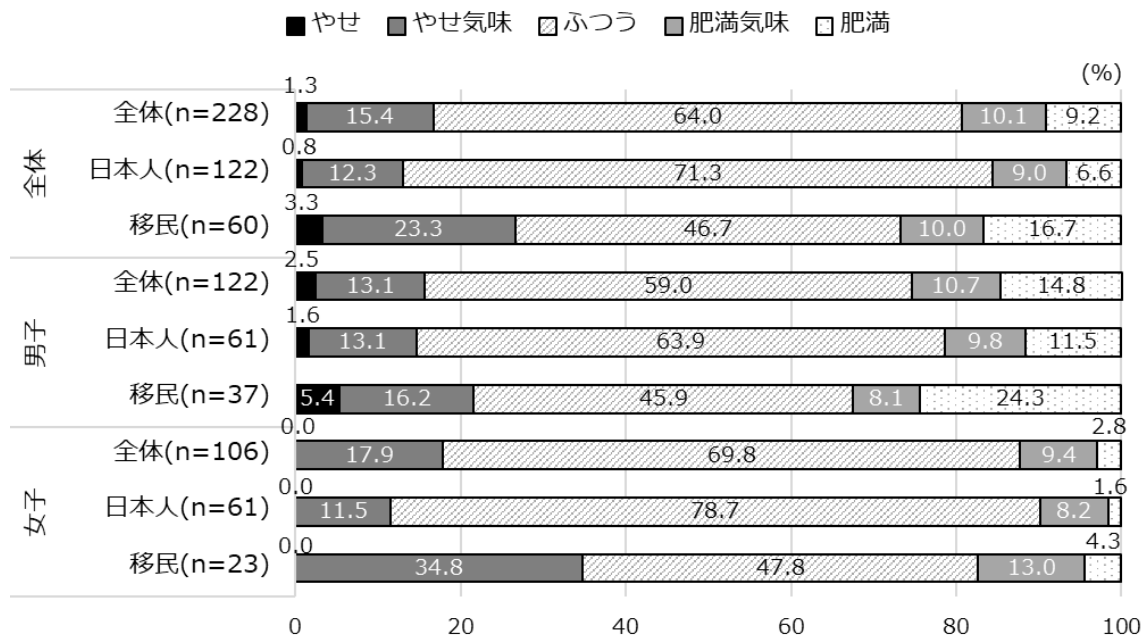
医学的に高頻度で使用されるローレル指数(体格指数)による肥満度の判定結果を、図表 4-2-2 に示す。ローレル指数では、「やせ」、「やせ気味」、「ふつう」、「肥満気味」、「肥満」の5段階で判定した。

全体でみると、「やせ」1.3%、「やせ気味」15.4%、「ふつう」64.0%、「肥満気味」10.1%、「肥満」9.2%であった。日本人・移民別にみると、日本人では「やせ」0.8%、「やせ気味」12.3%、「ふつう」71.3%、「肥満気味」9.0%、「肥満」6.6%に対し、移民は「やせ」3.3%、「やせ気味」23.3%、「ふつう」46.7%、「肥満気味」10.0%、「肥満」16.7%であった。移民は日本人より「やせ気味」が 11.0 ポイント、「肥満」が 10.1 ポイント高く、「ふつう」が 24.6 ポイント低かった。

男女別に全体をみると、男子では「やせ」2.5%、「やせ気味」13.1%、「ふつう」59.0%、「肥満気味」10.7%、「肥満」14.8%、女子は「やせ」0.0%、「やせ気味」17.9%、「ふつう」69.8%、「肥満気味」9.4%、「肥満」2.8%であった。男子は女子よりも「肥満」が 12.0 ポイント高く、「ふつう」が 10.8 ポイント低かった。また性別に日本人・移民の数値をみると、男子の日本人では、「やせ」1.6%、「やせ気味」13.1%、「ふつう」63.9%、「肥満気味」9.8%、「肥満」11.5%に対し、移民は「やせ」5.4%、「やせ気味」16.2%、「ふつう」45.9%、「肥満気味」8.1%、「肥満」24.3%であった。移民は日本人より「やせ」が3倍以上、「肥満」が2倍以上高く、「ふつう」が18.0ポイント少なかった。女子では、全体、日本人・移民ともに「やせ」がみられなかった。日本人では「やせ気味」11.5%、「ふつう」78.7%、「肥満気味」8.2%、「肥満」1.6%、移民で「やせ気味」34.8%、「ふつう」47.8%、「肥満気味」13.0%、「肥満」4.3%であった。移民は日本人より「やせ気味」が約3倍高く、「ふつう」が30.9ポイント低かった。男子では「肥満」が、女子では「やせ気味」が、日本人よりも移民において高い傾向を認めた。

ローレル指数においても、身長別標準体重に基づく肥満度と同様に、移民のほうが「やせ」「やせ気味」や「肥満気味」「肥満」の割合は高く、「ふつう」の割合は低い傾向がみられた。

図表 4-2-2 ローレル指数に基づく肥満度(全体、性別、日本人・移民)



コラム③ 体カテスト

「体カテスト」は、都内では 6 月ごろに測定を行う学校が大半で、多くの学校ではその前にルールの確認を兼ねた簡単な練習を行う。それでも、反復横跳びやソフトボール投げなど細かなルールのある種目では、低学年を中心に不慣れな様子を見せる場面が多い。

A 小学校でも同様の光景がみられるが、加えて移民の子どもたちにとっては「体カテスト」が不思議な光景として映る場合もある。ある教員は、移民の児童から「なぜこんなことをしなくてはいけないのか」と直接たずねられた経験があるという。特に反復横跳びの複雑なルールは理解が難しい。測定時には、子どもたちが 6 名程度のグループに分かれて各種目を回っていたが、あるグループには中国出身の児童が集中していた。この日は通訳の方が同行していたものの、彼女も反復横跳びをみるのははじめてで、うまく説明ができなかった。結局、測定補助の私たちが身振りで伝え、子どもたちは見よう見まねで挑戦していたものの、ラインに足が触れない、真ん中の線をまたがないなどの細かなミスが続き、回数は伸びなかった。

また、一般的に行われているように、A 小学校でもペアで相手の回数を数える方法が採用されていたが、数え方の説明が難しく、日本人の子どもたちがすべてカウントを担当する場面もあった。第 4 章で示したように、移民の児童の体カテストでは測定結果の低い項目が散見されたが、本来の体力や運動能力に加えて、ルール理解や慣れの不足も影響していると考えられる。

5. 体カテストと質問紙調査の関連(2～6年生)

本章では2章および3章で示した質問紙調査の結果と、4章の体カテストの結果との関連を分析する。体カテストの結果を総合評価のC以上とD以下(4章1節3項参照)に分け、質問紙調査の項目とのクロス集計を行う。

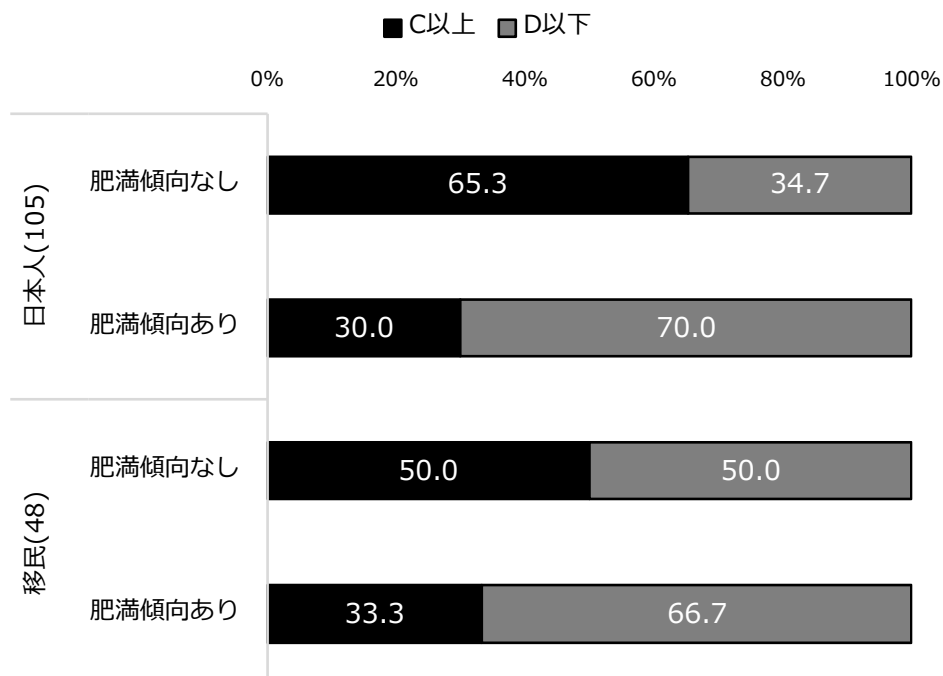
体カテストに関しては、スポーツ庁の報告書をはじめ多くの先行研究において、体格や運動・スポーツの実施時間、意識などとの関連が示されており、本章では移民の児童においても同様の傾向がみられるかを検証したい。なお、サンプル数が限られるため、本調査における傾向を把握することとまるものであり、その点を踏まえて参照されたい。

5.1 肥満度と体カテストの関連

図表 5-1 では肥満度と体カテストとの結果を、日本人・移民に分けて示している。肥満度に関してはローレル指数に基づくカテゴリー(4章2節2項参照)を用いるが、サンプル数を考慮し「やせ」「やせ気味」「ふつう」を「肥満傾向なし」、「肥満気味」「肥満」を「肥満傾向あり」として、肥満傾向の有無による分析を行っている。

体カテストの総合得点が「C以上」であった割合をみると、日本人では肥満傾向なし 65.3% > 肥満傾向あり 30.0%(以下同)、移民では 50.0% > 33.3%となり、いずれも肥満傾向のない児童のほうが体カテストの総合得点は良好である傾向がみられた。

図表 5-1 肥満度と体カテストの関連

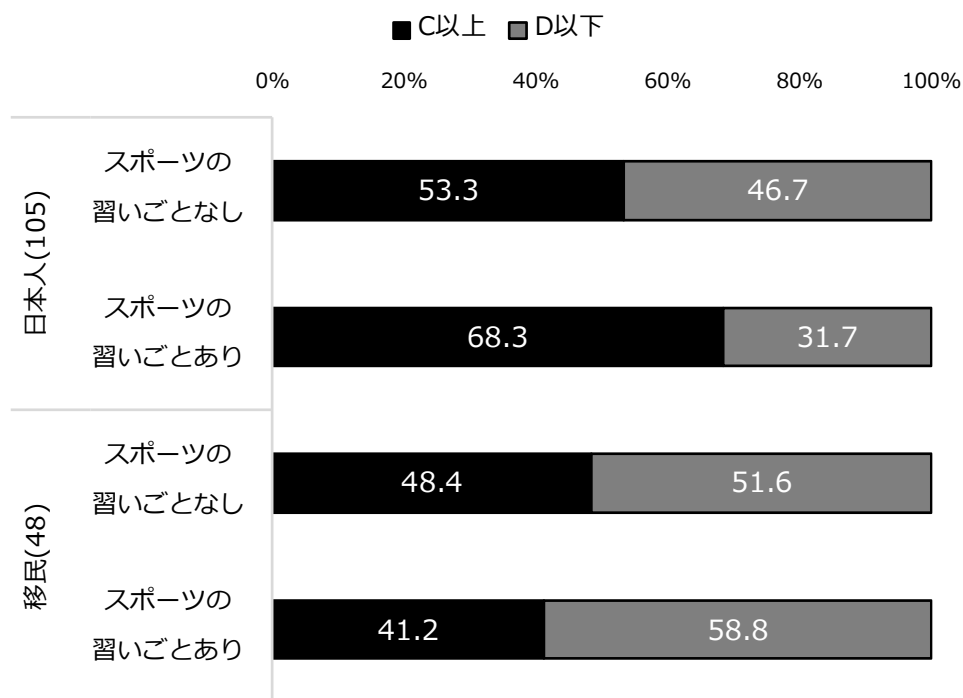


5.2 スポーツの習いごとの有無と体カテストの関連

図表 5-2 ではスポーツの習いごとの有無と体カテストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。習いごとの有無に関しては、2 章 4 節における「運動・スポーツの習いごと」に該当する項目を 1 つでも選択しているケースを「スポーツの習いごとあり」、1 つも選択していないケースを「スポーツの習いごとなし」と分類している。

体カテストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人ではスポーツの習いごとなし 53.3% < スポーツの習いごとあり 68.3% (以下同) で、スポーツの習いごとをしている群で若干高かった。一方、移民では 48.4% > 41.2% となり、スポーツの習いごとの有無と体カテストとの明確な関連はみられなかった。図表は割愛するが、日本人では高学年のほうで習いごとの有無による体カテストの差が顕著になるのに対して、移民ではそのような傾向がみられなかった。背景として、スポーツの習いごとと家庭の社会経済的背景 (Socio-Economic Status, SES) との関連が日本人と移民とで異なる可能性があるほか、体力には出身国や地域での運動経験なども複雑に関与していると推察される。

図表 5-2 スポーツの習いごとの有無と体カテストの関連

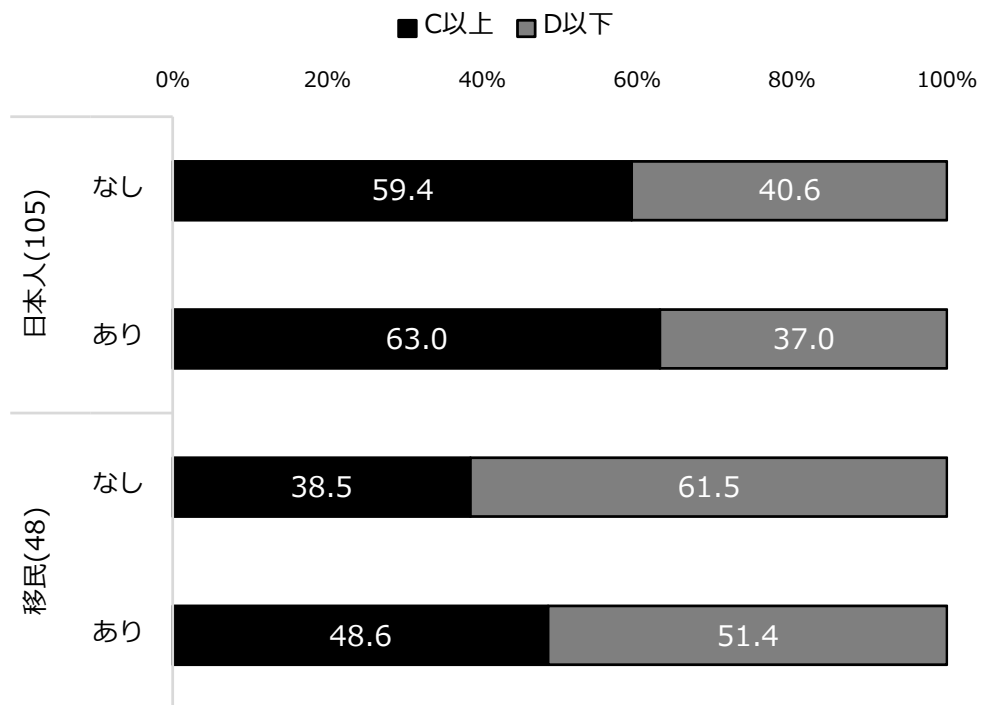


5.3 学校以外でのスポーツ・運動遊びの有無と体カテストの関連

図表 5-3 では学校以外でのスポーツや運動遊びの有無と体カテストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。学校以外でのスポーツや運動遊びの有無に関しては、2 章 8 節の図表 2-8-5 で使用した分類を用いている。

体カテストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人では学校以外でのスポーツや運動遊びなし 59.4%、あり 63.0%(以下同)であった。一方、移民ではなし 38.5%<あり 48.6%となり、10 ポイント程度の差がみられた。本項では実施の有無のみで分析しており、その内容や強度などの詳細な調査が今後求められる。

図表 5-3 学校以外でのスポーツ・運動遊びの有無と体カテストの関連

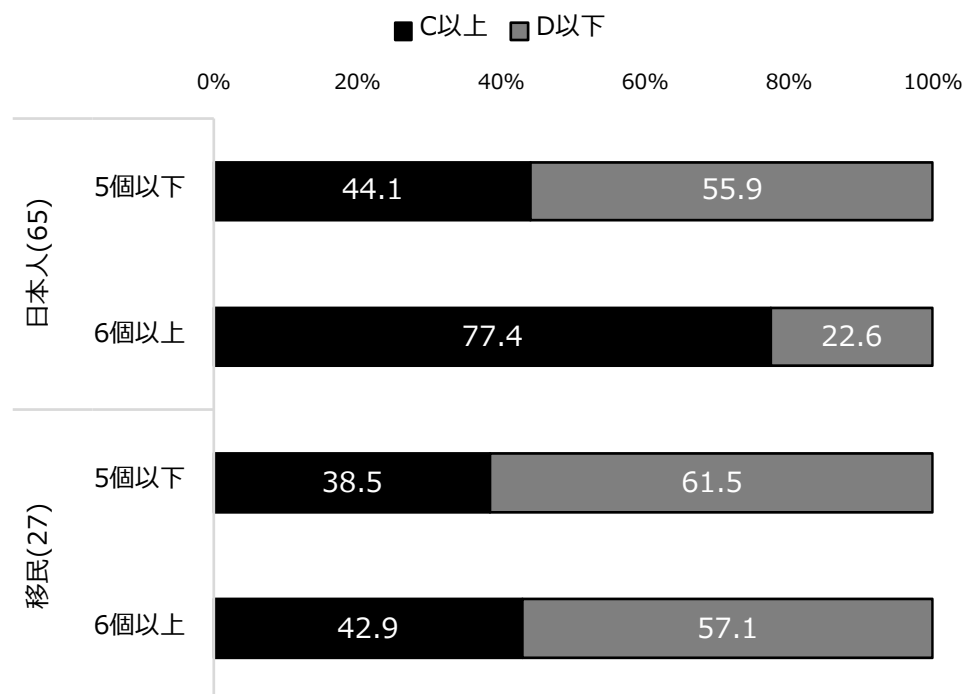


5.4 好きな単元と体力テストの関連

図表 5-4 では体育の授業で好きな単元と体力テストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。好きな単元に関しては、2章2節で説明した質問項目について、「好き」を選んだ個数が5個以下か6個以上かで区分して分析に用いている。

体力テストの総合得点が「C以上」であった割合をみると、日本人では好きな単元が5個以下44.1%<6個以上77.4%(以下同)と顕著な差が確認された。一方、移民ではそれぞれ38.5%、42.9%と、差はみられなかった。日本人では体育における好き嫌いと体力との関連があるのに対して、移民では両者の関連が小さい可能性が指摘される。2章2節で述べたように、移民の場合、個々の運動に対する得手不得手や技能の高さよりも、日本ではじめて触れるスポーツへの新鮮さや、馴染みの薄い活動への戸惑いが好き嫌いに影響していると考えられ、そのため体力との関連がみられないものと推察される。

図表 5-4 好きな単元と体力テストの関連



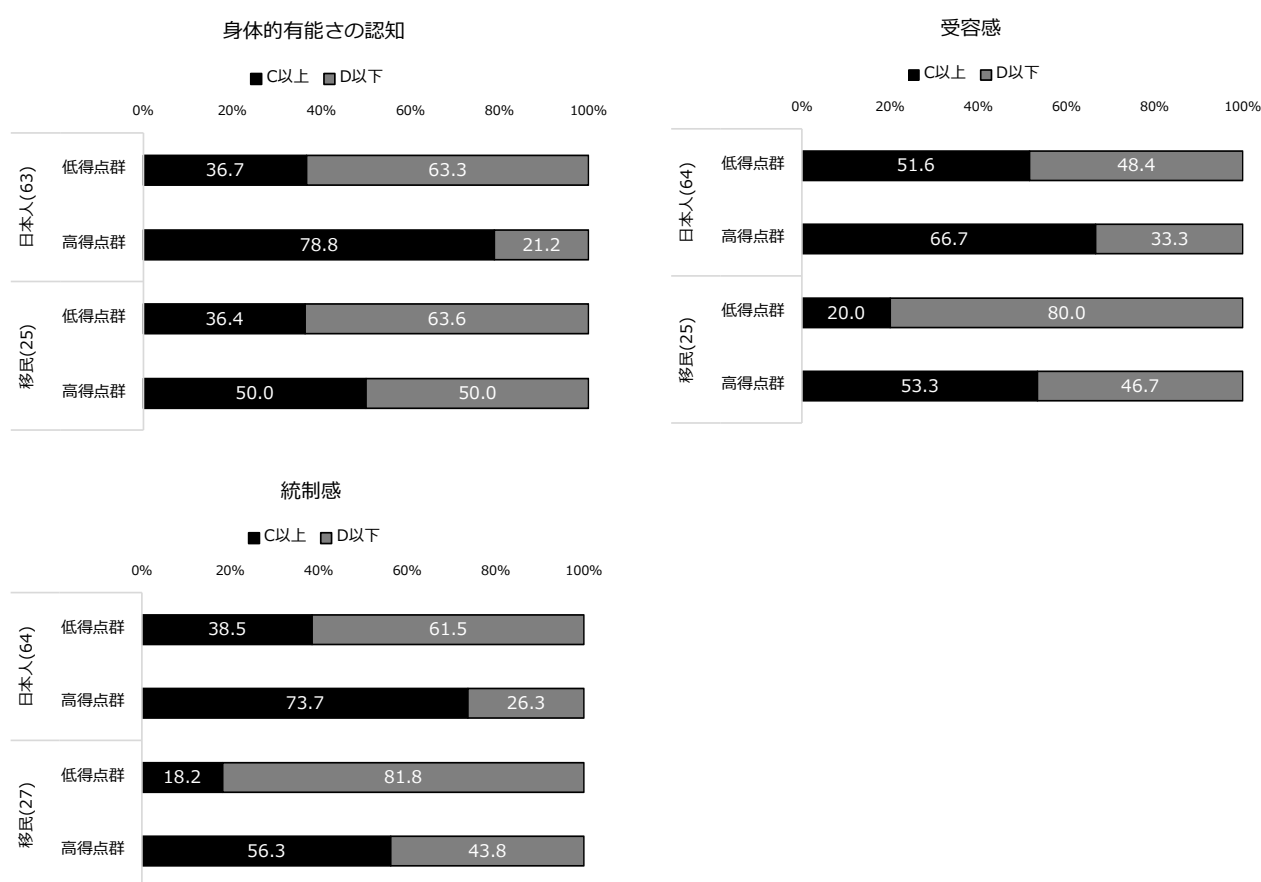
5.5 運動有能感と体カテストの関連

図表 5-5 では運動有能感と体カテストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。運動有能感に関しては 4 年生以上を対象とし、2 章 10 節で説明した質問項目に基づき「身体的有能さの認知」「受容感」「統制感」の各カテゴリーの回答を得点化した。7 点以下を低得点群、8 点以上を高得点群として二分し、分析に用いている。

体カテストの総合得点が「C 以上」であった割合に着目すると、まず日本人では「身体的有能さの認知」の得点群別には低得点群 36.7% < 高得点群 78.8%(以下同)、「統制感」では 38.5% < 73.7%と、40 ポイント前後の大きな差がみられた。「受容感」でも同様に高得点群のほうが C 以上の割合が高いものの、51.6% < 66.7%と、ほかのカテゴリーに比べると差は小さかった。

移民でも「身体的有能さの認知」36.4% < 50.0%、「受容感」20.0% < 53.3%、「統制感」18.2% < 56.3%といずれも高得点群のほうが体カテスト「C 以上」の割合は高い結果となったが、日本人と比べると「受容感」の得点群別の差が大きい点が特徴といえる。2 章 10 節を振り返ると、移民のほうが受容感は低く、特に先生からの励ましを受ける機会は少ない傾向がみられた。体カテストの結果が低い移民の児童は、体格や運動経験の問題に加え、言語の課題もありテストのルールや意義を十分に理解できていない可能性がある。そのような子どもたちがほめられる経験を十分に積めていない点は、移民の運動・スポーツを考える上で重要な課題といえる。

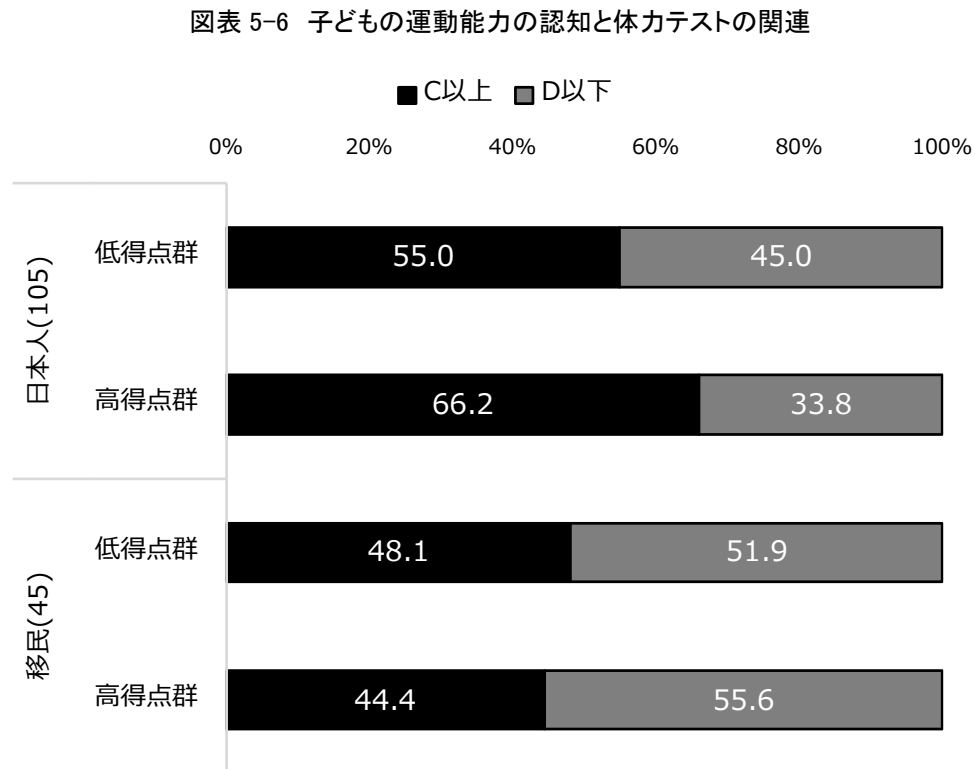
図表 5-5 運動有能感と体カテストの関連



5.6 子どもの運動能力の認知と体力テストの関連

図表 5-6 では保護者による子どもの運動能力の認知の度合いと体力テストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。子どもの運動能力の認知の度合いに関しては、3 章 6 節で説明した 4 つの質問項目の回答を得点化し、10 点以下を低得点群、11 点以上を高得点群と二分して分析に用いている。

体力テストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人では低得点群 55.0% < 高得点群 66.2% (以下同) と、高得点群のほうが 11.2 ポイント高かった。一方、移民ではそれぞれ 48.1%、44.4% と、顕著な差はみられなかった。

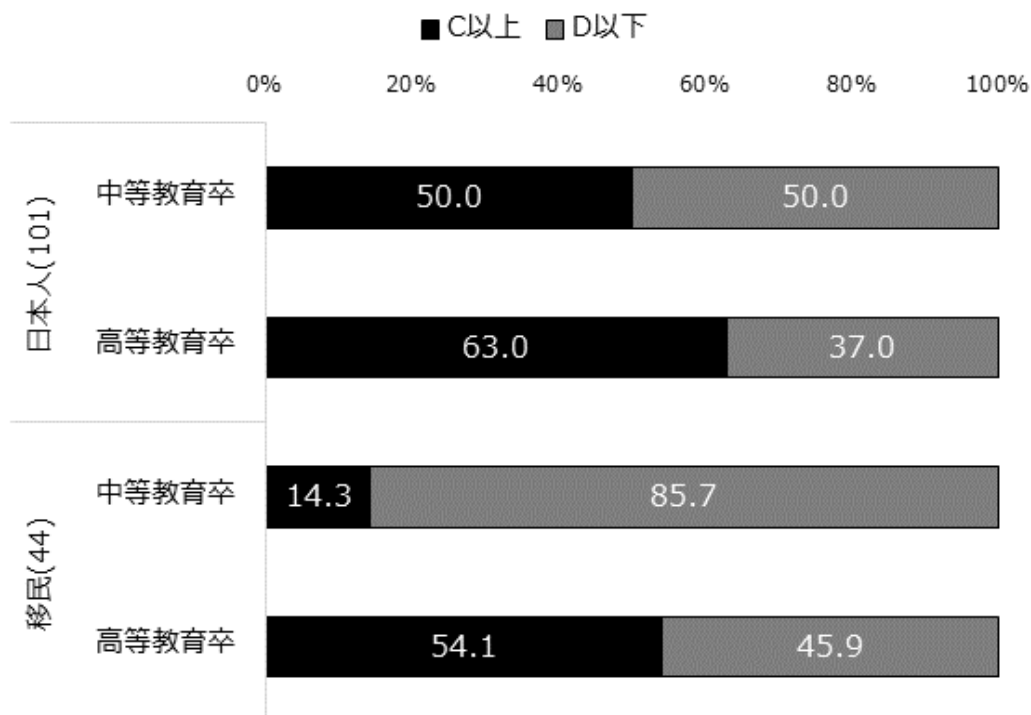


5.7 母親の学歴と体カテストの関連

図表 5-7 では母親の学歴と体カテストとの関連を、日本人・移民に分けて示している。保護者の学歴は、家庭の SES を示す指標のひとつとして、学術研究において頻繁に用いられている。本項で扱う母親の学歴については、最終学歴として回答された学校のうち「中学校」「高等学校」に該当する場合を「中等教育卒」、「専門学校・各種学校」「高専・短期大学」「大学・大学院」に相当する学校段階を「高等教育卒」と分類した。

体カテストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人では中等教育卒 50.0% < 高等教育卒 63.0% (以下同) と高等教育卒の割合が高く、移民では 14.3% < 54.1% とさらに顕著な差がみられた。ただし、中等教育卒は本データの約 2 割にとどまりサンプル数が限られるため、結果に関しては慎重な解釈が求められる。子どもの体力格差に注目が集まり、複数の先行研究で SES との関連性が指摘されているが、特に移民の中でも社会経済的に不利な立場にある子どもたちの状況については、今後も継続的な検討が必要である。

図表 5-7 母親の学歴と体カテストの関連



コラム④ 運動会

A 小学校では毎年運動会が行われ、多くの保護者や地域の方が参観に訪れる。来賓席などの観覧席の案内には、日本語に加えて英語や中国語の表記もみられる。それ以外では、ところどころで外国語の会話が聞こえる程度で、全体的にはほかの小学校と大きく変わらない光景である。リレーメンバーを紹介する放送では、外国につながる児童と思われる名前も多く読み上げられ、子どもたちは軽快に走り抜けていく。4章1節で示した通り、移民児童の50m走の平均値は日本人に比べて有意に低いものの、これはあくまで平均値の比較であり、移民の中にも優れた記録をもつ児童がいる。

一方で、児童は運動会より前の体育で、短距離走やかけっこなどの陸上運動系の単元を経験しているが、「まずトラックで自分のコースをまっすぐ走らせることに苦労する」という教員の声も聞かれる。短距離走のように比較的シンプルなルールであっても、馴染みのない児童がいて、徐々に適応している。運動会当日も、徒競走で自分のコースやスタート位置を十分に把握していないと思われる移民児童がみられ、その場で教員が個別に声掛けをして対応していた。どの児童も懸命にゴールを目指して走る姿には、子どもの属性や順位にかかわらず、保護者や地域の方から終始あたたかい声援が送られていた。

A 小学校の調査からみる日本の小学校の国際化に向けた課題

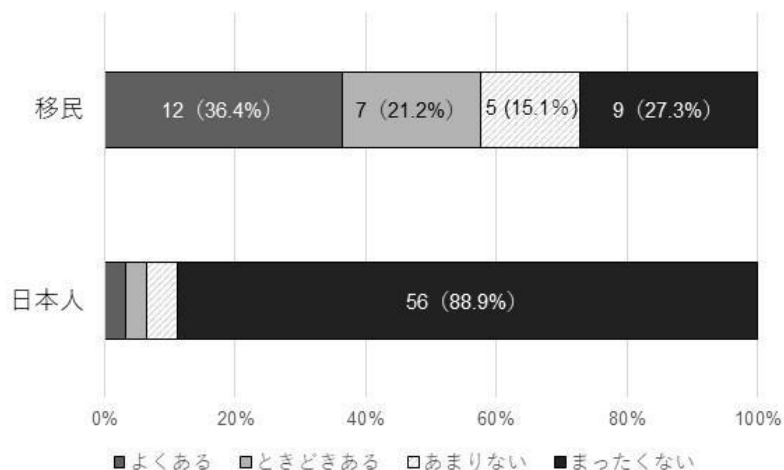
東京大学大学院総合文化研究科 准教授 高橋 史子

本調査は、国際化が進む東京 23 区内にある A 小学校の子どもたちを対象とした運動・スポーツに関する実態調査であるが、学習や学校生活についても多くの示唆を得ることができた。本稿では、調査結果をもとに、A 小学校の事例から日本の小学校における国際化の課題について、特に移民児童の言語状況と将来展望に焦点を当てて考察する。

移民家庭の言語状況

本調査によると、少なくとも一人の親の第一言語が日本語以外である家庭が全児童の 3 割を占めていた(図表 1-5)。保護者の言語は 14 言語に及び、日本語で複雑な会話が可能な移民保護者は 2 割以下であった。全児童の 2 割が外国生まれで、移民児童の滞日年数は平均 4.5 年である(図表 1-1)。一方で、移民家庭の子どもの約 6 割は日本生まれの「移民 2 世」に該当する。

4~6 年生の移民児童の 4 割以上が、自分の考えを最も伝えやすい言語として日本語を選んでいる(図表 1-4)。また、移民児童の約 58% (36.4+21.2) が家族のために通訳を行った経験があると回答している(図表 A)。この結果は、移民保護者が子どもの日本語力に頼る状況が多いことを示している。



図表 A: 「家族の通訳(日本語や手話など)をする」の回答(移民・日本人児童)

近年、子どもが保護者の通訳を務めることは、ヤングケアラーの視点からも注目されている。特に、保護者の子どもへの過度な依存が、中学生や高校生になったときに早期の自立を促すリスクが指摘されている(坪田 2018; 高橋 2023)。そのため、移民保護者の日本語力を支援する取り組みが重要な課題となる。また、親子関係を良好に保つためには、母語教育の推進も必要である。通訳役として子どもが親に依存される度合いが増すことで、親の権威が低下し、家庭内でのしつけが困難になる可能性があるからだ。

児童の将来展望

4～6年生の移民児童の半数以上が「将来、日本以外の国で学びたい」と考えている(図表割愛)。また、「海外の文化を学ぶ」「多文化を理解する」「海外の人と働く」という意識も日本人児童より高い割合で示されている(図表 2-14)。この結果は、移民児童が国際的・多文化的な視野を持つことを示唆している。一方で、A 小学校の全児童の 2 割が外国生まれであるにもかかわらず、日本人児童が海外や多文化に関心を深める機会は限られているようだ。

大学教育では、留学生が増えれば学内文化も国際的になるという考えは「神話」として批判されている(Knight 2011)。つまり、文化の違いを肯定的に捉える環境を整えなければ、生徒が国際的視野を育むことは期待できない。小学校でも、児童同士の差を強調しすぎない形で、多様な文化や宗教の存在に気づかせるカリキュラムや学校文化作りが求められるといえるだろう。

まとめ:A 小学校の事例から示唆される課題

A 小学校の児童の言語状況と将来展望に着目して考察した結果、国際化する小学校の課題としては以下の点が示唆される。

- 移民保護者の日本語力を支援するとともに、母語教育の重要性を認識し、学校や関連機関が協力して具体的な方策を模索すること。
- 国際色豊かな学習環境を活かし、文化の違いを肯定的に捉えるカリキュラムや学校文化を整備し、日本人・移民児童双方の国際性を高める教育環境を構築すること。

今後さらに詳細な調査結果に基づき議論を深めていくことが求められている。

参考文献

坪田光平 (2018) 「生活保護家庭に育つペルー系ニューカマーの子どもの将来展望:「親子関係」と「重要な他者」に注目して」『移民政策研究』10, 79-94.

高橋史子(2023)「多様性と平等はどのように両立できるのか」『月刊高校教育 5 月』68-69.

Knight, J. (2011). Five myths about internationalization. *International higher education*, (62).

まとめと考察

本研究で明らかになった移民の児童・保護者の特徴を以下にまとめる。

児童の特徴(2章参照)

1. 体育の单元では水泳(水遊び・水泳運動)を好む児童が特に多い

水泳やボールを使用する单元を好む児童が多い一方で、器械運動の单元では、日本人に比べて「好き」と回答する割合が低い。

2. 運動・スポーツの習いごとをしている児童は少なく、スポーツや体を動かす遊びの時間をみると長時間層が少ない

運動・スポーツの習いごとをしている割合は 36.8%で、日本人児童に比べて約 20 ポイント低い。週あたりのスポーツや運動遊びの時間をみると、1～420 分未満(1 日平均 1 時間未満)の児童が 50.0%と多く、1 日平均 3 時間以上の児童は 7.7%で、日本人の 3 分の 1 程度である。

3. 学校でスポーツや運動遊びをしている児童が少ない

校内でスポーツや運動遊びをしている児童の割合は、日本人児童が 90.0%であるのに対して、移民は 70.4%であった。特に高学年では差が顕著である。

また、ドッジボールやおにごっこは属性による実施率の差が大きく、ドッジボールでは最も実施率の高い日本人男子で 81.5%であるのに対して、移民女子は 35.0%であった。同様に、おにごっこでは日本人女子 73.2%、移民男子では 47.1%であった。

4. 図書館や家族の勤め先で遊ぶ児童が多い

日本人児童と同様に、自分の家や公園で遊ぶ児童が多い。加えて、図書館は 53.7%、家族の勤め先は 38.9%と、日本人児童に比べてその割合が高い。

保護者の特徴(3章参照)

1. 子どものスポーツに対する期待は高い

約 9 割が子どもにスポーツを習わせたいと考えている。スポーツを通じた多様な人びととの交流や、選手としての活躍への期待も、日本人の保護者に比べて高い。

2. 一方で、スポーツの習いごとに関する情報は不足している

「どこでスポーツを習えるのかわからない」は日本人 25.6%に対して移民は 51.5%と、大きな差がみられた。また、スポーツにおいて「子ども同士のコミュニケーションが難しい」と考える親も 42.4%と、日本人に比べて高かった。

3. 子どもの運動能力に対する認知度は低い

特に「投げる力(ソフトボール投げの記録など)」や「持久力(シャトルランの記録など)」を把握している保護者は、日本人に比べて少ない。

体力テストの特徴(4～5章参照)

1. 日本人に比べて平均値の低い項目がみられる

反復横跳び、シャトルラン、50m 走の 3 種目において、日本人との間に有意な差がみられた。

2. 総合評価でも日本人に比べて低い傾向にある

体力テストの総合得点が「C 以上」であった割合をみると、日本人 62.0%、移民 49.1%で、移民のほうが10ポイント以上低かった。E 評価は日本人 12.1%、移民 23.6%であった。

3. 先生や友だちからほめられる経験との関連がみられる

運動有能感をたずねた項目のうち、「受容感」(「先生が励ましてくれる」「友だちが励ましてくれる」)の得点群別に体力テストの総合得点が「C 以上」であった割合を比較すると、日本人に比べて低得点群と高得点群の差が大きい傾向が確認された。

以上が本調査における主な結果のまとめである。A 小学校では教員が日々、日本語が通じない子どもを含めた指導や学級運営に尽力し、移民の少ない学校では発生しない特別な対応も多く抱えている。A 小学校には通訳の派遣も行われているものの、すべての授業に随行するわけではなく、保護者対応においては子ども以上に日本語で十分にコミュニケーションが取れないケースが多い。このような日々の課題は、基本的に各教員の個別対応に依存しているのが現状である。体育やスポーツのみならず、移民の児童を取り巻く学校教育や生活環境全体での対策が求められる。

ここからは、移民の児童・保護者に対する包括的な支援の充実を前提に、子どもの運動・スポーツにおける課題に焦点を当てたい。現在の学校体育や校内の活動の限界を認識し、教員の個別対応にとどまらない俯瞰的な視点から、課題解決に向けた方向性を考えたい。

1. 子どもたちの健康を維持する—移民を支援する視点から

近年、諸外国では子どもの健康的な生活習慣の形成に資するガイドラインが設けられ、身体活動量の基準が示されている。身体活動量とは、外遊びや運動・スポーツを含め、日常生活の中で子どもたちがどれくらい身体を動かしているか、その時間や強度を示す指標である。適切な身体活動量を保つことは、子どもの心身の健康維持において重要とされる。今回の調査結果からは、移民の子どもたちは普段の遊びや習いごとで身体を動かす機会が日本人に比べて少なく、学校体育が貴重な運動の時間となっている様子がうかがえる。そのため、健康維持の観点からは、移民の児童には外遊びやスポーツを通して身体を動かす機会をさらに増やすことが望まれる。

第一に、体力が低い層への重点的な支援が求められる。調査結果からは、体力テストの総合評価が C 以上の児童も半数近くいる一方で、体力テストに不慣れな点を考慮してもなお、特に体力が低く不利な状況にある児童が一定数みられる可能性が示唆された。こうした児童には、生活面を含む包括的な支援を前提に、健康状態を把握しながら身体活動量にも配慮する必要がある。

第二に、習いごとや遊び場所に関する情報提供が必要である。保護者を対象にした別の調査では、地域に密着したクラブチームが見つげづらく、情報が得られずに苦勞する保護者の姿が明らかにされているが、本調査からは移民の保護者にとってこの問題がさらに大きな課題となっている状況が浮かび上がった。習いごとについては、経済状況や家庭の方針によって参加が難しい場合も考えられるが、積極的に運動やスポーツに取り組みたいと思う子どもに機会を提供できるように情報の整理や発信が求められる。

2. スポーツを通じた共生を目指す—子どもたちの多様性を活かす視点から

移民の子どもたちに関しては、文章の読解や言葉のコミュニケーションを多用する教科に比べ、体育では問題が生じにくいと認識される傾向がある。そもそも、スポーツは国境を越えた共生の手段として広く認識され、国際交流を目的として諸外国の伝統的な運動遊びや種目を取り入れたイベントは各地で開催されている。しかし調査結果からは、日常の運動やスポーツの場において、異なる背景をもつ子どもたちが交わる機会が限られている状況が示唆される。このようなギャップを埋めるために、子どもたちが日常のスポーツを通じて言語の壁を越えて交流できる環境が求められる。

第一に、学校における遊びの多様性を尊重する取り組みが重要である。A 小学校では、外遊びのできる休み時間になると、ドッジボールやおにごっこを楽しむ児童が校庭の中心を占める。似た光景は多くの学校で見られるが、今回の調査結果からは、このような多数派の遊びに参加しているのは日本人児童に多いことが明らかになった。つまり、校庭では日本人児童のローカルルールが通用しやすい遊びが中心に展開されている。

「子どもの遊びやスポーツは言葉を超えている」という捉え方を改め、すべての児童が参加しやすい環境を整える工夫が必要である。理想的には、日本人と移民の子ども同士のやり取りを通じて新たなルールや遊び方が生まれることが望ましいが、現状ではそのような状況には至っていない。大人が適度に手助けをしながら、新しい遊びを取り入れたり、既存の遊びに別のルールを加えたりする工夫が求められる。近年では子どもの遊びやスポーツの資格保有者が増えており、サポートや見守りの役割が期待される。

第二に、長期的な視点では、体育の内容や指導方法の再検討が課題としてあげられる。現行の学習指導要領では、体育科の目標として「体力や技能の程度、年齢や性別、障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの特性や魅力を実感したり、運動やスポーツが多様な人々を結び付けたり豊かな人生を送ったりする上で重要であることを認識」することが掲げられている。一方で日本の体育では、すべての子どもが同じ水準に達する指導が重視されてきた。これにより、子どもたちは授業時間内で多種多様な身体活動や運動を経験できるようになったが、「体育嫌いのスポーツ好き」が生まれやすい状況も指摘されてきた。

今回の調査結果からも、学校体育が移民児童にとって貴重な運動機会となる正の側面と、言語や文化の壁を感じさせる負の側面の双方が浮かび上がった。また、近年はマイノリティの研究が進む中で、体育そのものの課題がより顕在化している。たとえば LGBTQ+にとっても体育は困難を抱えやすい場であり、専門家からは「体育の目的の再考」が提言されている。本研究でも速報版の公開以降、「自分の地域でも移民児童が多く、対応に悩んでいる」という声が寄せられている。

このような現状を踏まえ、現行の体育が抱える課題を整理し、多様な背景をもつ子どもたちが安心して参加できる環境づくりが求められる。指導要領で示された理念を現実のものとするには、技能の習得にとどまらず、子どもたちが互いの特性や背景を尊重しながら楽しめる授業のあり方を模索する必要がある。移民の児童は支援が必要である一方、複数の言語を話す能力や多様な得意分野など、その強みに着目し自己肯定感を育むとともに、彼らのもつ文化の社会的価値を高める「ストレングス・アプローチ」も重要である。スポーツは比較的取り組みやすい分野と考えられるものの、体育においてその可能性が十分に検討されてきたとは言い難い。今後は実践例を蓄積し、将来的には指導要領や子どもの体育・スポーツをめぐる施策へと反映させることが期待される。

参考文献

- 藤木大三,2012,「アメリカの小学校体育授業に関する一考察—ワシントン州スポケーン市 Brentwood、Indian Trail 両小学校の事例より—」『教育学論究』4:71-77.
- 今西ひとみ,2021,『米国の子ども向け地域スポーツ活動—日本人家庭にみる異文化適応戦略—』,明石書店.
- 国立教育政策研究所「OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA)」. <https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/> (最終閲覧日:2024年12月6日)
- 文部科学省,2018,『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編』.東洋館出版社.
- 文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課監修,2015,『児童生徒等の健康診断マニュアル 平成27年度改訂』,日本学校保健会.
- 額賀美紗子・三浦綾希子・高橋史子・徳永智子・金侖貞・布川あゆみ・角田仁,2022,『外国につながる生徒の学習と進路状況に関する調査報告書—都立高校アンケート調査の分析結果—』,東京大学大学院教育学研究科.
- 額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子編著,2019,『移民から教育を考える—子どもたちをとりまくグローバル時代の課題—』,ナカニシヤ出版.
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎,1996,「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」『スポーツ教育学研究』16(2):145-155.
- 岡澤祥訓・木谷博記・木谷真佐美,2001,「小学校低学年用運動有能感測定尺度の作成」『奈良教育大学紀要』50(1):91-95.
- PEGP 研究プロジェクト,2024,「LGBTQ+支援の専門家が語る学校体育の現状と未来」. https://drive.google.com/file/d/19lzbW9O0bxDn_Y5ik68Qwf6iAbuUO9DG/view (最終閲覧日:2024年12月6日)
- 笹川スポーツ財団,2017,『小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究』.
- 須藤康介,2020,「外国にルーツを持つ生徒の学力の実態分析—全国レベルの量的把握の試み—」『社会と調査』25:56-67.
- スポーツ庁,2023,『令和5年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書』,スポーツ庁.
- Takafumi Tomura, Takahiro Sato, Ryan T. Miller & Yu Furuta, 2024, *Japanese Elementary Classroom Teachers' Experiences with Parental Involvement of Immigrants Regarding Physical Education*. *Education* 3-13, 52(2), 185-200.
- 恒吉僚子・額賀美紗子編,2021,『新グローバル時代に挑む日本の教育—多文化社会を考える比較教育学の視座—』,東京大学出版会.
- 植田俊,2014,「ニューカマー外国人との『共生のまち』づくりに向けた社会関係の再編におけるスポーツに関する研究—愛知県豊田市保見団地におけるフットサルコート の設立と利用をめぐる—」『SSF スポーツ政策研究』3(1),pp134-141.
- 植田俊・松村和則,2013,「セーフティネット化する移民のスポーツ空間—群馬県大泉町のブラジル・フットサル・センター (BFC) の事例—」『体育学研究』58(2),pp445-461.
- A 小学校ウェブサイト.
- A 小学校令和5年度学校要覧.

A 小学校の児童および保護者の皆様、ならびに先生方には、調査・測定へのご協力を賜り、心より感謝を申し上げます。

東京 23 区内 A 小学校 共同研究
国際化が進む公立小学校における子どもの運動・スポーツ実態調査

2025 年 2 月発行

発行者 公益財団法人 笹川スポーツ財団

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 3 階

TEL 03-6229-5300 FAX 03-6229-5340

E-mail info@ssf.or.jp URL <https://www.ssf.or.jp/>

無断転載、複製および転載を禁止します。引用の際は本書が出典であることを明記してください。

本事業は、ポートルースの交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました。

